

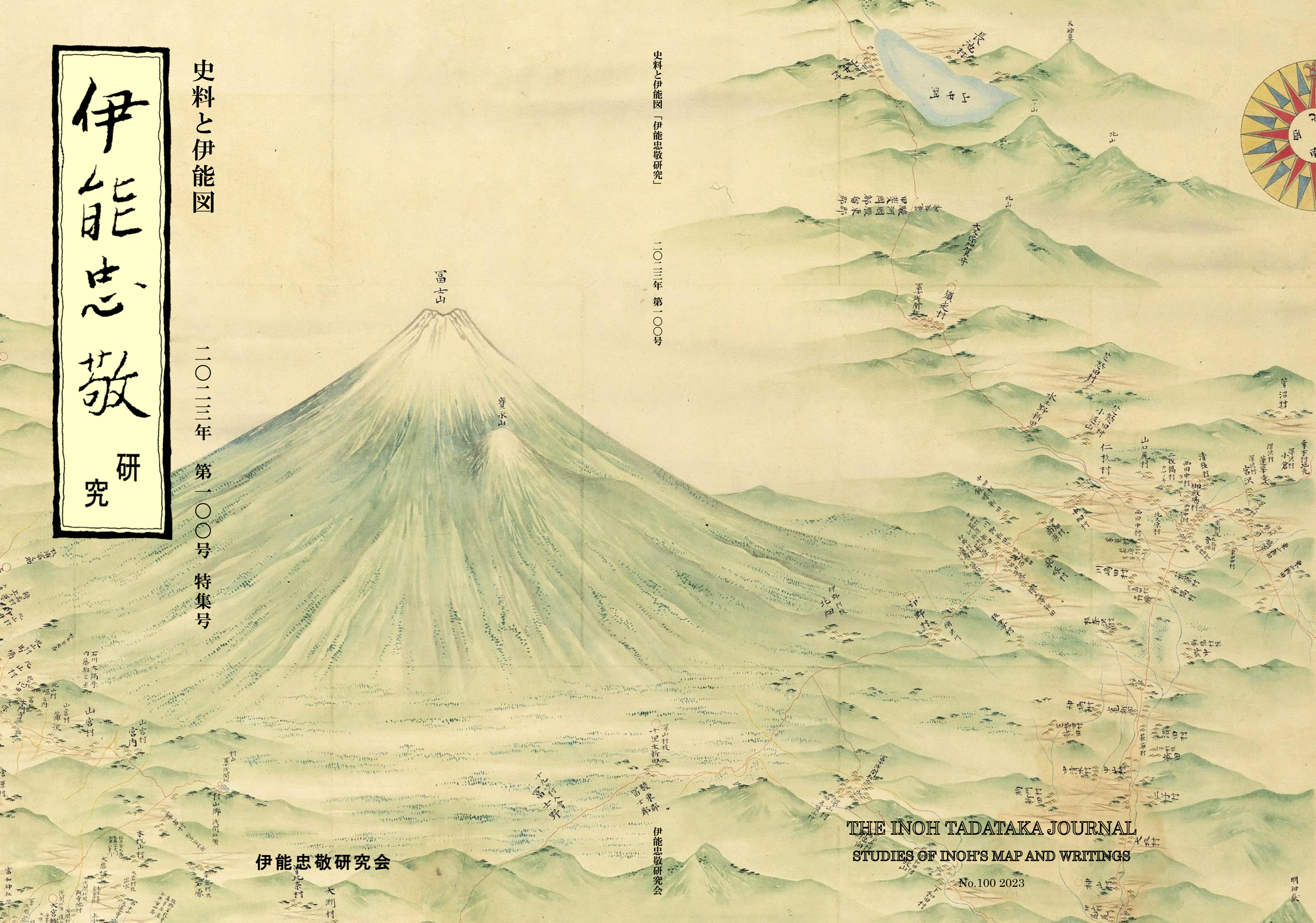
伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇二三年 第一〇〇号 特集号

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇二三年 第一〇〇号



伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.100 2023

表紙解説

国立国会図書館蔵

伊能大図 第100号 甲斐 駿河（富士山）

今回の表紙は、誰もが知っている「富士山」である。伊能図の大図214枚には、索引番号が付いており、富士山の図は第一〇〇号である。他の大図と比べても大判で、表紙はこの図の富士山を含む東側に当たる。裏表紙側の富士山の裾野を南北に連ねた測線は、北側が前号の表紙に続き、第八次測量で御殿場から、須走を通り麓坂峠を越えて山中湖、甲府に向かう道の測線である。御殿場の南側は、第九次測量の帰路で三島から御殿場に繋いだ測線である。

富士山は、日本の中央部に位置し、世界文化遺産にも登録された日本の象徴ともいえる山である。伊能図の山の表現は、側面から見た形で描かれているため、富士山の図は、地図というより、1幅の絵画のようである。伊能忠敬も富士山には特別な思いがあったであろう。独立峰であるため、遠隔地からも容易に確認でき、中図や大図には夥しい方位線が集中している。その方位線の集中するところが山頂を示す。「大図」には方位線が描かれていないが、山体を廻る測線から山頂の方位が測られており、下図や下図を繋ぎ合わせた広域の下図、すなわち寄図には墨や朱墨を使わない白径と呼ばれる線が山頂目掛けてひかれていたはずである。

伊能忠敬の測量記録の中に遠方の山や島の方位を測った「山嶋方位記」という簿冊が残されている。それによると、富士山の方位測定は、274箇所ですべて測定回数は1143回であるという（47号）。

「山嶋方位記」は方位の記録なので、通常、山の高さの記録はないが、富士山は、欄外に高さを求めた記録が残っている（47号、74号、76号）。これも忠敬が富士山を特別視していた証であろう。

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）

菱山 剛秀

目次

100号

表紙解説

国立国会図書館蔵

伊能大図第100号 甲斐 駿河（富士山） 菱山 剛秀

祝辞

●『伊能忠敬研究』一〇〇号を祝して 伊藤 友則 1

特集Ⅰ『伊能忠敬研究』一〇〇号に寄せて

●忠敬を伝ふ百号花菖蒲 伊能 洋 2

●伊能家と縁がありまして 伊能 陽子 3

●伊能図を訪ねて 渡辺 貞子 5

●『伊能忠敬研究』五〇号を回顧して 渡辺 一郎 5

●会報一〇〇号を祝う 福田 弘行 7

●50号から60号まで 前田 幸子 8

●『伊能忠敬研究』第一〇〇号に寄せて 鈴木 純子 9

●『伊能忠敬研究』一〇〇号を迎えて 星 埜 由尚 10

●伊能忠敬研究会と私 宮内 敏 11

●会誌のカラー化・A4化の頃 高安 克己 12

●伊能図に導かれて 菱山 剛秀 13

●会誌発送に携わった四年間の思い出 高宮 勲 14

●発送担当、四年間の記録 河崎 倫代 15

●私の思い出 石川 清一 16

●測量士が見た伊能忠敬 井上 辰男 17

●私の伊能忠敬研究会 馬場 良平 18

特集Ⅱ伊能図の研究

●伊能図の世界 鈴木 純子 19

●「全国巡回フロア展」開催状況 星 埜 由尚 26

●伊能図研究一〇〇年を振り返る 河崎 倫代 27

●測量次別参加隊員 河崎 倫代 37

研究と話題

●江戸府内第一次測量の記録（九） 玉造 功 40

資料

●「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」 連載第三十三回 渡辺 一郎・井上 辰男 50

忠敬談話室

●山口でちよこつと伊能探訪 室山 孝 70

●松本清張「老十九年の推歩」を読む 柏木 隆雄 73

●「伊能忠敬笹山領探索の会」 加賀尾 宏一 75

丹波篠山市から感謝状授与

各地のニュース

伊能測量協力者御子孫宅を訪ねて 馬場 良平 77

南日本放送テレビ番組に協力 室山 孝 79

会員だより

●忠敬を詠ふ（四） 伊能 洋 80

●井口利夫著

『伊能忠敬と間宮林蔵のウス測量』 菱山 剛秀 80

報告【珠洲地震】 河崎 倫代 80

山武のスケッチ（二） 江口 俊子 81

九十九里浜のイワシ漁

新入会員自己紹介 齊藤 文大・佐藤 悦子 82

雉岡 恵一・寺澤 真樹

事務局からのお知らせ

2023年度 総会報告 事務局 84

祝辞

『伊能忠敬研究』一〇〇号を祝して

香取市長 伊藤友則



九十九里町で生まれ、香取市で青年期から壮年期を過ごした伊能忠敬翁は、江戸時代に日本で初めて実測に基づく全国地図を作成した、地理学・測量学の泰斗として全国に名前が知られております。昨年、立川志の輔氏の創作落語を原作とした、香取市と伊能忠敬翁を巡る物語を描いた映画「大河への道」が上映され、忠敬翁はますます世間の注目を集めております。香取市といたしましても、郷土の偉人である忠敬翁とその功績を、正しく後世に伝え、より多くの方に知っていただくために様々な行事を行ってまいりました。

今から五年前、忠敬翁の没後二〇〇周年目にあたる平成三〇年には、市を挙げて様々なイベントを開催しました。ひとつには、忠敬翁が作成した地図が欧米に伝わる契機となった歴史的な事件であるシーボルト事件を取り上げ、その歴史的事件にかかわった人物のご子孫の方々を招いたシンポジウムを行いました。また、伊能大図を原寸大のパネルにしたものを香取市民体育館に並べる伊能大図フロア展を開催しました。フロア展では、江戸城の大広間にも広げきれなかったという伊能図のスケールの大さを、市民の皆様が堪能していただきました。さらに『大日本沿海輿地全図』完成から二〇〇年目にあたる令和三年には、忠敬翁の偉業を振り返るシンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、歴史地理学を専門とする平井松午徳島大学名誉教授をはじめとする研究チームの方々に、忠敬翁が作成した地図について最新研究成果を発表していただきました。

このように、我々は忠敬翁の歴史とともに数々の節目の年を迎えてまいりました。そして、今年令和五年も、忠敬翁の偉業を語り継ぐ我々にとって特別な年となります。

忠敬翁とその測量隊によって作成された『大日本沿海輿地全図』は、文政四年（一八二二）に幕府に上呈されてから、明治維新を経て明治政府に受継がれました。しかし、明治六年に起きた皇居の火災により、『大日本沿海輿地全図』

は焼失してしまいました。そこで明治政府は、伊能家に保管されていた『大日本沿海輿地全図』の副本を借り受けました。しかし、その副本も、大正十二年の関東大震災による東京帝国大学図書館の火事で失われてしまいました。

すなわち、翁の偉業の証である『大日本沿海輿地全図』は、今年令和五年からちょうど一〇〇年前に完全に失われてしまった、ということになります。しかし、『大日本沿海輿地全図』という「かたち」が失われても、忠敬翁の成した偉業は、今でも忘れられることなく、多くの人々を魅了し続けています。これは、ひとえに忠敬翁の魅力だけで成せるものではなく、翁の歴史を検証し、伝え続けてきた大勢の人々の努力の積み重ねの結果であることを忘れてはなりません。そして、先人たちが繋いできたバトンの先頭にいるのが現代を生きる我々と言えます。そのなかでも、伊能忠敬研究会は、平成八年の創設以来、平成・令和における忠敬研究を牽引されてきたことと存じます。このほど『大日本沿海輿地全図』が失われて一〇〇年目の令和五年に、『伊能忠敬研究』が一〇〇号をむかえることは、大変喜ばしいことにございます。どうか、伊能忠敬研究会が所期の目的に沿って、益々発展されるよう心から祈念申し上げます。お祝いの言葉といたします。

特集Ⅰ『伊能忠敬研究』100号に寄せて

忠敬を伝ふ百号花菖蒲

伊能 洋

この度は「伊能忠敬研究」100号の刊行、心からお祝い申し上げます。誰よりも今は亡き渡辺一郎さん、安藤由紀子さん、そして妻の陽子がどれほど驚いていることでしょうか。

そもそもフランスで発見された「伊能中図」8点の里帰り展が、1995年に佐原市で開催されたことから始まります。この経緯は陽子が「伊能忠敬研究」7号に述べていますが、この年に伊能忠敬研究会が発足し、会員も徐々に全国に渡って増え、鈴木純子さん、星埜由尚さん、前田幸子さんなど専門家の方々のお力添えは大きなものがありました。

62号からカラー印刷に発展、資料をふんだんに載せた研究誌は目を見張るもので、当時の編集長高安克己さん、菱山剛秀さん、河崎倫代さん、宮内敏さんたちの献身的な御努力によるものでした。

私との関わりでは、2001年に渡辺一郎さんが、米国の国会図書館で発見された「伊能大図」の写しを日本で展観する折りに、殆んど線画のみだった大図に「伊能図と同じような彩色をしてヨ」と渡辺さんから強い依頼があり、私のアトリエはほぼ一年、平成の地図御用所となり、芸大の日本画専攻のお嬢さんたちが日ごな画筆を振るうことになりました。

200枚近くに及ぶこの着彩色図は「フロア展」として日本中を巡り、現在は国土地理院に収められています。

私が姉や兄に比べて佐原や忠敬に親しいのは、戦時中に佐原の祖母孝の許に疎開して、忠敬旧宅に三年ほど住んだことが大きいでしょう。当時祖母は今で言えば芸員のような仕事をし、毎日のように日本中から見える見学者の応待をしていて、私がお蔵と呼んでいた文庫倉から書齋まで、地図や測量器具を運ぶ手伝いをしていました。またがつて遊んでいた量程車が、今は国宝になつていて感無量です。

慶応3年生まれの孝は、五代目に当たりますが、忠敬の没年1818年から49年しか歳の差はなく、先祖の一人というよりは、祖父のような感じで親しんでいたようです。

戦後の財閥解体や農地解放などで、我家の経済

もどん底でしたが、忠敬の遺品を一点も散逸させることなく守つたのは、一重に祖母孝の想いだったと考えています。

話は変わりますが、昨年の5月には3年がかりで企画された映画、立川志の輔原作、中井貴一、北川景子、松山ケンイチ出演の「大河への道」が全国公開され、忠敬没後3年の地図御用所にピンを合わせたユニークな視点が話題となりました。志の輔さんは研究会の特別会員でもあり、忠敬のP・Rには大きな力を頂きました。

「忠敬研究」は、まだこれだけで充分と言う訳には参りません。今後とも研究会の皆さまのお力添えを切にお願い申し上げます。

伊能忠敬研究会顧問

伊能 陽子さん

東京都世田谷区のアトリエで、きた。戦中戦後の混乱期に洋さん伊能忠敬から7代目にあたる洋図の祖母が千葉県香取市の家と遺品家、伊能洋さん(75)は、妻・陽子類を伝えた。母は、国の重要文化さんの死がまだ信じられずに、財となった遺品類を同市に寄贈する。「一番びっくりしたのは本人 それを収める記念館ができた。『忠敬先生』は女たちが守って 包んだ紙が地図の下図だった、

くしゃくしゃの村絵図が納戸にあたり。陽子さんが整理を始めた。表装が得意な知人に弟子入りし、古文書教室に通った。元国会図書館勤務の安藤由紀子さんと二人三脚で作業を進めた。1995年春、伊能図を研究していた渡辺一郎さん(80)がパリ郊外で伊能中図(8枚組)を発見した。それを新聞で読み、陽子さんが渡辺さんに電話した。「資料を見ていただけませんか」。針穴

惜別

東京・深川の富岡八幡宮に初詣で、伊能忠敬の銅像の前で11月4日、伊能洋さん撮影



いのう・ようこ

1月25日死去(急性心不全) 75歳
1月28日葬儀

測量の大家の遺品守り

の残る下図や緯度1分の長さを歩測した測量図もあった。この出合いが研究を大きく進めた。フランス中国の里帰り展を機に伊能忠敬研究会が発足した。明るく愛想がよくて名前と顔を覚えるのが特技の陽子さんは、研究会の「マドンナ」だった。99年から2年かけて全国を一周した日本ウォーキング協会、朝日新聞社など主催の「伊能ウォーク」にも二十数回参加。01年には深川の富岡八幡宮に忠敬の銅像が立ち、加藤剛さん主催の映画「伊能忠敬―千年の夢」も公開された。その後も遺品整理は続いた。史料918点を記念館に収め、06年6月に「世田谷伊能家伝存 伊能忠敬関係文書目録」を刊行。「20年かけた仕事が終わってホッとしたのかもしません」と洋さん。研究会顧問だった安藤さんも今年1月4日、75歳で他界。名義代表の渡辺さんは「仲がよかったけれど、人生の退場まで一緒」と天をおくのだ。(清水 勇)

平成22年3月13日 朝日新聞

伊能家とご縁がありました

伊能 陽子

一、ご縁がありました

お配りした小冊子(※文末参照)は、洋の小学校の同級生で現在富士宮市にある大きなリハビリ病院の院長をなさっている高橋伸忠さんと私が、その病院が年一度開催する講演会で対談した時の内容をまとめたものです。たくさん送っていただいたので、今日はこれに沿ってお話をすすめたいと思います。

私は伊能家にお嫁に来て、たまたま忠敬先生とご縁ができました。夫は次男なので関係ないと思っていたのですが、武蔵大学で化学の教授をしていた伊能家七代目である兄・敬が亡くなり、現在のようになくなりましたが、とても運命的なものを感じます。兄・敬が亡くなりましたのが平成七年四月七日でしたが、その前日の四月六日に渡辺さんの記事が新聞に出ました。近所に住む元国土地理院長の金窪さんに奥様を通じて渡辺さんとはどんな方ですかと伺ったら、「面白いおじさんだよ」ということでした。それを兄に言おうと思いましたが死んでしまつて・。その後渡辺さんに私が電話して、それからいろいろのことが始まりました。バイレさんの地図を日本に持ってきて佐原でフランス中図里帰り展、そして研究会の発足となり、現在に至りました。たった一本の電話で人生が変わってしまったと感じています。

二、伊能家の女性たち

兄・敬が『千葉県の歴史』に寄せた「伊能家の女性たち」で書きましたように、忠敬の遺品は祖

母の代までは家の財産として大事に守ってきました。祖母の「こう」は忠敬から五代目にあたり、長女で家つき娘、八十八歳で亡くなるまで、佐原のあの家で暮らしていました。義母の多嘉は鹿児島^{たか}の伊地知家^{いぢち}の出で曾祖父は島津藩史『旧記雑録』を作った人。父は海軍中将だった伊地知季珍^{すえたか}で、榎本武揚の妻・たづの妹が父の二度目の妻という縁戚関係があります。榎本武揚は忠敬の内弟子・箱田良助の次男ですから、以前私たちが鹿児島を訪れた際、しみじみとご縁のつながりを感じました。多嘉は多くの方に研究してもらおうと史料を佐原市に寄付しました。名義は義父でしたが、実際は義母の考えで行ったことです。祖母・こうも筆まめ、物持ちがよく、好奇心が強い。これは伊能家の伝統でしょうか。家に古文書の反古がたくさん残りましたので、安藤由紀子さんの協力を得て整理をしました。二人で『景利日記』の中に記載されている「地震」について探したことがありました。景利さんという方は記録魔で、実に様々なことを記録したり、石や木の実を集めて保存したりしておりました。おそらく旅僧や旅周りの人々の話を聞いて書いたのだと思いますが、この日記を読むと、赤穂浪士事件が三日後には佐原に伝わっていた、などということもわかります。

芳名録が残っています、会報で紹介しておりますように、大勢の方々が佐原の旧家や忠敬さんの遺品を見に来られました。祖母はその方たちに遺品の説明をしておりました。今で言う学芸員の仕事をやっていたわけですが、義姉の話では大変な名調子だったそうです。遺品の寄贈は昭和三年で、昭和三六年四月に記念館がオープンしま

した。私はまだ結婚前でしたが、お蔵に入って義母の言う通りに片付けをしました。長持を見て、すぐ大奥を連想しましたね。洋は子供のころ悪さをして閉じ込められたので、お蔵には入りたくないと言っていました。

義母・多嘉はものすごく勉強して、努力して伊能家の人間になった人です。亡くなる直前まで「時間がない、時間がない」と言っておりました。そして「孫たちへ」という手書きのコピーを残しました。それによると、伊能家の祖先は大和の国から千葉へやってきましたが、もとは藤原氏でその前は白蛇だったということです。孫たちはしっかりと読んでくれないので私の代で終わりがほしいと思っています。

この冊子にも書いてありますように、伊能家では代々、先祖の遺品を保存したり整理したり管理したりする仕事は女性の仕事とされておりました。祖母から義母へ、そして私が受け継いできたわけです。結構大変なこともありまして、どうしてもこんなことを引き受けたのかしらと思うこともあります。「伊能家は女性でもっている」と書かれた義兄・敬の文を読んで勘違いしたのがちよつとまづかったかもしれませんね。でも節目、節目で不思議とご縁があるので、これは運命かなと思っています。

三、伊能七家

伊能家に嫁いできて、墓参りなど先祖からの習慣として行われている行事に連なっております。伊能家の一族のつながりを感じます。伊能家には七つの系統がありまして、「伊能七家」と呼んでいます。

佐藤雅美という方が書いた『お白洲無情』とい

う小説があります。主人公は大原幽学という、やはり千葉の香取のあたりで農政改革をした人なのですが、この中に「伊能茂左衛門」が出てきます。

茂左衛門(節軒)は伊能七家の一つである茂左衛門家の中興の祖と言われる人です。茂左衛門家は戦国期の初代が隠居して立てた家で、国学者・楫取魚彦を出した家でもあります。節軒という方は長生きで、一族を取り仕切って七家の合議制で助け合いをしたり、資金をプールしておくなどのシステムを作ったりしました。茂左衛門家の資料は佐倉の国立歴史民俗博物館へ寄託され、佐倉のほうで収蔵されています。

三郎右衛門家はご存じのように忠敬先生が婿養子に入った家です。忠敬の三郎右衛門家での呼び名は「源六さん」です。忠敬さんの三代前には先ほどもお話ししました『景利日記』を書いた記録魔の伊能景利という人がいました。忠敬先生はこの方に大変影響をうけ、記録することの大切さを学んだといわれております。また昌雄という人がおりまして、この方は隠居後、江戸・深川に住んでいて笛の名手だったそうです。

七左衛門家は佐原の横河岸に本家があり、祖母・この夫の実家です。洋は祖父の家・七左衛門家を継がされました。ですから洋は正式には七左衛門門です。二・三代前のことですが、この家から宮内家に嫁入りした方がおります。(今日ご出席の宮内さんの家です。)

権之丞家は佐原の横宿にあり、書道家の伊能静光さんも会員でした。権之丞家の墓石を見ますと、水戸家の側室の流れが伊能家に嫁に來たことがわかります。

平右衛門家は佐原・諏訪神社の宮司の家です。

大作家は八日市場の七郎右衛門豊秋の家で、佐原の伊能記念館の館長・伊能楯雄さんはこの家の方です。

彦作家は、茂左衛門から分かれた家。以上が伊能七家です。

会員のなかにも、もと伊能さんがいらつしやつて、ご夫婦で会員になられている藤田さんは、奥様がもと伊能姓でいらつしやいます。小池美幸さんも元の姓が伊能さんですが、佐久間先生が調査なさった結果、ご先祖が伊能四郎右衛門さんだということが判明しました。

昨今、「伊能」姓というだけで忠敬さんとはまったく縁戚関係がないのにもかかわらず忠敬の子孫と名乗っている方がいらして、対応に困る場合があります。なかにはご自分で信じ込んでしまっているのか、事実無根の縁戚関係を宣伝する方もおられて、あからさまに否定するわけにもいかず、何となくややむやにして済みますこともあります。

また、一方では神保さん忠敬の父・神保貞恒の実家、窪谷さん、海保さんのように、二〇〇年前のご縁がずっと続いているというお付き合いもございます。中でも会員の藤岡さんは二代にわたって三郎右衛門家と結ばれていて、深いご縁があります。

四、伊能忠敬の墓所

忠敬さんのお墓はご存じのように三か所ありまして、浅草の源空寺、佐原の観福寺、多古の平山家墓地です。源空寺は浄土宗ですが、高橋至時先生の側に葬ってほしいという忠敬の願いを受け入れて、ここにお墓があります。佐原の観福寺は真言宗で伊能家代々の墓所ですが、ここにあるお墓には髪と爪が収められています。山武郡多古町の

平山家墓地にも忠敬さんのお墓がありますが、こは形式だけのお墓です。忠敬さんが伊能家に入るときにいったん平山家の養子になって婿入りしたということと、妻・ミチの母・タミが平山家の出でミチ自身もある期間、平山家で育ったという縁故があるため、建てられたお墓です。なお、平山家は日蓮宗ですが、タミをはじめ伊能家の女性には熱心な日蓮宗の信者が多く、絶対に改宗しなかつたといわれております。

また、佐原の浄国寺は日蓮宗の寺ですが、ここにも伊能家のお墓があります。七左衛門家の墓が一四もありましたが、二〇〇年以上も前のもので表面がすっかり摩耗してしまっていて読めないし、もう古くて墓石が傾いていましたので、整理しました。三郎右衛門家の方はそのまゝ義姉が供養しております。観福寺の七左衛門家の墓は修復いたしました。古い墓を子供たちに残すわけにはいきません。

七左衛門家に残されたのは墓と稲荷だけです。墓については今申し上げました通りですが、稲荷の方は佐原の「※宝寿司」の脇にあります。機会がありましたらどうぞ訪ねてみてください。

※小冊子『人生の挫折の受けとめ方とその乗り越え方』・伊能忠敬翁の足跡をたどって・『【対談】伊能陽子 富士リハビリ病院院長 高橋伸忠(平成一八年六月開催・同病院「心の健康講座」として開催された講演会の記録)財団法人・富士心身リハビリテーション研究所「所報」No.23・2008・6 別冊

※宝寿司(横川岸区)は、閉店してしまいました。

本稿は、2008年11月9日に開催された、伊能忠敬研究会第二回例会の講演を掲載した「伊能忠敬研究」第55号56〜58ページを再録したものです。

伊能図を訪ねて

渡辺 貞子

私達は五十歳の頃から本郷に二十年住んでおりました。或る日、日経新聞のハガキ大の記事に、フランスの或るお嬢さんから「これは日本地図ではないか」とお問い合わせがあったとの記事を見て、夫が新聞社に、その地図を見たいので持主を知りたいと問い合わせました。

暫くして新潟の知らない方から便りが来ました。「私の娘が、その地図の持主のペイレさん宅にホームステイをしておりましたので、ペイレさんから渡辺さんはどの様な方か調べて欲しいと依頼された」との事でした。

それから、フランス通いが始まりました。地図のあったフランスのディジョンの田舎の別荘の屋根裏も見せて頂きました。こうして、一九九五年十月、佐原市で「フランスの伊能中図里帰り展」を開催することができました。

その後、アメリカにあった伊能大図とあわせて展示したいと、再度フランスに行きました。しかし地図は相当傷んでしまっていたので、日本で修理して下さる処を探しましたところ、京都の日本写真印刷株式会社（現、NISHA）が修理を受けて下さることになりました。ペイレ夫妻が地図を持って関西空港に来て下さり、私達は大阪工場にも見学に行きました。京都に通うのが面倒になり、京都に部屋を借りて一年間住みました。鴨川の岸辺を毎朝二人で散歩したことを思い出します。

※。ペイレ氏旧蔵「伊能中図」は、二〇〇三年十一月〜二〇〇四年二月にかけて、日本写真印刷株

式会社によって修復され、現在は同社の所蔵となっている。

観光を兼ねイギリスの海事博物館の小図も見ました。次にイタリアにも行きましたが、地図というより絵の様な美しさでした。

マイアミの桜の終りにワシントンに三泊し、ポトマックの桜を観たり、議事堂、アーリントン墓地等を見、最後の日は土曜日でした。リンカーンの生家を訪ね、その後、アメリカ議会図書館で幸運にもアメリカ大図を見付けることが出来ました。国内では一宮巡り、西国三十三札所を二回巡り、ご朱印の一卷は夫が持って逝きました。後の一卷は私のものとして取ってあります。

会報も一〇〇号になりました。
未永く続きますことを念じております。
ごきげんよう。

『伊能忠敬研究』五〇号を回顧して

伊能忠敬研究会名譽代表 渡辺 一郎

伊能図探究会から伊能忠敬研究会へ

伊能忠敬研究会の前身、伊能図探究会を家内と二人で始めたキツカケは、旧制中学同級生で沼津の開業医だった望月君が出していたミニコミ誌だった。

こういう趣味生活もあるんだなと思い、関心を持っていた伊能図のことを書いて、A3版二つ折り二枚、八頁のパンフのようなもの（？）を作ってみた。そして勝手に古地図の勉強会で知り合った人たちに配り始める。部数は五〇部くらいだったろう。

若い頃、先輩が毎月、葉書一枚の雑誌（？）を知人に配布するのを知っていたので、あまり抵抗感は無かった。

フランスで中図を発見、伊能家との出会い

色々伊能図を見せてもらって、レポートしていたのだが、フランスに伊能図があることを知って、金窪氏から資料をもらいアポをとって訪問したところ、針穴が完備した最上級の伊能中図に出会う。ビックリしたが、朝日新聞がパリ発で「ひと欄」の記事にしてくれた。これを見た伊能陽子さんから電話がかかり、世田谷で安藤由紀子・伊能陽子組が古文書整理中、難渋していた伊能図の下図類を見ることがになり、伊能家との付き合いがはじまった。

ペイレ中図の佐原展示会

いっぽう、フランスの中図を日本でぜひ展示したいと思い、佐原市教育委員会にお願いをした。いま研究会佐原支部長の香取氏が教育次長をしており、御尽力をいただいて一九九五年一月一七日から三日間の展示会が実現した。あとからペイレさんに聞いたところ、地図の由来を色々調べたが、さっぱり分からない。佐原は伊能の出身地というので、何かわかるかと思って、承諾したのだとのこと。ささやかな展示会だったが、日経と朝日、NHKが大きく扱ってくれて、三日間で三、三〇〇人と、予想外の入場者があった。

研究会発足「伊能忠敬研究 第七号」を発行

展示会をキツカケに、会費をいただいて研究会を作ろうということになった。芳賀さんに、三年持てば大丈夫だといわれ、三年分の費用約百万円を、安藤、伊能、清水、斉藤、芳賀氏および渡辺で拠出して発足した。

伊能図探究からの継続で、伊能忠敬研究会の会報は七号から始めることにした。デザインなどは芳賀氏を中心になって、伊能陽子さんたちがまとめたものだ。いまも原型は変わっていない。会報七号の発行日は一九九六年三月一日だった。私は「研究会はいつからやっているのですか」と聞かれたとき、七号の発行日を答えることにしている。

伊能ウオーク催行決定

江戸東京博物館の伊能忠敬展内定をうけて、日本ウオーキング協会（当時歩け歩け協会）から伊能ウオークが提案され、共同して朝日新聞に働きかける。伊能ウオークの成立は、九九年第一八号だった。この企画決定も約三年前だった。

気象庁で伊能大図四三枚発見、国会図書館へ

鈴木純子氏により気象庁で、明治期に模写された伊能大図四三枚が発見され、大ニュースとなった。（九八年第一五号）伊能忠敬展、伊能ウオークの強力な援護射撃となった。朝日新聞では伊能ウオーク担当の堀田記者が努力してくれた。

江戸東京博物館から伊能ウオーク出発（一九九九年一九号）

いよいよ伊能ウオークが江戸博の出発式場から進発したが、出発模様の記事が無いのは残念。ウオーク関連の業務が錯綜し、業務の中心にいる渡辺に、書く余裕がなかったのが原因だった。

渡辺代表は総隊長として出発挨拶。新沢会員と大庭会員はサポート隊として車で随伴した。一九号になって、ようやく福田、窪谷、渡辺でウオークのリポートを掲載。

二〇〇一年元日、伊能ウオーク帰着

竹芝桟橋より日比谷公会堂へ出迎え隊を含め、

約四〇〇〇人が歩く。

「二〇〇一年第二五号伊能ウオーク特集」に前後の状況は詳しい。

巻頭に「伊能ウオーク完歩によせて」と題し、佐原市長鈴木全一氏より寄稿をいただいた。

研究会からは、会員約四〇人に御参加いただく。佐原市、横芝、九十九里町にも話しかけ、研究会・地元関係でバス四台分の歓迎チームを真っ先に作ることができた。

アメリカ大図発見

二〇〇一年三月、偶々アメリカ議会図書館において、渡辺夫妻が伊能大図写し二〇七枚を発見。学術調査の後、七月初旬に新聞発表。（二〇〇一年第二六号）

富岡八幡に忠敬銅像を建立

伊能ウオークの終了を記念して、伊能測量出发地の富岡八幡宮大鳥居脇に「伊能忠敬出立の姿」をイメージした忠敬銅像が建立された。（二〇〇一年第二七号）

二〇〇一年三月に建立実行委員会を聞いて募金をきめたが、建立、そして除幕式がおこなわれたのは一〇月二〇日だった。物凄く速かった。関係者による募金とはいいいながら、この成績は、忠敬への熱い思いが盛り上がったものだろう。

一般からも合計五〇万円を超える応募があり、また、富岡八幡宮、読売新聞社からも大口の御寄付をいただいた。

会報五〇号までの総合所感

まさかこれほど続くとは思っていなかった会報であるが、執筆にあたり、かかわった主要イベントを思い出しながら、全会報を概観した。

内容的には、後世に伝えるべき力作が多数含ま

れており、今後の事業展開のなかで、何らかの形でもっと広い世の中に、発信すべきであると痛感する。元気がある限り努力したいと思う。

ここまで来られたのは、多数の熱心な会員に支えられたからであるが、特に多くの発表をされている小島一仁、佐久間達夫、安藤由紀子、伊藤栄子、伊能陽子各氏の功績は大きい。

編集していると、どうしても手元に原稿の手持ちが欲しいのである。テーマを探して書いてくれる執筆者は、とにかくありがたい。

また、制作面では、二四号までの三二頁時代は、伊能、安藤両氏が編集の中心だった。二五号からは六四頁に移行し、版下をみずから作るようになって、福田氏が作業の中心となった。

版下から印刷屋さんをお願いしていると、どうしても高くつく。三二頁でも会費の大部分が、印刷屋にいつてしまう始末だった。

「ワードで編集できるよ。自分でやってごらん」といわれ、印刷屋を変えて自分で版下を作ったら、六四頁が三二頁の半分の予算で出来るようになった。構造改革である。

しかしながら、版下づくりの作業は大変である。写真など、なかなか上手くあがらない。写真、カットの配置も難しい。私は二・三号手伝ったかな、そんな記憶である。あとは福田氏の出番だった。

今日のような立派な会報に仕上がったのは、とにかく福田氏の努力によるところが大きい。

さて切りのよい五〇号である。政治改革ではないけれど、ここらで再度面目を一新する会報改革は出来ないだろうか。カラーの追加、体裁、デザイン、写真の改善、市販化等々の中から。外野からは、色々注文できるが、印刷屋と企画を練ってみてはいいか。

※『伊能忠敬研究』五十号から一部転載

会報100号を祝う

福田 弘行

季刊誌で100号には25年かかる。皆さんがしっかりと支えてこられたことに感嘆の想いがひとお！

私の担当は2001年27号から2007年49号まで23冊。64頁か72頁。編集に素人が何とか繋げられたのは会員各位の多大なご支援のおかげです。様々な忠敬像に史実、資料、時代、変遷、地図に最新情報など熱心な探求心、好奇心が会報記事に満載。是近の会報はサイズアップ。私には夢のカラー版で紙質向上と併せて内容充実、見事な会報に感動が続いています。

一、消滅から脱却、希望の大橋へ

私が事務所入りして三年後、渡辺さんから「飯田橋の事務所を閉鎖する」との通告。会の存亡の危機！さあどうしようかと悩みました。研究会の財政状況では家賃が限定され、事務所が無理なら私書箱対応かと都内の施設調査を始めたときに幸運が。情熱をかけた伊能ご夫妻の努力で「地図センター」を使わせてもらえることに。たいへんラッキーでした。野々村所長の英断、ご厚意に今でも恩義を感じています。04年7月28日伊能さんの車で大橋へ引越。会の荷物は電話機と会報残部だけ。見かねて地図センターでは机と椅子を用意していただき8月4日無事オープンに。その後安藤さんから書棚、武田さんから忠敬資料の寄贈など多少は事務所らしくなっていました。また会報発送のときには地図センターのご配慮で応接ス

ペースを使わせて戴きました。会の存続の一コマです。年4回の定期発行、一冊10万字の手入力。古文書異体字の表示には苦戦。これも皆さんからの暖かい励ましの賜物でした。

二、陸前浜街道にたつぷり光を・伊能ウオーク

最近の新聞記事に「お帰りのアーチ福島・富岡、一部で避難指示解除」と桜並木の写真が載りました。12年前の福島第一原発事故からやっと解除に伊能ウオークは1999年から2001年元旦にかけて2年で日本を一周する歩き旅で、わが会も主催団体のひとつ。私の取材をかねた応援参加は99年3月3日、福島県富岡町から双葉町まで20km。会報19号「陸前浜街道」。私の初投稿です。

この朝、富岡

町役場に集合し
一行と歩く。午

後、福島第一原
子力発電所に入
り副所長から説
明を受ける。福

島県の発電量は
全国一。エネル

ギーの需要増大
と供給のシステ

ムと原子力の安
全性を模型の原

子炉を使って解
説された。まさ

か、それから13
年後に東日本大
震災が発生し、

原子炉の底が抜けいまだにデブリ撤去の目途がつかない。一緒に歩いた富岡町、大熊町、双葉町、浪江町の皆さんのこれからに人類の英知で暖かな光が届くように。

三、凱旋パレードに皆さんの笑顔

21世紀の元日に研究会メンバーが集合して東京の晴海通りを歩いた。その時の写真が22年経った昨秋、撮影した元朝日・金井三喜男さんから「伊能ウオーク同窓会」で公開されました。ロングウオークは当時のスタッフだった遠藤さん金井さんを中心に現在は「朝鮮通信使友情ウオーク」に引き継がれ、今年もソウルから東京へ歩いていきます。会報200号に向けて新しい希望と夢に期待です。



「伊能ウオーク」ゴールに向けて最後の行進 (2001.1.1)

写真提供：元朝日新聞カメラマン金井三喜雄氏

50号から60号まで

前田 幸子

いつの間にか五〇号

前任の福田さんから編集長を引き継いで50号から60号まで、期間で言うとうと2007年から2010年までの3年間、計11冊を担当しました。会誌がちょうど50号を迎えた区切りの年で最初の号は「通算承継第50号記念」号でした。

その号の巻頭、伊能洋さんの「目まぐるしい十年、いつの間にか五〇号」という見出しが当時の感懷を伝えていきます。伊能忠敬研究会は伊能ウオークなどで、あれよあれよという間に全国区の活動団体となりました。当時、勤務先の同僚や先輩が私の参考にと『〇〇街道を歩く』類の本のコピーを下さいました。伊能忠敬研究会は「歩く会」と認識されていたのです。会誌もウオークありフロア展あり、地図あり天文学あり、古文書あり史料探訪ありと多彩な内容でした。渡辺一郎さんが一人で発行していた『伊能図探究』は伊能図の専門誌でしたが、『伊能忠敬研究』は多数の人々によって作りかつ読まれる伊能忠敬の総合誌に変貌していました。

「忠敬ともだち」の機関紙

伊能忠敬先生は多くの面からアプローチが可能です。会員はそれぞれが興味を持っている分野について「伊能忠敬研究」をして記事を送って来ました。「伊能忠敬に興味がある人」というのが唯一の接点という会ならではのことでしょう。現在も「伊能忠敬という人物とその業績に関心がある」

ということだけが入会の条件であることは変わっていません。安藤由紀子さんが第50号で仰っていますが、「同好の士」が集って人の広がりも出来、自分の励みにもなり、人生が豊かになる、ということをも私も常々実感していて、その思いが会誌編集の核になっていたと感じています。この会報は「同好会的な」部分と「学術研究的な」部分と、二つの性格を持たざるを得ないのですが、どうバランスをとるかが難しい点で、現在でもそれは変わっていないと思います。

記憶に残る人々

編集担当を引き継いで間もなく、安藤由紀子さん、伊能陽子さんとパレスホテルのロビーで「編集会議」を開きました。従来のスタイルを継承するという方針だったと思いますが、一つだけ変えたことがあります。巻頭に「記念碑巡り」のページを置いたことです。現地在住の会員の方に記念碑と伊能測量隊の足跡を解説してもらい、同時に会員の紹介も兼ねるという趣向でした。第一弾は芝公園の遺功表、その後は北海道から九州まで10回にわたりました。特に函館の記念碑を紹介して下さった齊藤サダさんは素晴らしい長文の解説文を寄せてくださいました。誌面の関係で大幅に短縮せざるを得ず、残念だったことを覚えています。

当時中学生だった石谷春香さんが一年かけておこなった研究レポート『伊能忠敬研究』の連載も忘れ難いものでした。会誌史上、最も若い研究者であり執筆者でした。その実証性に一同感心、「これは全文載せましょう」という安藤さんの意見で全12回の連載が始まりました。

手書き原稿をワープロ入力、十年ひと昔と言いますが、当時とは大きく時代が変わったと思います。当時は手書き原稿も多く、ワープロ入力がまづ大きな仕事でした。

フルタイムで勤務していた私のために、入力を安藤由紀子さんが手伝って下さいました。原稿をコピーして送ったり、欠頁を執筆者に再送してもらったり、てんやわんやの日々でした。その後、ワープロはパソコンに、サイズはB5版からA4版に、色はモノクロからフルカラーへと移行しました。近年は印刷もネット注文となり、町の印刷屋さんは姿を消しました。

三巨星逝く

2010年初頭、研究会誌に貴重な論考を寄せて下さっていた安藤由紀子、伊能陽子、佐久間達夫の3氏がほぼ同時期に逝去されました。研究会誌はどうなることかと心配しましたが、今号で一〇〇号を迎えることができ、奇跡のように思っています。ここ数年、事務局長としてマスコミ等の問い合わせに対応していますが、昨今のTV番組や雑誌等で伊能忠敬を取り上げる場合、当研究会のHPの会誌を参考にしているケースが多い、というよりこの会誌なくしては成立しなないと言っている状況になっていると感じています。『伊能忠敬研究』第一〇〇号の区切りを迎え、今後ともより深く、より広い領域から忠敬さんと伊能図を究めていければ、と思っています。(丁)

『伊能忠敬研究』第100号に寄せて

鈴木 純子

会誌『伊能忠敬研究』が第100号を迎えました。振り返ればよくぞここまでとの感慨もあり、まことに嬉しいことです。『伊能忠敬研究』の初号となった第7号の発行が1996年3月1日なので、現在まで27年強となります。ところで、第1号のはずの初号を第7号とするのはなぜでしょうか。ご存じの方も多いとは思いますが、これも喜ばしいことに、近年は新しく会員になられた方々も多いので、その事情にふれておきましょう。

「伊能忠敬研究会」の会誌『伊能忠敬研究』初号がいきなり第7号に位置づけられたのは、渡辺さんが「伊能日本図探究会」（代表・渡辺一郎）として、ご自身の探索経過報告を、「伊能図探究 現存する伊能図を尋ねて」という各号8頁のリーフレットとして1995年1月の第1号から第6号まで発行、知友に配布なさっていたので、それを継承することにしたというわけです。この第1、6号は会誌のバックナンバーとして研究会HPで閲覧でき、1996年5月には研究会によって6号分の合冊も作られています。

本来のテーマとはやや外れますが、『伊能忠敬研究』発刊につながる現在の研究会の始まりについても少々。私は現役最後の多忙時期で、この辺りの活動にはあまりかわつていなかったため、記憶違い、誤認もないとはいえず、また、文中に以前の会員や会員外の方のお名前を含んでいることにもご留意願います。

研究会創設の契機は、現在(株)NISSH Aの

所蔵となっているフランスのイヴ・ペイレ氏旧蔵の伊能中図8面でした。日本経済新聞に載った日本図（在フランス）についての小さな記事を起点に、所蔵者（ペイレさん）の特定と連絡、渡辺、ペイレ宅訪問による実物視認まで、渡辺さん持ち前の実行力で迅速に実現なさり、同行された貞子夫人ともども、一見してそれが「伊能中図」8枚セットの「ほんもの」であることを確認、その旨をお伝えしたうえ、日本での展示可否まで軽く打診してこられたそうです。帰国後、体制作りや先方との折衝が重ねられ、1995年11月にペイレさんご自身が手荷物として地図を持参されて、佐原市公民館で3日間の「里帰り展」が開催され、大きな反響を呼びました。

展示公開に先立って設定された、関係者（10名内外？）による内覧と評価・検討の会には私も列席させていただきました。展示と併せて、渡辺孝雄さんによる記念講演「絵図に描かれた伊能忠敬の測量風景」および、フォーラム「フランスにあった伊能中図」（登壇者…イヴ・ペイレさん、ニコル・ペイレさん（イヴ氏夫人）、金窪敏知さん、清水靖夫さん）も開催されて多数の参加がありました。この日の懇親会の熱気は相当なものであったことを思い出します。佐原発の終電には間に合わず、京成成田の上野行終電に間に合うよう、タクシーに分乗したことでした。すでにスタートしておられた渡辺さんと、このイベントに尽力された方々による「伊能忠敬研究会」という発想は、この熱気にも強く後押しされたものだったと感じています。

なお、ペイレ図関連の末尾に置くには惜しいことなのですが、渡辺さんご夫妻の渡仏視認後の国

内での報道が、伊能洋・陽子ご夫妻や安藤由紀子さんたちと渡辺さんのかけ橋となったということがあります。その結びつきは「伊能忠敬研究会」誕生の契機のひとつであったといえるかと思っています。

初号『伊能忠敬研究』第7号の渡辺さんによる巻頭挨拶には、史料の探索と公刊、伊能忠敬ひとりではない隊員や幕府、地方の関係者なども視野に置く研究、現存伊能図の探究と、まことに尤もで、現在まで脈々と流れる当会の目的が的確に提示されています。最初の編集委員は渡辺さん、安藤さん、伊能（陽）さん、芳賀啓さんなど9名でした。まだ手作業も多かったと思われ、第24号（2000年12月）から、パソコンによる自前の版下作成が始まります。第27号（2001年11月）から第49号までは、福田弘行さん、50号から60号までを前田幸子さんが担当され、事情があつて遅延した第61号を鈴木が、か細い繋ぎとしてとりまとめ、以後、高安克己さんを中心とする総力ラー化、第64号からはB5判からA4判への転換と発展し、現在に至ります。この時期以降は菱山剛秀さんをはじめ、宮内敏さん、井上辰男さん、河崎倫代さん、玉造功さんなどの尽力により現在に至ります。歴代の担当者の骨身を惜しまぬ貢献にあらためて感謝いたします。判型や形状は変わりましたが、表紙に伊能図画像、表紙裏にその解説という形式は一貫し、有能な書き手も輩出しています。バックナンバーをたどると、当時はうつかり見落としていた貴重な情報の存在にもあらためて感慨を覚えます。第100号の節目を越えて新たな展望が開けますよう、寄稿、編集作業などに、活力ある会員諸氏のご協力を期待しています。

「伊能忠敬研究」 100号を迎えて

星 埜 由 尚

私が伊能忠敬研究会に入会したのは、平成16年に国土地理院を退官した直後です。丁度、伊能測量200年を記念して行われた伊能測量の跡をたどる「伊能ウオーク」、それに伴う各地での伊能図博物館展、映画「子午線の夢」などの様々な行事が一段落したところでした。それまで故渡辺一郎氏が主宰していた伊能忠敬研究会に対し、国土地理院はその事業に協力する立場であり、私もこれらのイベントには国土地理院の立場で協力し、参加した思い出があります。

私は、地理学を専攻し、地図を仕事としてきたので、伊能忠敬について知っていました。これらの行事に協力し、参加するうちに、単に仕事上のみでなく、伊能忠敬その人と成し遂げたことに興味を湧き、国土地理院を退官する時期ともなったため、伊能忠敬研究会に入会させていただきました。入会してからしばらく経って、代表理事を務めていた故渡辺一郎氏から、私も高齢となったので代表を替わってもらえないかと相談があり、新参者にもかかわらずと思い固辞したのですが、是非に言うことで引き受けました。平成16年暮れのことです。それから10年近く代表理事を務めました。が、事実上創始者であり、事業の進め方に手腕のある渡辺一郎氏に長老として事実上会務を取り仕切っていただきました。渡辺一郎氏は、お亡くなりになった令和2年度まで伊能忠敬研究会の会務や行事、「伊能忠敬研究」の編集など全般に

わたって大きな足跡を残されたと言えるでしょう。この間、渡辺一郎氏がアメリカ議会図書館で見出された陸軍模写による伊能大図の複製パネルをNISHA株式会社の協力を得て作製し、渡辺一郎氏、堀野正勝氏（伊能忠敬研究会理事）ほかの方々とともに、「伊能図フロア展」と称して各地を展示して回ったことは、大変意義ある思い出となっています。

100号を迎えた「伊能忠敬研究」には、入会してから様々な機会に駄文を書かせていただきました。50号においては、代表理事として挨拶の文章を書かせていただき、伊能忠敬関係資料が国宝に指定されたことを記念した祝賀会と伊能忠敬研究会創立15周年記念の例会が開催されたときにも、挨拶の文章を掲載していただきました。そのほか、伊能図から読み取れることや伊能図を種にした各地の地誌などについて色々と愚説を述べさせていただきました。

「伊能忠敬研究」においては、渡辺一郎氏が各地で見出してこられた伊能図が紹介され、他の方々の伊能忠敬に係わる文書の紹介なども多く、「伊能忠敬研究」は、伊能忠敬の人物像、伊能図の書誌に係わる知見を大きく増やしてきたと思います。一方伊能図の作製に関わる測地学、地図学などの研究は、大谷亮吉編著『伊能忠敬』以来、地図投影法に関する検討以外は、余り取り上げられてこなかったのが現状です。「伊能忠敬研究」においても、伊能図の測地学、地図学に関する寄稿は少なかつたと思います。

最近、東京都立大学名誉教授の野上道男先生が伊能図の測地学・地図学に関して精力的に新しい

考え方を学会誌に発表しておられます。測地学・地図学の専門外の方々にとっては、おそらく難関な面があると思いますが、伊能図の本質に迫る基本的な議論があります。「伊能忠敬研究」においても、このような側面の研究が分かりやすく紹介されるとうろしいと思います。

また、伊能忠敬の業績を科学史、地図史、測量史の中で位置づけることも大切であると思います。徳川幕府が整備した国絵図や長久保赤水の「改正輿地路程全図」との地図原理及び地図作製技術の発展の中での関連性など科学的な分析が必要であると思います。このような問題にも「伊能忠敬研究」が寄与できればすばらしいと思います。

とは言え、「伊能忠敬研究」は、伊能忠敬に関して同好の会員の皆様の交流の場でもありますので、これまでのように伊能忠敬と伊能図に関する様々な情報、会員の活動、研究の成果、行事の紹介、伊能図の紹介など、幅広く会員の関心に応えることのできる同人誌の性格を維持される必要があるのではないかと思います。

伊能忠敬及び伊能図に興味・関心を持たれている方々に参加していただき、「伊能忠敬研究」が会員の方々の期待に応えることのできるものとして発展することを願っております。伊能忠敬については、学校で必ず学習するので、特に若い方々にも関心を持っていただき、伊能忠敬研究会への参加と「伊能忠敬研究」に清新な見方からの原稿をいただけるようになれば誠に嬉しい限りです。

伊能忠敬研究会と私

宮内 敏

会誌「伊能忠敬研究」一〇〇号（「伊能図探求」を継承）おめでとうございます。

平成七年に、伊能忠敬生誕二五〇周年記念事業の一環として、フランス中図が佐原市中央公民館で初公開されました。これがきっかけとなり、渡辺一郎氏が中心となって「伊能忠敬研究会」が発足しました（「伊能忠敬研究七号」小島一仁氏、香取禧良氏）。

伊能洋・陽子様ご夫妻との出会い

きっかけは、祖父の遺稿「伊能忠敬翁」の発見に始まります。祖父の母は伊能忠敬の後裔伊能三郎右衛門端美氏（伊能七左衛門家から婿養子）の実姉で、両親とともに若年佐原町に住んでいました。父も旧制佐原中学時代伊能家旧宅（国指定史跡）に下宿し通学したといえます。

遺稿は旧書体・旧仮名づかいで、難しい表現も多くありました。そこで遺稿を基調資料とし、画像や注釈などを入れ、読みやすい忠敬本を共著として出版することにしました。

完成間近のある日、ご指導を仰ぐべく世田谷の伊能様宅に伺いました。洋さんのお父様（六代康之助氏）と私の父（宏）は年賀状のやり取りがあり、私も存じ上げておりました。

ご夫妻は気さくで色々教えて頂きました。その際、伊能忠敬研究会への入会を勧められ、私は「よろしく願います」と即答しました。

その後、銚子の隣町（東庄町）で開催された伊能忠敬研究会の研修旅行に、飛び入りで参加させて頂きました。当時の代表理事であった星

埜由尚氏、名誉代表の渡辺一郎氏をはじめ多くの会員の方々との出会いがありました。翌日の佐原・潮来方面の視察にも参加させて頂きました。

会誌の編集委員に

当時の研究会は勉強会や宿泊研修会など、多くの行事を企画しており、私は会の行事には遠方ながら極力参加することにしていました。

ある時、渡辺さんから、会誌の編集を手伝ってくれないかと誘われたのです。東端の地の銚子に住み、古文書も読めず、取り立てて特技もない私でしたが、ネットを介しての編集作業なら、出きることもあるだろうとお受けしました。

新しく編集長になられた高安克己氏は「会誌のカラー化とネットでの印刷」を提案され、62号からカラー化が実現しました。情報量は格段に増し、編集スタイルも変わりました。現代代表理事の菱山剛秀氏、前代表理事の鈴木純子氏、長年編集に携われた前田幸子氏、玉造功氏、河崎倫代氏、そして、原稿をお送り頂いた方々などと共に経験を積み重ねて頂きました。

編集係には余得があります。新しい資料をいち早く目にする事ができるという特権です。

そして、作業を通して痛感させられたことは「伊能忠敬の五千万歩の実績が如何に大きいか」ということでした。

出会いがあって記念碑建立

銚子に「伊能忠敬銚子測量記念碑」を建立したい。その想いを話したところ、渡辺、高安両氏が遠路、銚子まで来られ、当時の野平銚子市長に、銚子測量の重要性について語ってくださいました。その後、紆余曲折がありました。市政施行八〇周年記念事業の一環として、伊能忠敬銚子測量記念碑建立実行委員会（委員長伊藤浩一氏）が立ち

上がり、伊能忠敬研究会のご支援と地元市民の熱意で記念碑は建立されました。

除幕式前日

の記念講演会と伊能忠敬研究会の総会及び懇親会が銚子京成ホテルで開催されました。翌日の除幕式と祝賀会にも研究会会員が出席され、午後は、銚子ジオパーク市民の会ガイドによるジオツアー（屏風ヶ浦・犬岩・千騎ヶ岩・地球が丸く見える丘展望館）に参加されました。

当日は雲一つない快晴に恵まれ、図らずもその日は私の誕生日と重なり、忘れることのできない一日になりました。

現在、碑は銚子市に寄贈され、銚子ジオパークのジオサイトの一つ、屏風ヶ浦の一角で訪れるお客様を引き付けてくれています。

終わりに

コロナ禍の中、91号の編集作業を最後に勝手ながら編集係から離れることとなりました。

お世話になった方々に、お礼申しあげます。伊能忠敬研究はライフワークとして続けます。

送られてくる会誌も楽しみの一つになっています。幅広い話題を取り上げて頂き、益々発展されますことを期待しております。（完）



伊能忠敬銚子測量記念碑 除幕式

会誌のカラー化・A4化の頃

高安 克己

私が編集担当をお引き受けした頃、『伊能忠敬研究』誌はB5版で年4回発行されていたのですが、2010年の第60号以後、短い間でしたが発行が滞った時期がありました。当時代表理事だった渡辺一郎さんは、この機会に出版界の趨勢に従ってカラー化やA4版化したいと考えていたようです。カラー化による経費負担を抑えるためには、編集体制を強化した上で、割り付けも含めて完全編集済みの電子化原稿を印刷業者に入稿し、印刷・製本してもらうDTP (Desk Top Publishing) という方法が最適と考え、その実行部隊として入会間もない私に白羽の矢を立てたようです。

しかし、いきなりこの方向に持つて行くのは無理だと渡辺さんは考えたのか、研究会の15周年記念事業が佐原で行われるので、それを取材として試みにカラー版を作ってみたらどうか、と提案されました。2011年の2月頃だったと思います。私も練習には良い機会だと思ったのですが、たまたまその頃家族の不幸などいろいろなことが重なり、私自身も入院する羽目になってしまい、佐原への取材はできませんでした。退院後、参加した会員が撮った写真や原稿をもとに写真集のようなカラー版特集号を編集し、会員に配布しました。東日本大震災のごたごたしていた頃の作業でもあり、決して仕上がりは良いものではありませんでした。

その後、「会誌」本体の編集に取り掛かり、20

11年の第62号からカラー化、翌2012年の64号からA4版化へと体裁が進化していききました。私は現役の頃に学会誌などの編集を手伝ったことがあり、DTPの経験も多少はありました。とくに理系の雑誌では、当時すでに電子原稿が普通で、投稿規定に従った完璧な原稿になっていなければ受け付けてくれませんでした。受け付けた原稿は複数の査読者によって、内容の独創性や論理性、引用の正確さなど、様々な観点から厳しく審査され、何度か査読者と著者との意見の往復があつて、ようやく受理され、研究誌に掲載される、という流れです。

そう言う世界に長くいたものですから、それまで発行されてきた『伊能忠敬研究』誌の記事や投稿される原稿を読んで、当初はかなりの違和感を覚えたことは確かです。非常に興味深く重要だと思われる記事がある一方、どうみても「研究誌」にはなじまない、どちらかというと「同好会誌」か「連絡誌」的なものも入り混じっていると感じたのです。これはA4への大判化やカラー化の外見上の事柄ではなく、本研究会の目的に相応しい会誌に近づけるにはどうするか、という問題なので、他の理事にも相談したことがありました。結局、研究会の性格にも関わることで、今後の活動を通して見えてくるように思いました。

そんな段階で編集担当として何ができるか考えた末、まずはDTPを前提にした投稿要領を提示した上で、編集段階で投稿原稿を、調査・研究に基づく学術的にも価値の高い記事、資料的価値の高い記事、話題や関連情報など気軽に読める記事、などにグループ分けしました。これによって、会員はどのグループに入る記事か意識して原稿を書

くようになるだろう、と期待したのです。また、投稿原稿のチェックや編集の過程でオープンな意見交換ができるように、各理事など主だった会員のメーリング・リストを設けました。これらの仕掛けは、電子原稿に慣れていない会員が多かったため当初は投稿者も限られ、なかなか巧く機能しませんでした。しかし、時間がかかりましたが、その後少しずつ会員に浸透し、定着してきたように感じます。とくに菱山さんが中心的に編集を担当されてからは、投稿者の数や記事のバラエティも向上し、会誌が会員の活動や研究成果を記録・紹介する場として、本来の役割を発揮できるようになってきたと感じています。

現在、多くの定期刊行の学会誌が電子ジャーナル化され、冊子体は廃止されつつあります。会員は学会が発行するキーIDを使ってネット上で、いつでもどこからでも最新号を閲覧することができず。また、電子版を含む多くの定期刊行誌は登録されたISSN (International Standard Serial Number) コードによって、NDL (国立国会図書館) などを通して自由に検索することができず。さらに、非会員であつてもバックナンバーを無料で閲覧できる学会誌も増えてきています。『伊能忠敬研究』誌も、こうした時代の趨勢を念頭に置きながら、発行形態や内容の更なる向上を計っていく必要があります。それは、一般の読者に伊能忠敬翁の業績と人物像を広く知ってもらう、という本研究会の目的にも叶うものと考えます。

伊能図に導かれて

菱山 剛秀

伊能図との出会い

私が伊能図に出会ったのは、国土地理院に入ったときに遡ります。といっても、当時は伊能図のことは知っていましたが、特別に興味を持ったという訳ではなく、国土地理院（当時は目黒区にあった）の図書館の床の片隅に額装されて置かれていた九州南部の中国を何気なく見ていました。

その後、国土地理院がつくば市に移転し、10年ほどして、この模写図とは別の伊能図が原図倉庫に保管されていることを知り、江戸実測図2枚と北海道を除く中国6枚があるのを確認しました。

中国は、非常に精細で、よく見ると、赤い測線上に小さな針穴が確認できました。大型の江戸実測図は、裏打ちし直されていたようで、保存状態は比較的よかったです。中国は、一枚一枚が割った竹に巻き付けられた状態で杉の木箱にまとめて入れられていました。ところが、芯の竹が反っていたため、広げようとすると、いたるところに裂け目ができてしまい、保存状態もよくありませんでした。描かれた紙も「鳥の子」という厚手の紙だったため、巻いたときの皺に割れ目ができていたことも裂けやすかった原因かもしれません。中でも九州南部の図は、痛みがひどく、巻かれた状態で一部が欠損していました。

このままでは、痛みがさらにひどくなり、欠損が広がる虞があったので、上司にお願いして、修復の費用を捻出していただき、破けていた裏打ちを一旦外して、新たに古い和紙を使って裏打ちし

直しました。その後、国土地理院の敷地内に「地図と測量の科学館」が建設され、そこに収蔵庫もできましたので、この伊能図も現在はこの収蔵庫に収められ、国土地理院のホームページでも精細な画像データが公開されています。

伊能忠敬研究会との出会い

私が渡辺一郎さんと最初にお会いしたのは、国土地理院に伊能図をご覧いらつしやったときだったと思いますが、その後特別のお付き合いがないうまま10年余りが過ぎていました。また、特別顧問の鈴木純子さんとは、日本地図学会の会誌の編集委員と一緒にさせていただいていたので面識があり、星埜由尚さんは、国土地理院時代の上司でしたが、私が伊能忠敬研究会と直接関わらせていただくようになったのは、こうした方々ではなく、九州支部で支部長をされていた石川清一さんでした。私が国土地理院の九州地方測量部に赴任したとき、石川さんが見えなくなり、赴任一年目の九州支部の総会に講演を頼まれたのがきっかけで、国土地理院が所蔵している伊能図について確認しているうちに、渡辺さんがアメリカ議会図書館で発見された大図207枚が国土地理院所蔵の中国と同時期に陸軍が模写したものであるという確証を見つけました。国土地理院の伊能中国を修復したことで記憶に残っていたのが前述した伊能図に貼られた一枚の付箋です。同じ付箋がアメリカの議会図書館にあった大図90号にも貼られていたのです。（詳細は64号で報告）そのことを初めて外部で公表したのが九州支部の総会でした。その後、九州で行われる伊能忠敬関係の行事にも参加させていただくようになり、九州支部の皆さんと

次第に顔見知りになりました。

国土地理院を退職後は東京に戻り、地図センターを訪れた2011年のある日、伊能忠敬研究会の事務室前で当時事務局長をされていた鈴木さんにお会いし、その場で研究会への入会をお願いしました。このころは、ちょうど、会誌の紙面が一世刷りからフルカラーに変わり、編集体制も変わった直後でした。そうしたタイミングもあって、私は入会とほぼ同時に会誌の編集に携わることになり、気が付けばすでに12年が過ぎていました。

『伊能忠敬研究』の継承

伊能忠敬研究会のこれまでの活動を振り返ると、伊能ウオークや、伊能図のフロア展といった一般参加のイベント、会員向けの講演会や見学会、伊能忠敬に関する周年行事を開催してきましたが、全国に広がるすべての会員の参加は難しく、研究会発足と同時に発行を開始した会誌『伊能忠敬研究』が、全国に広がる会員間の情報交換の場になつてきたと思います。

『伊能忠敬研究』の記事は、会員お一人一人の伊能忠敬への思いであったり、伊能忠敬の業績の再評価であったりします。その記事は、創刊から100号までに1800あまりになります。

創刊当時誌上で活躍された方々には、他界された人も少なくありませんが、こうした先人たちが残された研究を継承し、貴重な記録を正しく後世に伝えることが、バトンを受け取った後に続く者たちの使命と考え、これからでもできる限り正確な情報の発信が続けられるよう、引き続き会員諸氏のご協力をお願いして、次の編集担当にバトンを渡したいと思います。

会誌発送に携わった四年間の思い出

高宮 勲

伊能忠敬研究会会誌『史料と伊能図 伊能忠敬研究』100号発行おめでとうございます。

3月下旬、会誌100号の発行に因んで、私が以前担当させて頂いた会誌発送にまつわる苦労話やエピソード等を書いて欲しいと言う依頼を受けました。大変光栄に思ってお引き受け致しました。

私が伊能忠敬研究会の理事の皆様と初めてお逢いしたのは、2010（H22）年11月28日香取市佐原の中央公民館でした。会議の内容は、翌年開催が予定されている「伊能忠敬関係資料国宝指定記念・伊能忠敬研究会一五周年記念祝賀会」についてでした。議題の一つに、戸村茂昭氏が我が家の家系について「伊能忠敬の長女・お稲の血筋についての新事実」と題して講演してくださる予定でしたので、私にも声を掛けてくださいました。

その席には渡辺名誉代表・星埜代表・鈴木事務局長・伊能理事・香取支部長初め香取支部の皆様が多数出席されておりました。その後何度か佐原を訪問させて頂き、用意周到な計画が立てられました。私の担当は、出席者名簿の作成及び当日の受付でした。祝賀会は2011（H23）年2月12日盛会に行われました。

祝賀会の残務整理も済ませ一息付いていたある日、渡辺名誉代表が我が家に立ち寄り、研究会の理事になって欲しいと頼まれお受け致しました。その後しばらくして鈴木事務局長から、特集号の発送についての説明があり必要物品が送られてきました。当時私は宛名ラベルを作成するテクニクを忘れてしまっていたので、宛名を記載したラ

ベル形式のエクセルシートを送って貰いました。

封筒に研究会のゴム印を押印し、ラベルを張り糊や文房具を取り揃え準備に取り掛かりました。2011（H23）年5月15日、530冊の特集号が我が家に送られてきましたので、2日間かけて封入し、発送する事が出来ました。同年9月、62号発行前に「伊能研究会コアメンバー」という名称のメンバーリストに私も入れて貰う事が出来ました。その結果情報を共有できる様になり、大変助かりました。例えば、編集経緯↓印刷会社への原稿提出↓印刷終了↓代金納入↓発送完了の知らせ等全ての作業内容を関係者が判る様になりました。お蔭で私も会誌発送の準備態勢を容易に整える事が出来る様になりました。朝一番にメールを開くと何と午前2時〜3時頃まで多くのメールが飛び交っていました。執筆者や編集者は如何に変な仕事をしているのか初めて判りました。

発送の苦労話としては

①各号毎に挿入する内容物の準備、例えば執筆者への謝礼文、帳票類、個人会員名簿、送付冊数、及び荷姿の確認等それらは私にとっては煩雑な作業でした。発送作業が終了した矢先、転居先不明で返却されて来た時は大変困惑しました。その時はメンバーリストでお聞きしたり、インターネットで調べたりして再送付しました。②新入会員については会誌のバックナンバーを送らなければなりません。又会員や希望者から特定 の号数の購入依頼や、執筆者からの追加注文も受けます。そこで私は各号毎に在庫管理表を作成しました。

③特集号はA4版カラーになりました。これは渡

辺名誉代表の長年の念願であった様です。定期発行の会誌も特集号に準拠し、62号よりカラー化され64号からはB5版からA4版へと変わりました。この機会に鈴木事務局長に無理にお願いし、64号から研究会の名前を印刷したシール付き特注封筒を作って頂きました。それまでは市販の封筒に糊付けした後、座敷一杯に並べて乾くのを待っていました。大幅に時間を短縮する事が出来ました。その結果、午前10時頃に400冊程を受け取り、その内310数冊は午前中に封入し、即日発送可能となりました。

④2014年〜2015年の理事会で、会費管理原簿を基に、会員への配布用と送付リスト用と2つに分かれていた会員名簿を一つに統一しました。この名簿に封入物品を詳細に分類した項目を入れ発送台帳としても活用したので、封入作業が円滑に出来る様になりました。

作業終了後、残った冊数と台帳の残数が一致した時の達成感は今でも忘れられません。

因みに、私が発送を担当した特集号から76号までの間、6630冊を受け入れ、6177冊を発送し、453冊は事務局に返却しました。私自身何時も健康に不安を抱えていましたので、研究会の仕事は常に妻と二人三脚でやり遂げました。

図らずも2014（H26）年暮れに体調を崩し、翌年理事職を辞めさせて頂きました。退任時、現菱山代表が全てを快く引き継いで下さりました。私はこの大切な会誌を1分でも早く皆様のお手元にお届けする事を考えて業務に当たりました。会員の皆様のご協力に心から感謝致しますと共に何時も暖かく見守って下さった理事の

皆様有り難うございました。



発送した会誌と運搬用折り畳み箱（高宮）

発送担当、四年間の記録

——コロナ禍の中で——

河崎倫代

高宮勲・リヨ子ご夫妻のあとに続いて、私もこの四年間を振り返ってみたい。日本でコロナ感染者が初めて報道されたのは、二〇二〇年一月下旬だった。二月末の会誌九十号は通常通りに発送を終えた。三月には理事会で「二〇二〇年度総会」の開催が検討され、やむなく中止と決定した。四月末に「総会中止ハガキ」を全会員に出し、五月末には総会資料と議決賛否ハガキを送付して、紙上総会を実施した。

コロナ禍は収まる様子もない。こんな時には、確実に全会員の下に届けられる会誌だけが、会と会員をつなぐ唯一の手立てだという思いが強くな

【 88～99 号の発送記録 】（河崎）

- ・ 2019 年 6 月 30 日 88 号 420 冊 → 237 件 305 冊発送
7 月 1 日 角 2 封筒 2000 枚（4 箱）着
11 月 1 日 89 号 420 冊 → 241 件 307 冊発送
- ・ 2020 年 2 月 27 日 90 号 420 冊 → 243 件 330 冊発送
4 月 28 日 2020 年度総会中止ハガキ 168 通発送
5 月 27 日 2020 年度総会資料・ハガキ 168 通発送
6 月 19 日 91 号 410 冊 → 233 件 295 冊発送
7 月 21 日 渡辺一郎さん逝去通知ハガキ
167 通発送
11 月 11 日 92 号 410 冊 → 238 件 333 冊発送
- ・ 2021 年 3 月 2 日 93 号 410 冊 → 236 件 324 冊発送
4 月 20 日 2021 年度総会中止ハガキ 169 通発送
6 月 9 日 2021 年度総会資料・ハガキ 163 件発送
6 月 28 日 角 2 封筒 2000 枚（4 箱）着
6 月 30 日 94 号 410 冊 → 252 件 293 冊発送
10 月 26 日 95 号 410 冊 → 238 件 299 冊発送
- ・ 2022 年 2 月 21 日 96 号 410 冊 → 227 件 310 冊発送
4 月 14 日 2022 年度総会中止ハガキ 150 通発送
5 月 20 日 2022 年度総会資料・ハガキ 152 件発送
6 月 21 日 97 号 416 冊 → 224 件 284 冊発送
11 月 3 日 98 号 420 冊 → 219 件 292 冊発送
- ・ 2023 年 2 月 22 日 99 号 410 冊 → 224 件 290 冊発送

※毎号 400 冊発注するが、「予備」として 10～20 冊多く送られてくる。

※毎号の発送冊数が異なるのは、執筆者に 3 冊献呈、原稿中に使用した資料所蔵先等への献本があるから。

※年 3 回の会誌発行にともなう発送業務以外に、会員・非会員からの注文がある。

った。会員担当理事として、より充実した内容にするべく「原稿お願い」に力を注いだ。これまでの投稿者や書いていただけたような会員に一本釣りメールをしたりして、ご迷惑をお掛けしたことも度々。お陰様で、皆さまからの投稿をいただき九十一号から九十九号まで毎号確実にお届けできたことに感謝している。これを読んでいただいているということは、無事一〇〇号が刊行され発送されたということであり、嬉しい限りである。

この四年間、会誌の多くは菱山代表が編集割付を担当し、総会資料等の作成・会費の管理等、諸々の事務業務のほとんどを前田事務局長が担ってきた。発送担当の私から言うのも僭越だが、会員の皆様のご協力に感謝し、新体制へバトンタッチできることを有り難く思う。何といても、会を支え存続させる力は、会誌『伊能忠敬研究』にある。

「研究」にこだわらず、「会員だより」にも気軽に投稿して、楽しく交流しましょう！

二〇二一・二二年もコロナ禍が続き、三年連続での総会中止ハガキを発送した。寂しい限りである。

個人的には一五〇号までは見届けたい。その時は九十歳。ちよつと無理かな？

私の思い出

石川 清一

「伊能忠敬研究」第100号達成おめでとうございます。歴代の編集関係者のご苦勞に感謝申し上げます。継続して発刊することは大変なことと思います。

今回編集者から何か「思い出」をとのことなので兼好法師のように徒然なるままに創刊の頃からの思い出を書いてみたいと思います。

三十年近く前の一九九六年頃、故渡辺一郎先生（伊能忠敬研究会代表）が「伊能図探究」と題し春季号、夏季号などを発行していた時代の創刊期から編集関係者のご努力で、現在の充実した会誌が刊行されている。

私は当時会社を定年退職する頃で偶然故渡辺一郎先生にお目にかかる出会いがあり、はじめて伊能忠敬とその地図を知り大変興味をわき先生のアドバイスもあり早速同好の志を募り伊能忠敬研究会九州支部を発足させ現在まで続いている。当時毎年有志で平戸、長崎、島原など九州各地や広島など伊能図を収蔵しているところに一泊旅行を行い、行き帰りや夕食等の折親睦を深めることができとても楽しい思い出です。この研修旅行で広島県呉市の「入船山記念館」で「収蔵物―浦島測量之図、御手洗測量之図」を観たのも印象に残っています。

私達伊能研究会は社会人が主だと思っていたが、ある時小学生の会員（大変な伊能ファン）がおられびっくりした。私の住んでいる小学校の校長先生と会う機会があり話題にしたところ、教科書に

忠敬が出るのが小四か小五の頃と聞き納得した。今回改めて当時の記録、関係書類をみると渡辺一郎先生の「伊能測量隊まかり通る」（三一八頁の労作）が出版され大変参考になった。

ある時伊能研究の裏表紙が英文なので渡辺先生に不思議に思っただけのところ、アメリカのハーバード大学にも送っていると聞きびっくりしたことがある。



写真1 記念碑建立除幕式

伊能忠敬の九州測量は二回に及んだが、九州測量の起点である北九州市小倉常盤橋の脇に市当局や伊能関係者の暖かい協力を得て記念碑を建立、盛大な除幕式を行ったことも記憶に残る。（写真1参照）研究会総会等で上京の折などで伊能関係の先生方にお目にかかる機会も増え、渡辺一郎先生や伊能洋先生の奥様との出会いは、今は故人となれましたが私が遠方の九州から出席してくれたと歓迎してくれたことも懐かしい思い出です。

二〇〇一年に渡辺先生がアメリカ議会図書館で日本の伊能大図二一四枚を発見したことは大ニュースとなり各新聞社が一面に取り上げ大きな反響を呼び、その後は各地で『アメリカ伊能大図展』と称し披露され福岡でも開催した。（写真2参照）



写真2 アメリカ伊能大図展

伊能関係の本や測量日記はいろいろな本を読み伊能関係の展覧会などにも出かけておりこんなエネルギーがあった時代のことを思い出し苦笑している。

私は退職後時間の余裕ができ国土地理院九州地方測量部に寄ることも増え歴代の部長さんに地図づくりのお話しなどいろいろ伺いお世話になりました。

測量士が見た伊能忠敬

井上 辰男

私が、伊能忠敬を詳しく知ったのは、井上ひさし著「四千万歩の男」である。その後、武揚堂よりの伊能中図の縮小版を見て強く感銘をうけたものである。

だが、宇宙からのランドサット画像図と比較しても正確であると言うことはわかるが、私の測量技術者としての、当時の測量の方法や精度など疑問や謎は深まるばかりであった。

しかし、東京出張のおり、東京江戸博物館で「伊能忠敬展」を見学することができ伊能図のすばらしさを再認識するとともに、伊能忠敬に関する文献が多数あることがわかった。なかでも、松尾昌英著『伊能大図による「筑前の長崎街道」の追跡』は、伊能大図の下図を基に伊能忠敬の測量の足跡を示すもので、測量技術者からみてもすばらしいものである。

その後、研究会に入会し、東京国立博物館、神戸市立博物館、松浦資料博物館等で伊能大図を見学した。中でも松浦資料博物館の伊能大図を近くで見ることができ、記入されている文字に輝きが残っていたのを今でも覚えている。

さて、伊能忠敬はなぜ五十才を過ぎた第二の人生で全国を測量出来たのであろうか？

それらについて色々な出版物があるので、これらを此処にまとめてみると、

一、頑固で愚直な性格

二、好奇心と情熱が心の支えであり、同時にい

くつかのことをとことん追求する根気と持続力があつた。

三、現地にいくたびに起こった悶着を、すべて根気よく絶対に自持の気持ちを失うことなく、対応し続けた精神力

四、若いときに蓄えた経済力

五、伊能測量の推進に強い意志が大きな原動力になった

六、異常な執念とそれを支えた隊員たちの協力と努力

以上のことから、日本全図作成という大偉業が成し遂げることが出来たのであろう。

しかし、それだけで五十六歳から七十四歳まで全国を三千七百三十七日間も長期の測量を行い、その距離約四万キロ（地球一周分）を歩くことができたのであろうか。

それだけではない、もう一つの理由それは測量が好きだったということではないだろうか。

名主時代に測量術はもちろん数学や暦学は学んでいたと思われるが、測量は自分の測定「良・否」がそのまま測量誤差や精度にはねかえることになる。たとえば、ある点を出発して同じ点に戻る測量を行った場合、測量差の合計は零とならなければならぬなどの制約があり、測量の値には「確からしい値」はあるが「真値」はなく、とことん追求することが出来る、それが測量のおもしろさではないだろうか。

伊能忠敬の第一次測量は、奥州街道と蝦夷地の海岸線の測量であつたが、本当の目的は緯度1度の距離を確定することだったと思われる。第二次測量以降も、海岸線や街道を測量しているが、何回も測量していると前回測った箇所に測線を結ぶ

ことになる。そうすると前回の位置と今回の位置との差がわかり、この差が小さいと感激もひとしおで、今までの測量の苦労も吹っ飛び、これから先の測量にも元気が出る。このことが伊能忠敬をはじめとする測量隊員を励ましたのであろうと思う。私も一等三角点の改測（精密測地網一次基準点測量）に北アルプスの山々を、一日中重量約三十Kgの観測機材を背負って山に登り測量を行ったときつくづく感じたものである。一点の観測には一〜二週間のテント生活を続け、周囲の三角点を測り点検してやっと誤差がわかる。これが許容範囲に入っていると、今までの苦労も吹っ飛び、さらなる元気が出たものである。測量士の大先輩である伊能忠敬翁には、とてもあしもとに遙か遠くおよばないし、くらべることもおこがましいが、やはり測量が好きでないとできない事だと思ふ。

伊能忠敬翁が、全国の測量を始めて二百二十年の歳月が経っているが、現在の測量技術者が会得しなければならぬことは、

一、測量の技術的理論が分かっていること

二、要求精度に応じた観測設備が作れること

三、観測技術・技能を修得していること

四、重労働に耐える体力があること

五、くじけない堅実な精神を養うこと

以上の五項目が、時代や作業方法が変わろうとも測量技術者が受け継がなければならない事だろう。

私の伊能忠敬研究会

佐賀県 馬場 良平

平成16年(2004年)11月、福岡市で行われた「アメリカ伊能大図帰りフロア展」会場で、河島悦子様の推薦により、故渡辺一郎伊能忠敬研究会代表(当時)から伊能忠敬研究会への入会許可をいただき入会出来ました。

伊能忠敬研究会九州支部の例会には、平成18年(2006年)から参加、先輩会員の研究発表を聴くのが有意義で、懇親会での交流も楽しみの一つになりました。

東京での総会に初めて出席したのは平成19年(2007年)6月24日開催された2007年度総会です。この時は前日、初めて佐原の町並みを散策、浅草橋付近のホテルに宿泊して、24日富岡八幡宮の会場に向かいました。

総会のことはあまり覚えていませんが、懇親会では九州支部長石川清一様や「歴史街道を歩く会」の河島悦子様のご紹介により、数多くの会員の方々と楽しい時間を過ごしました。宴会場の支配人から九州から来られた人でしようと声を掛けられるほど、佐賀弁丸出しで皆様と交流をさせていただきました。二次会にも誘っていただき夢のような時を過ごしました。

この時の伊能忠敬研究会の皆様との出会いが、「伊能忠敬研究会の一員になったのだ」と私にとって心の糧を得た一日になりました。

以来、東京での総会には2012年まで6年連続参加し、その後も参加しています。

田舎者の私にとって、伊能忠敬研究会総会への参加は東京へ出る数少ない機会であり、この機会

に都内の伊能忠敬関連史跡や佐原、九十九里町、小堤、多古町などへ足を延ばして、伊能忠敬の世界に浸りました。

地元で歴史街道を歩く「塚崎・唐津往還を歩く会」を継続し、歩いてゆくと各地に繋がる街道や往還には、必ず伊能忠敬が足跡を残しています。伊能忠敬に対する興味が大きくなってゆきました。

平成21年(2009年)4月「完全復元伊能図全国巡回フロア展」(以後、伊能図フロア展)が始まると、私の中で「伊能忠敬の肥前国測量から200年の節目に何とか佐賀でも開催出来ないものか」と熱いものが湧いて来ました。

その後、平成23年度、鍋島報効会の研究助成事業の助成を受けて「伊能忠敬測量隊の肥前国(特に佐賀県内)踏査とその足跡を追う」のタイトルで、1年間勉強する機会を得ました。この時は五島列島の若松島や日之島、福江島、そして佐原の伊能忠敬記念館での史料収集、東京の伊能忠敬関連史跡訪問など公費で旅をすることが出来ました。体を動かして測量隊の踏査した現場に入れても、古文書も読めず、歴史に疎い私には気の重い時期もありましたが、皆様のご協力、ご支援で何とか報告書を提出することが出来ました。

「伊能忠敬の肥前国測量から200年」の平成24年(2012年)には、佐賀市で「伊能図フロア展」が開催され、その後、平成27年(2015年)には全国28番目で最後の「伊能図フロア展」が唐津市で開催されました。唐津での最終日、撤去作業が始まると熱いものが込み上げてきました。「伊能図フロア展」開催は、私の大きな夢でした。それが終わり大きな目標を失いました。故渡辺一郎先生と追い求めた夢が終わったのです。

平成25年4月、フロア展長崎開催の意見交換をするため長崎へ向かう車の中で、故渡辺一郎先生が「馬場ちゃんは体育会系だね、良く身体が動いているね!」と言ってくれたのが、最高の誉め言葉だったと振り返っています。

伊能忠敬研究会に入会してから20年近くになり、最近では「伊能忠敬研究」に対する意欲の減退が大きくなってきました。それは「現代の伊能忠敬」と称された渡辺一郎先生が亡くなられ、大きな指針を失ったことによるものでしょうか。また、九州支部例会で一緒にいた多くの先輩会員の松尾紀成様や平川定美様が亡くなられたこと、私の歴史街道の師匠である河島悦子様が高齢になられたことも一因です。

それでも今しばらくは「伊能忠敬研究会」会員として、私に出来る伊能忠敬顕彰は何かと問いながら、定期的に「伊能ウオーク」を開催し、伊能忠敬の全国測量の偉業と魅力を発信してゆきたいと思っています。



家庭菜園・じゃがいもの花

特集Ⅱ 伊能図の研究

伊能図の世界

鈴木 純子

伊能図とは？

伊能勘解由(忠敬)と彼の率いる測量隊の全国測量にもとづいて作られた日本全図である。測量は寛政12年(1800)から文化13年(1816)まで、足かけ17年、9次にわたっておこなわれた。なお、第8・9次測量の間の期間には江戸府内繫測測量がおこなわれた。輿地図編成のため主要街道の江戸出入口の位置関係を確定するためのものであった。第10次にあたる江戸府内測量は、全国測量とは別枠である。全国図は伊能隊の測量に、間宮林蔵による蝦夷地の測量成果を加えて、文政4年(1821)に完成し、幕府に上呈された。

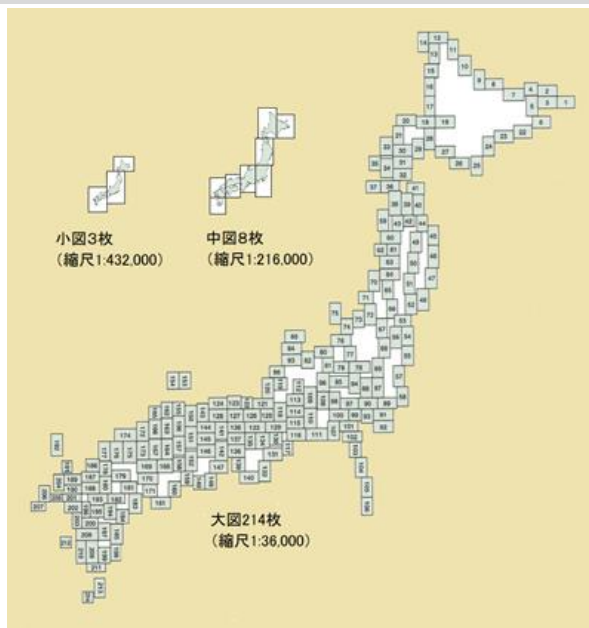


図1「大日本沿海輿地全図」一覧図

伊能は測量終了後、地図の完成を待たず、文政元年(1818)に没したため、地図の仕上げは幕府天文方高橋景保のもと、測量隊を構成した天文方のスタッフと伊能の弟子たちによっておこなわれた。地図自体には題名がないが、地図とともに上呈された測量のデータ集である「輿地實測録」(14冊1舗)では、「大日本沿海輿地全図」となっており、上呈図の箱書きは「實測輿地圖」であった。長期の測量の最終成果であるところから、最終版、最終上呈図などと通称される。全国を一貫した方法で測量し、正確な縮尺にもとづいて仕立てられたはじめての実測日本図である。

日本全図といっても、全土を一枚にあらわした地図ではなく、「大日本沿海輿地全図」は大図214枚、中図8枚、小図3枚からなっている。大・中・小というのは縮尺の違いをあらわす。そのほかの縮尺についてはあとであらためてふれるが、縮尺の大小は同じ地域を描く地図の大きさの違いとしてあらわれる。大きいものほど詳しい。大図の枚数が多いのは同じ日本の全土を描くのになぜかだけの枚数が必要だということである。(図1)は「大日本沿海輿地全図」大・中・小の各図がどのようなつながり、どの地域を描いているかを示す一覧図である。

残念なことに「大日本沿海輿地全図」は、幕府に上呈された正本が明治5年の皇居火災で、伊能家から献納された副本が関東大震災による東京帝国大学附属図書館の火災で焼失してしまい、現在には伝わっていない。しかし、伊能図の姿は完全に失われたわけではなく、最終上呈図の写しや、測量活動の各時期に作成された地図などが数多く知られており、かなりの確にその全体像をとらえ

ることができる。現存する最終上呈図の概要についてはあとでふれる。

伊能図の表現

伊能図はどのような地図か、彩色と描画、記号、経緯線、方位線、方位盤など、表現の特色を眺めてみよう。

◇彩色と描画

伊能図はいずれも手書きで、ほとんどは彩色されている。山地は薄緑、海・川・湖などの水面は薄藍、砂浜・河原は黄色、岩礁は薄墨、村落部分の薄茶色など、濃淡、色調の違いはあるが、基本的にはどの図にも共通の色づかいがみられる。海岸線と道路は朱色の折れ線(ジグザグ)で描かれており、これは伊能図の大きな特色である。この線は測線とよばれる。測線は伊能測量で用いられた、海岸線と道路の曲線を曲がり目にあわせて短い直線に分割し、それぞれの距離と方位角を測定してゆく、導線法という方法による測量の結果そのものを描く線で、この線が現地の曲線をあらわしており、伊能図の骨格である。折れ線の角々に針で突いた穴、針穴のあるものが伊能図本来の姿である。断崖などで直接測量できなかった海岸線は測線が得られないので、観察によるおよその形状がスケッチ風に描かれている。

測線沿いには近辺の景観や、遠望できる山岳などが絵画風に描かれ、国、郡、村名、また山、川、湖、岬などの地名が記載されているが、伊能図は海岸線と主な街道を測量の対象としており、実測部分のみを地図化しているため、測線から離れた内陸部には空白が残る。測線は実測データの縮図として平面形で描かれているが、沿道の景観は絵画風に描かれている。大図には村落の存在をあら

わす「へ」の字型の屋根の連なりと社寺の存在をあらわす水色の入母屋の屋根型が描き分けられ、主な社寺には名称が記入されている。城下町には城郭の姿（実景ではない）が描かれている。中・小図では社寺・城郭は記号化されている。

◇記号 記号は地図合印（図2）と呼ばれており、いずれも朱色である。ただし、「輿地實測録」では記号表は「符号」として示されている。実測結果をそのまま縮図し、縮尺の大きい大図と、それを縮小・編集した中図・小図とは記号の使われ方に違いがある。大図に用いられている記号は、天測地をあらわす☆、駅町（宿場）をあらわす○、港をあらわす舟型の三種で、その他の記号は記入のスペースが少ない中図・小図に用いられている。

国・郡境の記号は測線が境界を越える地点に配置される。大図の場合はその境界地点に両側の国・郡名が並べて書かれている。なお、記号は全ての図に完備しているわけではない。特に天測地の記号（極度測地）は副本レベルの図においても有・無の2種に分かれる。また、神社には横棒が2本のものである。測量隊の手になる地図には記号が手書きでなく、印が使われているものがある。伊能忠敬関係資料（伊能忠敬記念館所蔵・国宝）中には記号印が残されている。

◇方位盤（コンパスローズ） 美しい彩色の方位盤も伊能図の特色である。地中海起源のポルトラノと呼ばれる海図に使われたコンパスローズを思わせる。円盤上に東西南北の方位を記し、地図上の方位を示すものであるが、複数の地図の集合によって全国をカバーする伊能図では、隣り合う地図とあわせて一つになる半円の方位盤が接合の目印にもなっている。隣の図の同じ配色の方位盤

と合わせて全円にすれば、地図が正しく接合されるしくみである。

◇方位線・経緯線 中・小図では、経緯線と方位線が大きな特色である。方位線とは、遠方から見通すことができ、目標となる山岳や島に、その目標を望視することのできた測点から集まる朱の細い線で、その脇には観測地点から目標への磁針方位が表示されている。地図集成のための手がかりとして同一目標への方位線の集中が利用された。

経緯線（図1では度線）は1度間隔に墨で引かれている。緯線は赤道に平行する直線、経線は最終上呈図では京都西三条台にあった改暦所を通る子午線を中度（0度）として東西に度数を刻んでいる。経度1度の間隔は緯度に応じて北にゆくほど短くしている。緯線に直交する中度以外の、左右（東西）の各経線は、北側が中度線側に傾いて、緯線とは斜交する直線になっている。サンソン図法に近似する。なお、東日本測量のまとめとなった文化元年上呈の「日本東半部沿海地図」では、京都には測量がおよんでいないため、江戸深川黒江町の隠宅が起点である。

経緯線と方位線が大図にはなく、中・小図のみ

の特色となっているのは、大図は収録範囲が狭いため、1度間隔（約111km）の経緯線では粗すぎて用をなさず、方位線も目標はるか図の枠外になってしまったためである。

◇伊能図と経度 ところで、伊能図については、衆目の一致する正確な海岸線に対して、北海道などの列島北東部分と南西の九州部分の経度のズレが問題にされることがある。このことは明治から大正時代にかけて、本格的な伊能忠敬研究の先頭をきった大谷亮吉が厳しく指摘した。測量の精度に問題があったのだろうか。実はそのズレの大きな要因は測量自体の問題ではなく、球面である地球の表面を平面上に描く方法の不備であることが、保柳睦美など、その後の研究者によって明らかにされている。およそ次のような見解である。

地球が球体であることはもちろん知られており、当時の日本ではこの分野の最先端に位置していた師の高橋至時や伊能らは、経緯線網の描法についても考えてはいたが、経緯度であらわされる地球表面上の地点を、平面の地図に変換する方法―地図投影法の理論を会得するところまでは達していなかった。球面上にある図形の長さ、面積、角度など幾何学的な性質のすべてをひずみなく平面上

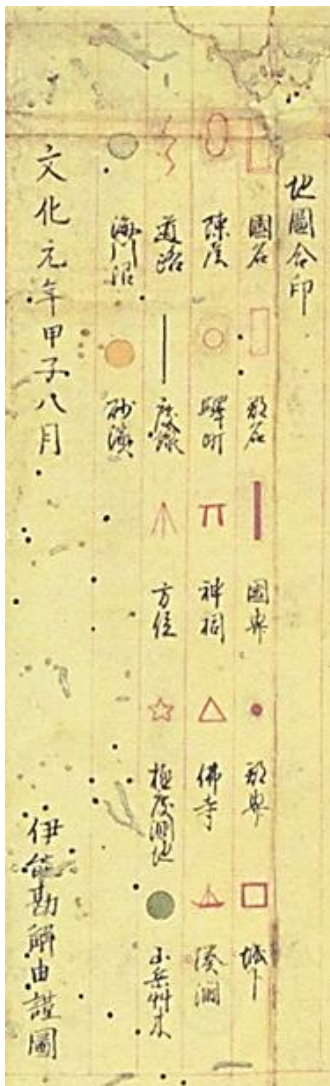


図2 地図合印
（「伊能実測日本小図」文化元年、国立国会図書館所蔵）

に描くことはできないので、いずれを優先し、いずれを犠牲にするのかによってさまざまな投影法が考案されることになる。地図を作るには、まず目的にあった投影法を選び、その経緯線網を土台として、各地点やそれらと関連する海岸線や道路などの位置を経緯度データによって定め、地図として完成させてゆく。

伊能図ではこうした手順ではなく、平面と見なすことのできる小地域の地図を、順次調整しながら接合して日本全域の平面図とし、前記の経緯線をあとから引いている。北ほど狭くなる経線間隔は球面を意識していることを示している。ところが、本来ならこの経緯線上に、各地点の経緯度をプロットし、その結果地図の図形も改変されるはずなのだが、それがなされていない。各地点の経度についても、当時の技術的限界から伊能測量では天体測量を介した経度の測定はかなわず、東西距離から算出するしかなかったため、その精度が緯度より低いことは考えられるが、ズレとされるものの主な原因は測量データの精度の問題というより、地図の図形と経緯線網の不一致によるというわけである。

伊能図の種類

焼失してしまった最終上呈図にかわる現存の伊能図にはどのようなものがあるのだろうか。

縮尺の違いのほか、江戸府内測量をあわせると10次に及んだ測量の各段階で、報告書として作られた多数の地図、また、上呈図や副本の写し、諸侯の依頼で複製、進呈された地図など、さまざまな地図が残されている。写真もコピー機もない時代なので、それらはいずれも手書きで作られ、結

果としてそれぞれに由来の異なる伊能図が伝わることになった。伊能図はそれらの総称である。ひとくちに伊能図といっても、縮尺、作成時期、作成の由来という三つ要素の組み合わせの異なるさまざまな種類の地図があるのはこうした事情による。

表1 伊能図作成数 大図欄()内は現存数、例えば1800年は21枚作られたというが現存が確認されているのは11枚

作成年次	地図の種類		特別小図	小図	中図	大図	特別大図	特別地域図	江戸府内図
	収録地域・測量回次								
1800	寛政12年	奥州街道・蝦夷地東南岸(1次)		1		21(11)			
1802	享和元年	相模・伊豆・房総から東北東岸など(2次)		1	4	32(0)			
1804	文化元年	尾張・越前以东の本州東部(1~4次) 「日本東半部沿海地図」		1	3	69			
1807	文化4年	近畿・中国沿海(5次)			2			3	
1809	文化6年	四国・大和路・気賀街道(6次) 日本輿地図藁(高橋景保編、未測部は他資料利用)	1	1	1	23(6)			
1811	文化8年	九州東部・南部(7次・九州1次)		1	1	21			
1815	文化12年	種子島・屋久島など(8次・九州2次の一部)				8			
1816	文化13年	伊豆半島東岸・伊豆七島(9次の一部)			1	1	7		
1817	文化14年	江戸(10次)							2
1821	文政4年	「大日本沿海輿地全図」(最終成果)		3	8	214			
1822	文政5年	瀬戸内海沿岸(「西国海路図」)			5				
1824	文政7年	全国(高橋景保編「日本国地理測量之図」)	1						
1826	文政9年	全国(カナ地名・シーボルト事件関連)	1						

縮尺

最終上呈図にみられる大・中・小、三種の縮尺が基本である。大図は当時の単位で1里を曲尺3寸6分であらわしており、現代の分数による縮尺では36,000分1である。中図の1里は6分、小図は3分、それぞれ216,

000分1、432,000分1となる。現代日本の地形図の体系と対比すると、大図は25,000分1と50,000分1図の中間にあたり、中図が20万分1地勢図にならぶ。

基本の三種以外では、歩測によった蝦夷地測量の成果図は200歩1分(大谷によれば43,636分1)で仕立てられたほか、特別地域図(琵琶湖108,000分1、厳島36,000分1、天橋立12,000分1)、伊豆七島特別大図(12,000分1)、特別小図(日本輿地図藁、日本国地理測量之図、カナ地名日本図、各864,000分1)があり、また、江戸府内図南北2枚は1町が6分、6,000分1である。

作成時期

表1は、さまざまな縮尺の地図が、どの時期に作られ、その地図はおよそどの地域を描いているかをあわせて示している。作成数はおもに日記などの記録類によっているが、記録のない時期や、記録にあるが地図の伝存が皆無でその数が妥当かどうかかわからない部分も含んでいる。

測量隊は原則として各次の測量を終えて江戸に戻ると、その範囲の地図を作って提出しているが、第3次測量では地図の提出はなく、第4次測量の終わった文化元年(1804)に、第1~第4次測量までのすべての測量結果をまとめた「日本東半部沿海地図」(沿海地図)が作られた。尾張・越前より東北地方まで本州の東半分と蝦夷地南岸をカバーする地図で、最終図の姿を想像させる一揃いである。提出されたこの図は江戸城の大広間に展観され、時の将軍家斉(11代)をはじめ幕府の高官の高い評価を得た。試行としておこなわれた第1次から始まり、幕府の助成はあったものの伊

能の個人事業として進められてきた第4次までの東日本の測量の集大成であり、これによって幕閣内でその仕事の意義が認められ、伊能の幕臣登用とともに、以後幕府直轄の事業として残りの西日本の測量を継続するという決定をもたらす転機となった地図である。控え図の一揃いが伊能忠敬記念館に伝わっている。

特別な縮尺の地図のうち、いずれも景勝地の琵琶湖、天橋立図、および厳島図は、第5次測量後の江戸滞留期間に、贈呈用として作られた。伊豆七島の特別大図は第9次測量の成果の一部である。最終図作成にかかるこの時期は、測量行程全体の地図は作られず、伊豆半島東岸の大図、伊豆七島の中図とこの特別大図だけが作られている。

江戸府内図は全国測量とは別に作成され、文化14年(1817)に上呈された。また、小図の半分の縮尺の特別小図は伊能測量には含まれていない国堺線などを加えた全国図で、いずれも伊能の上司にあたる幕府天文方の高橋景保が編纂している。

◆ 伝存図の由来

伊能忠敬研究の進展にともなうて、それまでに知られていなかった多くの伊能図の存在が明らかになっている。現在に伝わる伊能図の写しが作られたいきさつはさまざまであり、想定される上呈図との距離によって、便宜上、副本、写本、模写本、稿本といった区別がこなわれている。副本とされるのは、高橋景保が昌平坂学問所におさめた小図(東京国立博物館所蔵)や、いくつかの地域の領主の求めに応じて測量チーム関係者が作成、献呈したとみられる地図など伊能測量隊の手で仕立てられたと推定される地図である。

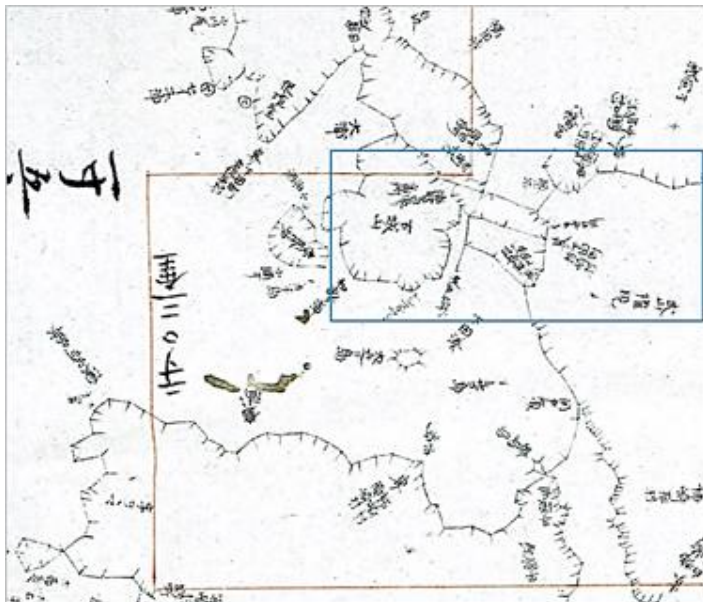


図3 下田付近下図(伊能忠敬記念館所蔵)に加筆
測線と地名を描く。短線で区切られた区間ごとに梵天を
たて、測定しながら進んだ



図4 下田付近魚(あら)絵図 伊能忠敬記念館所蔵
方位が逆になっているが、ほぼ図3の青枠部分にあたる
(図3・4とも『伊能図』(武揚堂 2002)による)

(図3・4とも伊能忠敬記念館所蔵：無断流用禁止)

測量チーム関係者による地図の作成には、原図の測線を正確に写すため、原図の測量経路の折れ線の曲がり角を針でついて、下に重ねた用紙にその位置を刻みつけ、その穴をつないで測線を転写する方法がとられた。副本クラスとされる地図にはこの針穴が認められる。針穴があり原本との距離が近いと考えられる図であっても、彩色などの完成度の低い図は稿本とされる。ほかに、江戸時代の転写図は写本、明治期の転写図は模写本とされる。ただ、各図の成立の経緯はすべて明らかにしているわけではなく、区分も絶対的なものとはいえない。

これらの写本のほかに、幕末期には伊能小図に

北蝦夷(サハリン島)、小笠原諸島、琉球諸島を加えるなどの増補をおこなった、木版3色刷の「官板実測日本図」が作成されている。地図には刊行年の記載がないが、慶応元年ごろの刊行とされる。

◆ 伊能図以前の「伊能図」―下図・魚絵図

測量の結果はどのようにして地図に描かれたのだろうか。
測量のデータから直接地図ができるわけではなく、測線を主体とする小区域の「下図」から段階を踏んで仕上げられる。下図にもいくつかの段階があり、ごく狭い区域の下図を大図1枚の範囲まで集成し、そこに沿線の景観や地名が記入され、

地図として完成する。下図を作る作業は測量行程の途上、宿泊先で随時おこなわれている。中図、小図は記載事項を調整しながら大図を縮小して編集する。これらの作業の途上でも、測点の転写は、針穴を使う針突法によっている。

測線の下図に景観表現を加えるためには、測量データを記録する野帳の注記や、測量とあわせておこなわれた沿線の風景スケッチなどが用いられた。この風景スケッチは「亀絵図」とよばれる。スケッチのために担当者が山など高所に登ることもあった。

最終上呈大図の姿

正本、副本ともに明治以後に焼失してしまった本来の伊能図ともいうべき最終上呈図（大日本沿海輿地全図）のうち、中図、小図は少数ながら副本レベルの写しが知られていたが、大図については同時代に毛利藩、松浦藩領について領主のもとに応じて作成されたそれぞれの領内の地図、また明治期の模写と思われる国立歴史民俗博物館所蔵図など、全214図中20図弱しか知られず、そのほか明治期の海軍水路部（現 海上保安庁海洋情報部）による、縮小や近代図式に改描した模写図147図が残るのみで、全体像は捉えきれないままであった。

しかし、いずれも明治期の模写図ながら、1997年には気象庁で43図（その後、国立国会図書館に移管）、2001年にはアメリカ議会図書館で207図が発見されたことによって、最終上呈大図の全容が見えてきた。207図といえば全214図から欠けること7図のみで、国立国会図書館所蔵の43図の収録地域も含んでいる。ただ、明治

期に陸軍参謀局が写したと思われるこの図群は、山地、村落などに簡易な着色のある37図を除き、大部分は墨と赤（測線）、藍（水）を主体とする描画で、伊能図の骨格である海岸線や測線となった街道、地名などを正確に写すものの、絵画的表現は簡略化されている。

一方、国立国会図書館所蔵図は、点数は少ないが、明治期の内務省系の写しで、測線の折点がやや不明瞭ではあるが、絵画的表現も含めて原図に近い表現を残しているとみられる（図5）。議会図書館で欠図となっている7図のうち、1図は国立国会図書館所蔵図、2図は国立歴史民俗博物館所

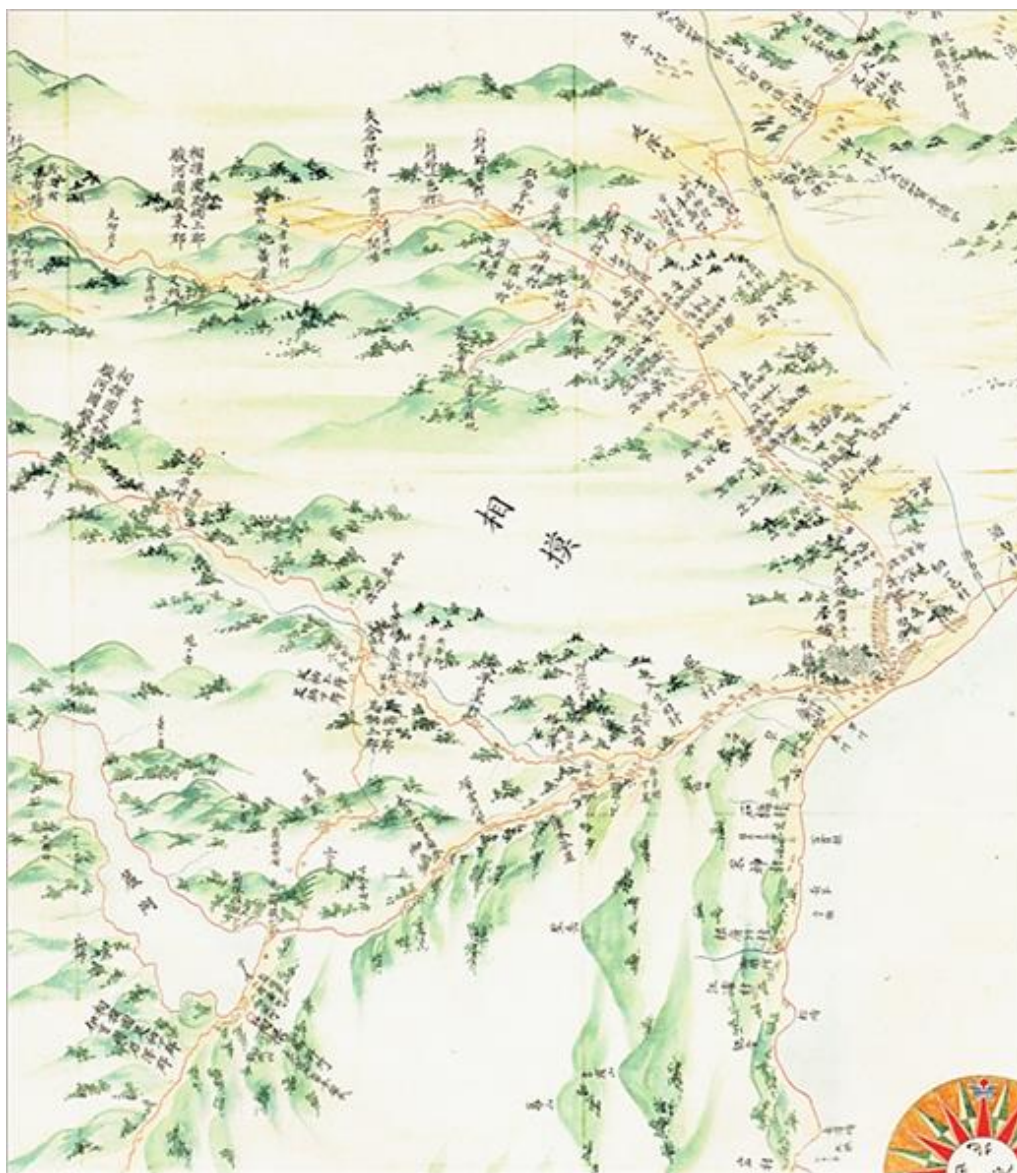


図5 最終上呈大図第99号（部分） 国立国会図書館所蔵
右下隅にコンパスローズの一部が見えている

蔵図中に、残る4図は近代図風の改描、縮小などはあるものの海洋情報部所蔵図中に含まれることがのちに確認され、214図全てが何らかのかたちで揃うことになった。

現在では毛利・松浦図、国立国会図書館図などを参考にして、議会図書館所蔵図の景観、彩色などをCG技術によって増補したものが加わり、214図全てが原図の面影を思わせる画像として復元され、印刷、刊行もされている。2009年から2015年にかけてそのようにして復元された地図の原寸大パネル214図を体育館の床にならべる「フロア展」が全国28か所で行われた。

大図の復元だけでなく、1990年代以降、最終上呈図の写しは、フランスのイブ・ペイレ氏宅に、針穴があり、精細な副本レベルの中図8図（現NISHA榊所蔵）、高橋景保が昌平坂学問所に納入した小図3図（前述）、大槻如電旧蔵の小図2図（本州東北部・西南日本、東京都立中央図書館所蔵）といずれも優品の存在があきらかになっている。さらに、2021年には、ゼンリンミュージアム（北九州市小倉北区）の3図セットの新収日本図が、諸条件の揃った副本レベルの伊能小図であることが判明した。

以前から知られている図としては、中図では三河吉田（豊橋）藩主大河内家旧蔵、東京国立博物館所蔵の8図揃、来歴不詳ながら完成度の高い成田山仏教図書館所蔵の8枚揃、東京大学博物館所蔵の関東地方を欠く7図があり、学士院、国土地理院（北海道を除く6図）、天理図書館（佐渡島および対馬・五島を別図とする10図）に模写図などがある。小図は東京都立中央図書館に北海道を除く2図、神戸市立博物館に東日本を除く2図、元

福山藩主阿部家に伝わる北海道図、イギリスの国立公文書館所蔵の3図揃などの優品がある。

近代地図への予兆

伊能図は日本における近代地図の黎明を告げる地図と見なされている。その理由のひとつは、近代科学に通じる実証、実測が作業の規範となっていることである。伝統的な土地測量の方法によりながら、精度を高める方策を徹底し、天体観測による緯度の測定を重ねて、形の正確さだけでなく、日本列島各地の地球上の位置の測定結果を示した最初の地図であり、三角測量を骨格とする近代地図の方法には達していないながら、考え方の点で確実に近代への一步を踏み出している。それまでの江戸幕府による日本図が、諸藩に命じて個別に提出させた国絵図を集成、編さんしたものであったのに対し、伊能図は、はじめて日本列島の輪郭全体を、一貫した方法で測量して作られた地図という点で画期を示している。

近代地図への兆しは地図への視点の変化にもあらわれている。従来の官撰日本図は、統治の表象としての地理、生産力の把握を主な目的としており、意識は国内に向かっていくのに対し、ロシアの南下、イギリス船の接近などを契機のひとつとして実現した伊能図における海岸測量には、対外関係のもとでの客観的な国土の確認、経緯度によって国土を世界に位置づけるという、外向きの意識がはたらいっている。伊能自身、生まれ育った九十九里の海岸線という原体験にはじまり、江戸での蘭学者大槻玄沢などとの交誼をつうじて、外と内との境界としての海岸という意識は感知していたであろう。こうした転換は、明確な意図という

よりは潜在的なものであったかもしれないが、その後の対外関係のなかで次第に確かなものになっていったものと推察される。

完成から40年ほどを経て幕府の手で刊行された伊能図、「官板実測日本図」の編集段階では幕閣内で、国土の表現、日本の領域の表現についての議論がおこなわれている。

伊能図のプロジェクトは実施面でも、伊能の個人事業から幕府事業へと形をかえながら、目的達成のための専門家集団を立ち上げ、藩領を越えて全国測量をおこなうという新しい方式がとられている。社会の要請と表裏をなす地図の変化として興味深い。

伊能図はどう使われたか

◆江戸時代の伊能図利用 伊能図は幕府の秘図で、明治直前までほとんど使われることがなかったといわれてきたが、そうとは言いきれないことが近年明らかになっている。伊能図がただちに印刷され、市中に出回らなかったことは、この図がもともと幕政用のものであり、内容の面でも実測結果にこだわった地図で、測量されなかった部分は描かれていないという点などから見れば、あながち不自然とはいえないだろう。伊能が不確かながら出版を考えたいことを示す手紙が見つかってはいるが、出版するとなれば一定の編集は必要だったと思われる。

伊能図の活用にとって、文政11年（1828）のシーボルト事件がブレーキとなったことは事実であろう。禁制ということへの恐れだけでなく、高橋景保やスタッフの処罰によって、測量事業の継続的な発展もとぎれる。



図6 上：日本全図（宮本三平編・文部省刊・明治9年・東・西2枚のうち東部）
下：上図識語部分（赤枠内・識語傍線部分〈加筆〉で沿海および道路に伊能図を利用したことを述べている）京都大学図書館所蔵

しかし、それから10年も経たず、天保国絵図作成（天保7年 1836）にあたって、佐渡国では伊能大図が利用され、アヘン戦争を経て欧米露の測量艦の接近、部分的な測量の強行などが続いた嘉永期（1848）ごろ以降になると、海防掛（弘化2年 1845）などで伊能図が使われている。海防掛では江戸湾岸警備の調査用に一帯の伊能大図を写し、水深、砲台などを記入した地図を作成している。手書きの地図が早稲田大学図書館などに所蔵されている。これらの原図はいずれも文化元年（1804）上呈図であるが、佐渡では「伊能勘解由製作絵図」「享和度天文方測量御絵図」（文化元年図の佐渡地域測量は享和2年）と、伊能図であることを明らかにしており、海防掛では「分間絵図御勘定所扣への分」を渡すので早々に写しとるようなやり取りが残っている。長崎海軍伝習所にも江戸から取り寄せた伊能小図があり、文久年間には幕府の海軍所、外

国掛も開成所絵図引に小図の写しを依頼するなど、海岸実測図という伊能図の特性が力を発揮している。よく知られたイギリスへの小図譲渡も、この時期の外交、海防の舞台での伊能図の存在感という背景があつたことであり、「官板実測日本図」の刊行は国内での利用だけでなく、外国からの要望への対応も考慮したものであつた。

◆明治期の伊能図利用 近代的な地図の作成が軌道にのるまでの明治前半期には、測量・地図はもちろん鉄道など各種事業始動の基礎資料として、また、さしあつたの経緯度入り実測図として伊能図が広く利用された。上呈本は明治5年の皇居火災で焼失したため、その後は同7年に伊能家から納められた副本（控図）が使われている。変動がばげしい明治初期の個別の組織にはふれないうが、国の史誌編纂事業のため、太政官正院に修史局が置かれ、ここが伊能家献納の地図を保管した。のち、明治10年に修史局から分かれた内務省

地理局に移る。現在の国土地理院につながる陸軍参謀局、海上保安庁海洋情報部につながる水路局は伊能図利用のための模写活動を展開している。

地図の出版としては、「官板実測日本図」の重版（明治3年）、川上寛（冬崖）の「大日本全図」（明治4年）などそれぞれに加工はされているものの、ほぼ伊能図を再現する地図にはじまり、明治6年にはウィーンで開催された万国博覧会に出品するための日本図（2枚セット）が、伊能図小図をもとに、同縮尺で、その他の資料を加えて、選り抜きの技術者集団によって作成され、賞牌をうけた。しかし、手書きのこの地図は現存していない。

伊能図に他の資料を加え、近代的な表現で新たに編集した地図の出版は明治10年ごろからさかになる。内務省地理局による「大日本全図」（明治13年）、「実測畿内全図」（明治9年）、文部省による「日本全図」（明治9年、東西2枚セット、図6）などがよく知られている。

参謀本部陸軍部測量局により、明治19年から刊行が始まった輯製20万分1図は現在の20万分1地勢図の前身にあたる近代のシリーズ地図で、編集資料のひとつとして伊能図をあげている。近代測量の進展にしたがって近代的な20万分1帝国図に切りかわってゆくが、帝国図が完備する昭和4年（1929）まで、伊能図が現役の一端にとどまっていたことになる。

海岸測量を特色とする伊能図は、水路局（の地水路部）の海図作成にも活用されている。一部の海岸線や、測量のための旗標設置位置の立案などに利用のあとが残る。

【参考文献】

- ・井口利夫「間宮林蔵の東蝦夷地測量」『伊能忠敬研究』41 2005
- ・伊能忠敬研究会編『伊能忠敬未公開書簡集』伊能忠敬研究会 2004
- ・伊能忠敬研究会『伊能忠敬研究』（特集・北海道図と間宮林蔵）75 2012
- ・清水靖夫・長岡正利・渡辺一郎編『伊能図』武揚堂 2002
- ・鈴木純子「伊能図はどう利用されたか その1 江戸時代」『同 その2 明治時代1』『伊能忠敬研究』65・67 各2012
- ・長岡半太郎監修・大谷亮吉編著『伊能忠敬』岩波書店 1917
- ・保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績 訂正版』古今書院 1980
- ・渡辺一郎・鈴木純子『伊能忠敬の地図を読む 増補改訂版』河出書房 2010

「全国巡回フロア展」開催状況

年	開催期間	市区町村	会場	来場者数
2009年	4/9 ～ 4/12	東京都江東区	深川スポーツセンター	6,000人
	6/2 ～ 6/5	神奈川県横浜市	横浜港大栈橋ホール	2,000人
	11/5 ～ 11/8	埼玉県与野市	与野体育館	3,100人
2010年	5/1 ～ 5/3	東京都小金井市	小金井体育館	8,500人
	6/17 ～ 6/20	茨城県水戸市	青柳市民体育館	3,000人
	6/24 ～ 6/27	島根県松江市	松江市総合体育館	3,600人
	7/30 ～ 8/1	福岡県福岡市	中村学園体育館	3,010人
	8/5 ～ 8/8	愛媛県伊予市	しおさい公園市民体育館	8,000人
	8/12 ～ 8/16	新潟県新潟市	東総合スポーツセンター	2,100人
	8/26 ～ 8/29	兵庫県加古川市	兵庫大学体育館	4,300人
	10/9 ～ 10/10	奈良県奈良市	奈良大学体育館	2,400人
	10/23 ～ 10/24	石川県金沢市	金沢工業大学体育館	3,200人
2011年	4/21 ～ 4/24	長野県飯田市	飯田市鼎体育館	3,300人
	5/28 ～ 5/29	千葉県習志野市	千葉工業大学体育館	1,300人
	6/16 ～ 6/19	北海道帯広市	明治十勝オーバル	7,600人
	10/21 ～ 10/23	福岡県八女市	八女市総合体育館	3,400人
	10/28 ～ 10/30	大阪府大阪市	大阪工業大学体育館	2,500人
	11/4 ～ 11/6	広島県安芸市	広島国際学院大学体育館	3,500人
2012年	4/26 ～ 5/2	千葉県香取市	香取市民体育館	7,418人
	8/3 ～ 8/5	佐賀県佐賀市	市村記念体育館	3,700人
	9/21 ～ 9/24	岡山県岡山市	加計学園（岡山理大）体育館	5,014人
	10/12 ～ 10/14	広島県呉市	呉市総合体育館	4,577人
2013年	11/6 ～ 11/11	沖縄県那覇市	沖縄県立武道館アリーナ	5,150人
	11/21 ～ 11/24	鹿児島県指宿市	宿毛市総合体育館	2,140人
2014年	2/14 ～ 2/16	福岡県飯塚市	近大福岡キャンパス	1,720人
	3/27 ～ 3/30	栃木県宇都宮市	宇都宮市河内体育館	3,400人
	8/28 ～ 8/31	東京都中央区	中央区立総合スポーツセンター	2,226人
2015年	2/27 ～ 3/1	佐賀県唐津市	文化体育館	6,080人
合計				112,235人

「全国巡回フロア展」開催状況

米国で発見された大図は、線画のみの図が多いため、既存の伊能大図の着色を参考に、作製当時の色彩を再現した画像を作製し、体育館など全国の大規模施設を利用してフロア展を開催した。フロア展の名称は、「完全復元伊能図全国巡回フ

「全国巡回フロア展」で、実施主体は、完全復元伊能図全国巡回フロア展中央実行委員会である。2009年4月の東京都江東区深川から始まり、2015年3月の佐賀県唐津市までの6年間にわたり、全国28か所で開催された。この間の来場者数は、延べ11万人を超え、一か所当たりの平均来場者は4000人にのぼった。

伊能図研究100年を振り返る

星 埜 由 尚

伊能忠敬とその測量隊による全国測量と日本地図作製の歴史的事業が完成して200年が経過した。コロナ禍の中ではあったが、伊能忠敬没後200年と合わせ、「大日本沿海輿地全図」幕府上呈200年を記念していくつかの行事や雑誌などでの特集などが行われ、その偉業が顕彰された。「大日本沿海輿地全図」1*は、文政4(1821)年に幕府への上呈後、幕府の書庫に秘蔵され、関係者が閲覧できるのみであったが、有力大名等に献納されたいわゆる「副本」2*やその後に写された「写本」3*が存在した。幕末になると、伊能図を利用して海防のための地図が作製され(藤原2007)、さらに幕府開成所から「官版実測日本地図」が明治維新直前に刊行されて維新後も大学南校から発行された。明治初期には、陸軍、海軍及び内務省において模写が行われ、一部の「模写図」は現存しており、陸軍模写図(アメリカ大図)はアメリカ議会図書館及び国立歴史民俗博物館、海軍模写図(海保大図)は海上保安庁海洋情報部、内務省模写図(国会大図)は国立国会図書館に所蔵されている。デジタル画像として閲覧できるものも存在する。

明治の元勲、榎本武揚や佐野常民などは、伊能忠敬の功績を高く評価し、伊能忠敬の叙位を政府・議会で働きかけ、明治16年には正四位が贈位され、明治22年には東京地学協会4*が東京芝公園に「贈正四位伊能忠敬先生測地遺功表」を建立した。これを契機として、物理学者長岡半太郎が帝国学士院に諮り、当時新進の地球物理学者大谷亮吉に命じて伊能忠敬の事跡と業績を調査させ、纏めら

れたのが大正6年に岩波書店から刊行された『伊能忠敬』(大谷1917)である。『伊能忠敬』は、B5判、816ページに及ぶ大冊であるが、伊能忠敬の生涯と全国測量・地図作製に関して詳細にわたって調査・研究し、その内容を網羅的に記述しており、科学的伝記としても高い評価を受けている。『伊能忠敬』の中で述べられていることは、その後の伊能忠敬研究に大きな影響を及ぼし、戦前・戦後にわたって永らく伊能忠敬の人物像及び業績に関する定説となった。

大谷亮吉の『伊能忠敬』以後、伊能忠敬の伝記・事蹟に関する著書・論文は数多見られる5*が、伊能忠敬の全国測量と伊能図作製に関する書誌学、測地学、地図学の側面についての研究成果は、管見の限り皆無に等しい状況が戦前・戦後を通して続いていた。この間には、大谷(1917)の所論を祖述する一般書、啓蒙書、教科書などが戦前社会の価値観と相俟って出版され、伊能忠敬の測量技術、伊能図の作製については、大谷(1917)が権威を持ち、その所論が批判的に検討されることはなかった。

そのような状況の中で東京地学協会が昭和40年に「伊能忠敬測地遺功表」を再建6*したことを記念して、昭和49年に保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』が出版され、伊能忠敬の全国測量と地図作製についての科学技術的側面について、戦後初めて科学的に論じられた7*。平成10年には、同じく東京地学協会が伊能忠敬生誕250年を記念して『伊能図に学ぶ』を出版し、伊能忠敬の全国測量と地図作製について様々な側面から解説的論文を集めている。しかし、伊能忠敬の測量技術や地図作製手法については、基本的には大谷(19

17)の所説が踏襲され、伊能忠敬についての啓蒙書などにおいては、大谷(1917)と保柳編著(1974)の内容に基づいて解説されてきた。

一方、伊能図の書誌的知見は、昭和40年代から秋岡武次郎8*、保柳睦美9*などにより少しずつ増していったが、平成の時代となり、伊能忠敬研究会が発足してからの進展には著しいものがあつたと言える。伊能図の再発見、再確認も相次ぎ、伊能忠敬研究会もこれに大きく貢献したが、特に、故渡辺一郎氏、鈴木純子氏の功績は大きい。また、伊能図の様々な図録も出版され、これにも渡辺氏と鈴木氏の尽力があつた。

伊能図を集めた図録は、これまで鈴木純子・渡辺一郎編『最終上呈版伊能図集成』(柏書房)、近年には、渡辺一郎監修『伊能大図総覧』(河出書房新社)、渡辺一郎監修『伊能図大全』(河出書房新社)など大冊が出版され、その他伊能図に関する展覧会に併せて発行された図録なども多数ある。これらには、幕府に上呈された大図(36000分1)、中図(216000分1)、小図(432000分1)の完成図又はその写本が系統的に整理されて解説が付されており、伊能図研究のための資料として価値が高い。

最近、徳島大学名誉教授平井松午氏を研究代表者とする文部科学省科学研究費補助金による研究課題「伊能図の成立過程に関する学際的研究―忠敬没後200年目の地図学史的検証―」(2018―2021)の研究成果である平井松午・島津美子編『(稿本・大名家本)伊能図研究図録』と平井松午編『伊能忠敬の地図作製伊能図―シーボルト日本図を検証する―』が出版された。『(稿本・大名家本)伊能図研究図録』は、研究成果としての初

めの図録である。

『(稿本・大名家本)伊能図研究図録』においては、現存する伊能図の料紙、彩色、針穴、記載内容などを通して、超高精細画像データや非破壊調査などにより、伊能図の特徴や作製・編集過程を明らかにしようとし、16の機関に所蔵されている各種伊能図の画像、特に伊能忠敬記念館所蔵の伊能図が多数掲載されているほか、これまで十分に研究されてこなかった伊能忠敬全国測量の途次に作製された伊能図が多数紹介され分析されている。また、平井松午編『伊能忠敬の地図作製伊能図―シボルト日本図を検証する―』の中では、伊能図の作製過程、下図と寄図の位置づけ、伊能図作製過程における針穴の分析、伊能図の記号と凡例、コンパスローズについての分析などが述べられている。

以上のように、伊能図の作製に関する科学技術的研究においては、地図投影法についての大谷(1917)の誤解を指摘する研究はあったが、基本的に大谷(1917)に基づき、その所説を継承・発展させる研究が進められてきたと言える。それに対し、大谷(1917)の所説に対し疑問を提出したのが野上道男氏による一連の研究である。

伊能図の作製に関する科学技術的視点からの課題は、度法、測量手法、地図投影法及び図化手法に大別することができる。大谷(1917)以来の約100年にわたる伊能忠敬の業績に関する研究と知見の発展について網羅的に語ることは、筆者の能力を超えるところであるが、上記の課題に絞って大谷(1917)以降約100年間の研究状況についてその動向と課題について述べてみたい。

1. 度法について

子午線1度の距離を測定することを目的として伊能忠敬による全国測量が始められたことは、よく知られている。大谷(1917)は、子午線1度の距離を度法と称し、伊能忠敬が残した記録を参照してその算出について解説している。大谷(1917)によると、伊能忠敬は、第一次測量(蝦夷地)において、1度27里余の数值を算出したが、その測量は略測であり、精度には問題があった。そのため、第二次測量において伊豆から奥州に至る海岸線と奥州街道の測量結果を基に、それらの測線をいくつかの区間に区切り、その南北成分距離を算出し、天文測量による緯度値から求めたそれぞれの区間の緯度差で除して緯度1度の距離を算出した。その結果、度法28・2里の数值が求められた。さらに、第三次測量において深川―白河間において同様に子午線1度の距離を算出し確認した。保柳(1974b)も同様の経過を述べている。

伊能忠敬は、緯度1度28・2里を算出し、師の幕府天文方高橋至時にこれを報告したが、高橋至時は、これをなかなか信用しなかったと言われている^{10*}。そして、高橋至時がいわゆる「ランデ暦書」の翻訳に当たり、その中に伊能忠敬が算出した数値に「密合」する数値があることを知り、初めて伊能忠敬算出の数値を認めたと言われ^{11*}、これが通説となっている。しかし、「ランデ暦書」に記された数値の単位は、フランスのトアーズであり、日本の尺ではなく、その換算は、いかなる根拠に基づいていたのか^{12*}不明である。

度法28・2里については、保柳(1974b) ^{13*}は、110・75 kmとなることを述べており、現在の北緯35度前後における値110・94 km

に非常に近似することから、伊能忠敬の測量が高精度であると一般に広く解説されてきた。これに対し、野上(2020)は、伊能忠敬が用いた尺と「ランデ暦書」のトアーズとの間で原器の比較が行われておらず、「ランデ暦書」の数値と伊能忠敬が算出した緯度1度28・2里の「密合」について疑問があることを述べ、緯度1度28・2里は、地図作製のための定義値であり、伊能測量の精度を表すものではないと述べている。

伊能忠敬は、第二次測量後に算出した度法の値を採用しており、その数値に拠って地図作製を行っている。伊能測量は、子午線1度の距離を知るために始まったのであるが、第一次測量はともかく、第二次測量以降は、第二次測量により求めた度法の値を確定し、それに拠って地図を作製したと言える。第十次までの測量において、度法をその都度改定したとすれば、その都度作製する地図の真の縮尺が変化したであろう。「大日本沿海輿地全図」の完成に向かって10次にわたる全国測量を行うためには、度法を確定しなければならなかった。野上(2020)の指摘の通り、度法は定義されたのであり、それなくして「大日本沿海輿地全図」は完成しなかったと言えるだろう。^{14*}

2. 伊能測量の手法

大谷(1917)は、伊能忠敬の高弟渡辺愼が著した『伊能東河先生流量地傳習録』^{15*}(以後「伝習録」と言う。)に基づき、伊能忠敬の測量法を解説している。それによると、伊能忠敬の測量は、導線法が基本であり、交会法、横切測量、天文測量による緯度測定により誤差の累積を防いだとされている^{16*}。しかし、一方で遠距離の目標物を使っ

た交会法は、地表が球面であるため導線法による測点の位置誤差の補正には使えず、山島などの位置を求めるために使われたに過ぎず、近距離の地物が交会法による測点の位置誤差の補正に使われたに過ぎないとも述べている^{17*}。また、天文測量により緯度を求め、導線法により測地的に求めた緯度との差から導線法による実測結果に修正を加えたと述べており^{18*}、緯度測定は、伊能忠敬が広大な地域の測量を精度よく行えたことに大いに力があつたとも述べている^{19*}。具体的には、天測点間の東西・南北成分距離を算定し、それを度法により除して天測点間の緯度差を求め、天文測量により直接求めた緯度と比較して導線法の実測結果を修正した、としている^{20*}。

このように大谷（1917）が述べているにも拘わらず、一般には『伊能忠敬』第二章（二）で述べられている交会法と横切測量による補正が強調され、伊能忠敬に関する数々の著作などにおける伊能忠敬の測量法の解説では、遠距離の山島が補正に使用されなかったことは、ほとんど触れられていない状況であつた。横切測量については、保柳（1974d）も伊能忠敬の測量法の中でも特色のある方法であると述べており^{21*}、地図にも横切測量に該当する測線が描かれているところから、その適用が広く認められてきた。

これらの伊能測量についての通説に対し、野上（2019a, b）は、いわゆる「模写本」であるアメリカ大図の測点について、画像ピクセルの読み取りによる座標値から求めた緯度と地理院地図上で読定したその測点の緯度との差の分布から、必ずしも横切測量による測線が優先されているわけではなく、横切測線による測線の補正と言う原則

は見られないとし、大谷（1917）以来の通説を否定している。また、同様の分析から、山島の方位測量すなわち交会法による測線の補正も見られず、交会法による山島の方位測量は、山島の位置を求めるためのものだったとしている。そして、測量誤差の補正は、星測^{22*}による緯度測定結果が基準となっており、交会法、横切測量による補正は、原則的に行われていないことを指摘した。大谷（1917）が述べた伊能忠敬の全国測量と地図作製における星測による緯度測定については、その重要性が看過されていた^{23*}が、改めて野上（2019a, b）により、星測による緯度値が伊能図の基本的な基準であることが明らかにされたと言える。また、交会法と横切測量についても、漫然と伊能忠敬の測量手法として解説されてきたが、再検討を迫るものとなった。

野上（2019a, 2019b）は、星測による緯度の決定が伊能測量の基本であり、緯度観測値により導線法による測量結果が補正されたことを指摘している。野上（2019a, 2019b）の指摘のように、緯度観測値の精度は高く、図化の基準となるべきものであり、天文観測点における導線法により求められた測点位置と緯度観測値の差を補正することが第一義として行われるべきものである。従って、伊能図の精度の高さは、天文観測点を基準として導線法の測量結果を補正したことにあり、交会法や横切測線による補正は、あくまで二次的なものであり、局部的なものであつたと考えられる。野上（2019b）は、「伊能図は天文測量で枠組みが作られ、導線測量は細部測量に相当する」と述べている。

大谷（1917）及び保柳（1974d）の横切測

量についての見解は、渡邊愼の著作に基づいており、確証があるわけではない。しかし、渡邊愼の著作に横切測量のことが述べられている以上、小半島、岬などにおける周回測量が困難な場合に、半島や岬の基部で横切測量を行い、導線法による測線の補正を局地的に行うことはあつたと考えられるが、本州、四国、九州の縦横断などの大規模な横切測線となると、地表が球面であることの影響があり、閉合地点で大きな食い違いが出たことは容易に想像される。後次の測量による測線が前次の測量による測線に閉合する場合も大きな閉合差が生じることは当然であろう。野上（2021d）は、第五次測量と第四次測量の測線閉合点の場合を検討し、このような場合には、閉合誤差は第五次測量の測線に配分されたと結論づけている。

3. 伊能図の投影法

球面である地表を測量して地図を作製するためには、球面上に展開している地物の位置を平面上に変換する作業、すなわち地図投影が必要となる。地球が回転楕円体であることは、伊能忠敬も師の幕府天文方高橋至時の『ラランデ暦書』の翻訳を通じて知識として知っていたと思われる。一方で、伊能忠敬は、地球を回転楕円体として扱わず、地球を球として球面を平面に変換しようとしたことは、伊能図中図・小図に展開されている経緯線の存在^{24*}から知ることができる。しかし、伊能図においては、このような経緯線を基準にして測量された測点や地物の位置を球面から平面に変換して地図に投影することは行われておらず、導線法・交会法により得られた測点の位置を補正はしたが、そのまま図紙の上に展開している。

大谷(1917)は、伊能図において描入されている経緯線から、伊能図の投影法はサンソンⅡフラムステイード式であると述べ、それにも拘わらず、伊能図に展開されている測点は、地球が球面であることを忘却して、投影を無視した測量したままの測点を図紙に展開したものであるとして、重大な失策であると非難している。その後、このような大谷(1917)がサンソンⅡフラムステイード式であるとした記述が通説となり、伊能図の投影図法はサンソンⅡフラムステイード式であると理解されてきた。

このような通説に対し、その誤りを指摘したのが広瀬(1974)である。広瀬(1974)は、伊能図の経緯線は、サンソンⅡフラムステイード式により投影された経緯線に相当するが、測量データは、地表の球面を考慮せず、平面として扱われた図紙上への展開がなされており、「方格思想図」であると述べている。

その後、羽田野(1998)、金澤(2000)、吉田(2003, 2008)などにより伊能図の投影法が論じられおり、菱山(2017)、星埜(2020)、野上(2021)も伊能図の経緯線がサンソンⅡフラムステイード図法により描かれたものであることを否定していないが、地図そのものの図法がサンソンⅡフラムステイード図法によるものでないことは明確にされてきており、菱山(2020)は、正距割円筒図法を伊能図に当てはめた場合の海岸線などの適合性について論じている。

4. 伊能図の図化手法

伊能忠敬の全国測量の成果は、文政4(1821)年、幕府に「大日本沿海輿地全図」と「輿地實測

録」として上呈された。「大日本沿海輿地全図」は、大(36000分1)・中(216000分1)・小(432000分1)の縮尺からなる地図からなり、大図は214図幅、中図は8図幅、小図は3図幅であることは、周知の通りである。「大日本沿海輿地全図」の完成に至る全国測量データの図化の過程は、「伝習録」にその概要が説明されている。「伝習録」は、伊能忠敬測量隊の構成員が残した伊能忠敬の測量手法に関する唯一の解説である。

大谷(1917)は、「伝習録」と残された「下図」、「寄図」、「大図」、「中図」、「小図」などから伊能図の図化手法を解説した。その後、大谷の所説が伊能図図化手法の定説となり、多くの伊能図の解説が大谷の所説の祖述に近いものとなっていた。しかし、最近、野上道男氏による伊能図図化手法に関して大谷説の見直しが行われ、また、文部科学省科学研究費による平井松午氏を中心とするグループによっても伊能図図化手法について研究が行われている。

(1) 渡邊慎述、編『伊能東河先生流量地傳習録』

「伝習録」においては、「絵図仕立」として「下絵図(下図)」、「寄図」、「上絵図(清絵図)」の図化の過程の概略が述べられており、それによると、「伸縮を防ぐために水張りした西の内紙を用意し、水張紙には白徑(簞)による庄痕線を東西または南北に引き、白徑上に針穴を開けて測量開始点とし、測量結果は、各測点間の東西・南北成分の直径(距離)を八線表を用いて推歩(計算)し、測量開始点と終了点との間の東西・南北成分の距離の総和を求めて開始点から縮尺に合わせたその総和に当たる地点に針穴を開ける」、すなわち、測量開始点と測量終了点(通常、一日の測量範囲であることが多

い)の座標値を東西または南北の基準線のある用紙に所定の縮尺によりプロットすることとなる。

測量開始点と測量終了点間の測線上の測点の図紙への展開は、「伝習録」では、「野帳に記載されている各測点間の方角(方位角)と間数(距離)を次々に分度矩と厘尺により縮尺に合わせて各測点の位置を測って針穴を開け、最後に既に座標値としてプロットされている測量終了点の針穴と一致すれば良しとし、一致しない場合には、絵図に引き違いがあるので各測点の展開をやり直す」としている。これは、測量開始点と終了点間の各測点は、測線の方位角と距離の測量結果から図解的に図紙の上に展開することを示している。各測点の間の東西・南北成分距離すなわち各測点の座標値を求めているにも拘わらず、各測点を図紙上に直接プロットせず、なぜ図解法により展開していたのか、この点について後述するように、野上(2019a, 2021c)は、導線法による各測点の位置は座標値により図化されたとの説を立てており、「伝習録」の解説を否定している。

「伝習録」には、交會法についての記述もあり、「近山、森林、堂塔など、目当ての方位角を測った測点から図紙上で分度矩を用いてその方位角の方向に白徑を引き、同様に同じ目当ての方位角を測った別の測点から白徑を引くとその交点がその目当ての位置である」としている。また、多数の測点からひとつの目当ての方位角を測り、その交点の一部が多数の集中する点と異なる場合は、それらの測点の間の距離の測り方に誤りがあり、目当ての位置から逆方向に方位線を引き直して測点の位置を修正する」と述べており、「但し、この方法は、逆方位が確実な場合に限り」とも述べている。

これは、山頂、堂塔などの目標に対する交会法による方位角の測量結果は、導線法による測点の位置の補正には、限られた場合に使われ、交会法は、一般的には山頂や堂塔の位置を示すために行われたことを示している。また、近山、森林、堂塔に対する交会法について述べているのであり、中図・小図に描かれている遠山に対する交会法については述べられていない。

作製された下図には、「紙には伸縮があるので東西南北推歩の数値を記す」とされ、八線表を用いて計算された測量開始点と終了点間の東西・南北成分の図上距離を記入している。そして、下図を接合して数日間の測量成果を図化した「寄絵図」(寄図)を作製することについて解説している。それによると、「寄図は幅3尺、長さ6尺程度の大きさで、縦の白径を間隔を大きく開けて引き、それを東西または南北の基準線として接合する下図の東西南北直径(長さすなわち測量開始点と終了点間の東西・南北成分距離推歩の数値)を寄図の図紙に写す(プロットする)。写した針穴に、下図の測量開始点と終了点の針穴を合わせ、その間の測点を針で突き刺して(針突法)寄図に写す。写された針穴が検知されやすいように墨線で測点を繋ぐ」とのことである。これは要するに、複数の下図を接合して寄図を作製するときには、下図の東西南北方向を寄図の用紙上で整置し、測量開始点と終了点の針穴を下図と寄図の間で肉眼的に合わせ下図を繋いでいくと解釈される。

寄図には、東西南北直径(寄図内の測量開始点と終了点間の長さ、すなわち下図の測量開始点と終了点間の東西・南北成分距離推歩の数値の総和)を記入し、寄図に交会法による「遠山の見通しを引

き出すべし」と方位線を引くことが述べられている。そして、「完成した寄図の測点を馨水美濃紙に針突法により写し、針穴(測点)を朱線で結び、「山川、田畑、森林、屋宇等を形容する(描く)」としている。さらに、「上絵図(清絵図)には、裏打ちの唐紙か生漉き間に合い紙か保存の良い紙」を使うべきとしている。

以上のように、「伝習録」には、図化過程の大筋が述べられているに過ぎないが、これにより、通常一日の単位で下図が作製され、そこでは、測量開始点と終了点の下図内での座標値が測量データから計算されてプロットされることが分かる。その他の測点は、分度矩と厘尺を用いて図解的にプロットされ、下図は、東西南北を整置して座標値を持った測点の針穴を手がかりに寄図用紙の上に移写・接合されて寄図が作成される。寄図はさらに馨水美濃紙に針突法で移写され、これを基に清絵図が作成されるのであろう。どうさ馨水美濃紙と上絵図用紙は区別されており、下図↓寄図↓馨水美濃紙の図↓清絵図の手順で伊能図が作製されたことを「伝習録」は語っていると考えられる。

(2) 大谷亮吉著『伊能忠敬』における伊能図図化過程の解説

大谷(1917)は、「伝習録」に基づいて伊能図図化過程を次のようにその概略を解説している。まず測量結果を小地域(一日の測量地域であることが多い)について展開して下図を作製し、「下図を接合してほぼ大図1図幅の範囲の寄図とし、どうさ馨水美濃紙に突き写して方位線、測線を朱引きし、山川、田畑、集落などを描き入れて大図の原稿図を作製する。この過程で、天測結果との齟

齟を解消するための補正が行われる。原稿図は突手本と称し、突手本の下に複数枚の和紙を重ね、突手本の内容を和紙に複写する。この間の測量結果である測点の展開、突手本の作製・複写は、すべて針穴を通すこと(針突法)により行われる。

下図の作製について、大谷(1917)によれば25*、まず下図用紙の上に東西または南北に白径を引いて基準線を設定する。その上で、導線法による1日単位の測量結果から測線の正弦・余弦即ち東西・南北成分距離を算出して1日の測量開始点、測量終了点の座標値を求め、所定の縮尺により針穴を通してその座標値を下図用紙上に展開する。その間の測点は、分度矩と厘尺を用いて図解的に下図用紙の上に展開し、最終点で閉合すればよしとし、閉合しない場合には、計算あるいは図化に問題ありとして近山・樹木・堂塔などを目標とした交会法測量の結果により誤差・過誤に補正・修正を加える。最後に補正した測量終了点を以て測量開始点・終了点間の東西・南北成分距離を図上計測して改定し、下図に記述する。

寄図については、大谷(1917)は、「伝習録」における渡辺愼の解説を紹介し、伊能家に残る寄図などから、下図の測量開始点・終了点間の補正済み東西・南北成分距離を測って寄図の図紙上に次々と展開し、その間の測点は下図から針突法により突き写したとしている26*。そして、寄図には、横切測量や交会法による補正を加えた27*のち、図中の端点間の東西・南北成分距離を東西線及び南北線に沿って測り、その寸法を図中に記載するとしている。その後、地方図作成の過程で多少の補訂を加え、大図の定稿すなわち突手本と称する原稿図として針突法により浄写用紙に突き写すと述

べている。

(3) 保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』における広瀬秀雄氏の見解

広瀬(1974)は、伊能忠敬の測量法とその成果を図化する過程の説明の中で、「長さ1〜2里の小区間(通常1日の測量の一端Aから他端Bの距離の東西・南北成分を縮尺に合わせて求めこれを地図上の直交座標値とした」と述べている。さらに、「AからB, C, D…の諸点(町、村)を通過し、M点まで測量したとすると、起点Aに対する終点Mまでの直交座標値を次々図示して作り上げたもの」と言っている。「A, B, C, D…の諸点(町、村)」とあるのは、毎日の測量開始点と終了点を指しているものと考えられる。A, B, C, D…の諸点の間には、導線法による複数の測点があるが、それらの点がどのように図化されたかについての記述はない。このように、広瀬(1974)は、伊能図の最初の図化過程について、基本的に「伝習録」と大谷(1917)に解説されている過程と同じことを述べている。

(4) 野上道男氏による伊能図図化過程に関する

新たな見解

以上の見解に対し、最近、野上道男氏の一連の研究により、「伝習録」や大谷(1917)に述べられている図化手法が否定され、伊能図図化過程に関する別の角度からの見解が発表されている。

野上(2021c)は、伊能忠敬の測量成果の図化においては、幾何的方法は採られず、代数的方法が採られたと述べている。野上(2021c)が言う幾何的方法とは、導線法によって得られた方位角と長さを分度矩と厘尺を用いて次々に図解的に測点として図紙上に展開する手法であり、代数

的方法とは、導線の方位角と距離から導線の東西・南北成分距離を計算し、それを座標値として測点の位置を図紙上にプロットする手法である。前述したように、「伝習録」と大谷(1917)においても、通常一日単位の測量開始点・終了点の座標値は、計算されて下図にプロットされるが、その間の測点は図解的にその後展開されると解説されている。すなわちすべての測点が計算により求められた座標値により図化されるとは言っていない。それは、広瀬(1974)も同様である^{28*}。その点において野上(2021c)の説は、定説となっていた大谷(1917)以来の考え方とは異なっている。

野上(2021c)は、その根拠を「伝習録」において下図作製前に導線の東西・南北距離を計算すると述べていること、計算を効率的に行うための「地面経緯表」の存在、「諸国測量地図北極高度并東西度」などに計算により求められた星測点間などの東西・南北距離が記載されていることに求めている。そして、大図から中図への縮図についても、大図に描かれた測点から主要な測点のみをうろ抜き、それぞれの測点の座標値を6で除することにより、代数的方法で行ったとしている。

(5) 図化過程における測点の位置補正

大谷(1917)以来の定説として、伊能忠敬の測量においては、交会法、横切測量により誤差が補正され、それにより伊能測量の精度の向上が図られ、高精度の日本図が作成されたと漠然と言われてきた。前述したように、大谷(1917)は、横切測量については測点位置誤差の補正に用いられたとしており、保柳(1974d)^{29*}も、横切測量については、伊能独特の手法であるとしている。

しかし、大谷(1917)は、近山、堂塔などを目当てとする場合以外は、交会法による測点位置誤差の補正については否定的であり、星測による緯度測定により導線法による測量結果が補正されたとしている。保柳(1974d)^{30*}も同様に述べている。

これに対し、野上(2019a, b)は、いわゆる「模写本」であるアメリカ大図の測点について画像ピクセルの読み取りによる座標値から求めた緯度と地理院地図上で読定したその測点の緯度との差の分布から、必ずしも横切測量による測線が優先されているわけではなく、横切測線による測線の補正と言う原則は見られないとし、大谷(1917)以来の通説を否定している。また、同様の分析から、山島の方位測量による測線の補正も見られず、いわゆる交会法による山島の方位測量は、山島の位置を求めるためのものだったとしている。そして、星測による緯度の決定が伊能測量の基本であり、緯度観測値により導線法による測量結果が補正されたことを指摘し、「伊能図は天文測量で枠組みが作られ、導線測量は細部測量に相当する」と述べている(野上2019b)。

(6) 縮図法と中図・小図

伊能図には、大図、中図及び小図があり、その縮尺はそれぞれ36000分1、216000分1、432000分1である^{31*}。大図縮尺で図化された地図から中図縮尺に縮小する手法について、大谷(1917)は、縮図尺を用いて図解的に縮小したとしており、縮小された地図を中図縮尺の「地方図」及び小図縮尺の「綜合輿地図」と称している。大谷(1917)によれば、「地方図」^{32*}は「寄図」を縮図尺により6分1に縮小して集合(接合)した

ものであり、①「寄図」上の各天測点間の東西・南北成分距離を測定し、これにより計算により求めた各天測点間の東西・南北成分図上距離を補正し、総南北分(江戸深川黒江町からの南北図上距離)と量地的緯度も補正し、これを天測による緯度と対照して両者の差異を求め、各測点についてその一覧表^{33*}を作成し、測地的に定められた「寄図」上の測点の南北位置の補正に使用したと述べている。さらに、②各次測量期間における閉合する測線の東西・南北成分の閉合誤差の量を検出し、③216000分1に縮小した「寄図」を集合するに当たり、南北位置は天体観測に基づいて測点の位置を調整する一方、近距離の測点相互の位置関係については、天測により得た値は、測地的に得た値に遙かに精度が及ばないとし、前述の一覧表によって測地的緯度と天測的緯度の差の状況を勘案し、数力所の天測点を含む適宜の地域に分けて横切測量の結果も加え、測点を天測結果に調和するように移動した^{34*}。東西方向については、④閉塞(閉合)測線と横切測線の東西成分距離の累計が0となるよう図の北部において測線を図の中央部に向けて寄せることにより、見かけ上の齟齬を解消した、としている。さらに、⑤投影法に関する矛盾点について述べ、⑥補正が終わった「地方図」は中図の原図となり、針突法により突き移した上に各種情報を加え、方位線、経緯線を描出して中図が完成すると言っている。そして中図は「寄図」に補正を加えて大図の定稿を成すものであると述べている^{35*}。

「綜合輿地図」^{36*}は、大谷(1917)によれば、各次測量に対応した「地方図」を綜合した地図であり、第四次測量までの成果を纏めた「本邦東半部地

図」と全国測量終了後の「日本輿地全図」を「綜合輿地図」であるとしている。投影法の誤謬から是等の成果には、大きな齟齬があるとして、経度の誤差を強く非難している。大谷(1917)は「綜合輿地図」の縮尺について言及していないが、小図に当たるものと考えられる^{37*}。

以上のように、大谷(1917)は、「寄図」を6分1に縮図尺を用いて図解的に縮図し、それを接合して中図を作製し、その過程で天測点間の天測による緯度差と測地的に求めた緯度差を勘案して天測点の南北位置を調整し、横切測量や測点の閉合差も考慮に入れて測線を編集したと考えているように読める^{38*}。「下図」において最初に計算により求められた測量端点間の東西・南北成分距離は、その後の補正作業により失われたこととなる。従って、大谷(1917)によれば「下図」の補正作業以降は、すべて図解的に図化されたと解される。

これに対し、野上(2021c)は、大図縮尺から中図・小図縮尺への縮図は、前述したように測点の大図縮尺での座標値を6で除することにより、代数的方法で行われたとしている。さらに、野上(2022c)において、いくつかの大図に書き込まれた測点間の寸法や、東京大学綜合図書館所蔵の「測地原図」の中の中図縮尺で描かれた図の中に書き込まれている測点間の東西・南北距離の図上寸法から、是等の寸法が図上で計測されたものではなく、代数的方法で求められたものであり、「測地原図」は中図の下図ではなく、「控図」ではないかとしている。大図から中図への縮図法については、星測点の座標値を用いて縮図尺で縮図する原理と同様の方法で星測点間の節点(測点)を縮図し、そのようにして縮図した導線を星測点の座標値を媒

介として次々に繋いでいくことにより大図から中図への縮図が行われたと考えているようである。

5. 伊能図の作成手法に関する再検討

大谷(1917)以後、伊能図の図化・編集過程についての分析は、保柳編著(1974)などを除き、管見の範囲では見ることができず、大谷(1917)を簡略化した説明が流布しているのが現状であった。大谷(1917)の所説は、伊能図作製手法についての定説となり、保柳編著(1974)などにおいても「伝習録」が紹介され、保柳(1974b)による解説が行われているが、大谷(1917)の所説に対する異論は述べられていない。これまでに、伊能図に関する書誌学的研究は数多く行われ、新たな伊能図が見いだされるとともに、伊能図の図録もいくつか出版され、現在残存する伊能図の来歴等については知見が大きく増したと言いうことができる。しかし、伊能図の作製手法については、経度問題に関する広瀬(1974)による画期的研究が見られる程度で、伊能忠敬の測量手法と伊能図図化手法については、大谷(1917)の解説が踏襲されてきた。

このような経緯の中で、野上道男氏の伊能図作製過程に関する一連の研究成果は、大谷(1917)以来の通説に見直しを迫るものであると言える。そもそも大谷亮吉は、渡辺愼による「伝習録」と伊能忠敬が残した地図及び断片的記録により伊能図の図化・編集過程を明らかにしようとしたものであり、「地方図」・「綜合輿地図」は、大谷(1917)の造語であり、その論攷の過程には、推論が多く含まれている。また、大谷亮吉は地球物理学者であり、地図の図化・編集に係る実務的知

識には乏しかったのではないかと考えられる。たとえば、前述したように、大谷（1917）は、

「大図は中図縮尺の寄図を集令・補訂した地方図を大図縮尺に改めて適宜の大きさの切図としたもの」^{39*}と述べているが、地図の精度保持の観点から見て小縮尺から大縮尺へ拡大することはあり得ないことであり、伊能忠敬もそのことは十分認識していたものと思われる。大谷（1917）は、「下図」、「寄図」、「地方図」の段階でそれぞれ補正が行われたと考えており、その補正の成果を大図に戻って反映すべきと考えたところから、このような結論に至ったものと考えられ、その論攷の過程は推論に過ぎない。このような大谷（1917）の伊能図の図化・編集過程に関する解説がこれまでは金科玉条の如くに述べられてきたことに対する根本的反省を野上の一連の研究は迫っている。

伊能図の図化・編集過程に関して言えば、野上道男氏の論説の要点は、「①測量データの図化は代数的手法により行われた。すなわち測点の座標値（東西・南北成分図上距離）が展開された。②測量データの補正は、基本的に天文測量による緯度値を基準とし、同様に代数的に行われた。③中図・小図の図化は、測点の座標値を6分1、12分1にして展開して図化された。」である。「伝習録」に述べられているように、導線法による測量データは、導線の東西・南北成分距離が計算され、座標値が意識されている。伊能忠敬が天文測量を可能な限り行い、緯度値を重視していたことは明らかである。一方、縮図尺の存在は、中図・小図の作製は図解的に行われたことを示唆しており、野上説を全面的に首肯するものではないが、野上説を十分検討していくことが今後の伊能図の図化・編集過

程に関する研究の出発点となるであろう。

参考文献

- 秋岡武次郎（1967）伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するもの若干 地学雑誌 76（6）、39-47
大谷亮吉（1917）『伊能忠敬』 岩波書店
鈴木純子・渡辺一郎編（1999）『最終上呈版 伊能図集成』 柏書房
野上道男（2020b）伊能忠敬の地図作製における「緯度差1度28.2里」問題 地学雑誌 129（2）、285-301
野上道男（2019a）伊能大図における星測と横切測量・方位測量による導線位置の補正―第4次測量までの例 地図 57（3）、1-13
野上道男（2019b）伊能大図の計測から見た導線位置の精度と補正―第6・7・8次測量の例― 地図、57（4）、1-12
野上道男（2020a）伊能忠敬による月蝕観測を用いた経度測定とその精度 地学雑誌 129（2）、263-274
野上道男（2020b）伊能忠敬の地図作製における「緯度差1度28.2里」問題 地学雑誌 129（2）、285-301
野上道男（2021a）伊能中図における星測点の座標値と緯度経度 地図 59（1）、1-10
野上道男（2021b）最終版伊能中図における伊能忠敬の測量成果の寄与 地図 59（2）、17-31
野上道男（2021c）伊能忠敬の測量成果の地図化法 地理学評論 94（6）、427-449
野上道男（2021d）伊能大図における第4次・第5次測量の導線接合部における閉合差 地図 59（3）、1-13
野上道男（2022）伊能図編集における緯線の接合と縮図の方法 地図 60（4）、1-15
羽田野正隆（1998）伊能図の評価と今後の課題 東京地学協会編『伊能図に学ぶ』、164-175 朝倉書店
菱山剛秀（2017）地図投影法から見る伊能図 地図情報 37（3）、8-11
菱山剛秀（2020）伊能図の投影に関する疑問 地学雑誌 129（2）、303-314
平井松午・島津美子編（2022）『稿本・大名家本』伊能図研究図録』 創元社
平井松午編（2022）『伊能忠敬の地図作製 伊能図―シーボルト日本図を検証する―』古今書院
平井松午（2022）伊能図の地図仕立て 平井松午編『伊能忠敬の地図作製』 77-102
広瀬秀雄（1974）伊能忠敬の全国素量と経度問題 保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』、139-160 古今書院
藤岡健夫（1996）伊能忠敬の測量法 伊能忠敬研究『伊能図探求』継承第9号、1-3
藤原秀之（2007）早稲田大学図書館所蔵伊能図（大図）について 早稲田大学図書館紀要（54） 1-37
星埜由尚（2020）伊能忠敬全国測量の諸問題 地学雑誌 129（2）、227-240
星埜由尚（2021）伊能図の科学技術的側面と分類体系に関する先学の業績と今後の課題 地図 59（5）、1-15
保柳睦美編著（1974a）『伊能忠敬の科学的業績』 古今書院
保柳睦美（1974b）伊能忠敬による緯度1°の

距離測定と新投影法の考案・保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』113-138

保柳睦美(1974c) 渋川景佑述、撰・伊能翁言行録(仮書名)・保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』305-314

保柳睦美(1974d) 渡邊慎述、編 伊能東河先生流量地傳習録・保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』333-361

吉田正人(2003) 伊能図における経線のズレについて(一)・伊能忠敬研究32, 34-43

吉田正人(2008) 伊能図における経線のズレについて(2) グーグルアースを用いた伊能図の地球への投影・伊能忠敬研究51, 61-65

渡辺一郎監修(2006)『伊能大図総覧』河出書房新社

渡辺一郎監修(2013)『伊能図大全』河出書房新社

注

1* 「大日本沿海輿地全図」とは、幕府に提出された大図・中図・小図の一組の地図の名称であり、その他の伊能測量隊作成図、写図などを含めて「伊能図」と総称される。

2* 「大日本沿海輿地全図」を「正本」とし、その控えとして「副本」と称されるが、地図作製過程の上では、「正本」と「副本」とは区別のないものと考えられる。星埜(2021)を参照。

3* 渡辺(2000)は、作製上の位置づけから伊能図を「正本」、「副本」、「稿本」、「写本」及び「模写本」と分類している。これは、実用的な分類であるが、難点もあり、星埜(2021)は、全国測量の成果が図化された「完成

図」と測量途次においてそれまでの測量成果を元に作製された「中間図」に大別している。「完成図」は、「伊能測量隊作製図」と「複製図」とに、「中間図」には、「伊能測量隊作製図」に加えてそのための「資料図」がある。「伊能測量隊作製図」は、「幕府上呈図」と「大名等進呈図」に区分される。「複写図」は、「模写図」と「加工図」に分類される。「資料図」は、「下図」、「寄図」、「突手本」、「未完成図」を含む。

平井(2022)は、伊能図の分類に当たっては、記載内容の時期による分類、作成段階による分類、提出先・作成目的による分類、作成手法による分類及び縮尺による分類の基準の検討が必要であると述べている。

4* 東京地学協会は、明治12年に榎本武揚等により北白川宮能久親王を会長として設立された地理学・地質学など地学に関する学術団体である。現在は公益社団法人東京地学協会。

5* 高木崇世芝編著(2015)『伊能忠敬関係文献総目録(明治13年〜平成26年)』を参照。

6* 明治22(1889)年に伊能忠敬への贈位を記念して東京芝公園に東京地学協会が建立した「伊能忠敬先生測地遺功表」は、戦争中の供出により失われていた。

7* その中で、特に広瀬(1974)は、伊能図の投影法についての大谷(1917)の結論について批判的に論じ、その誤りを指摘している。保柳(1974b)も同様に述べている。

8* 秋岡武次郎(1967) 伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するもの若干 地学雑誌76-6など

9* 保柳編著(1974)に収載されている論文がいくつか存在する。

10* 渋川景佑述、撰『伊能翁言行録』(保柳1974c) 及び『星学手簡』(高橋至時と間重富の間で交わされた書状を中心に集成され上中下の3巻から成る)に記されている。

11* 渋川景佑述、撰『伊能翁言行録』に伊能忠敬が求めた緯度1度28'2里と「ラランデ暦書」の数値の「密合」と高橋至時がそれを認めたことが記されている。(保柳1974c)

12* 保柳(1974b)も欧州の距離の単位と日本の尺度との換算がどの程度正しく考察されていたか、疑問を呈している(保柳, 1974b) 123-124

13* 保柳(1974b)113-138

14* 各次の測量時ごとに度法を改定したとすると、各次の測量成果を接合するのではなく最終的に求めた度法に拠って地図を作り直さねばならないこととなる。

15* 「伝習録」は、保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』に掲載され、保柳(1974d)の解説がある。

16* 大谷(1917)『伊能忠敬』256-258

17* 大谷(1917)『伊能忠敬』469-470

18* 大谷(1917)『伊能忠敬』345。一方、

全国測量初期の頃は、導線法による測量の精度が高くなく、天文測量の結果を信頼したが、全国測量が進むに従い、量地の精度が高まり、10里、20里の短距離では、天体測量による結果は、地上測量による結果に勝ることはなく、50里、100里の長距離に至って初めて量地誤差の蓄積を防止できる、とも述べている。382

19* 大谷（1917）『伊能忠敬』346
20* 大谷（1917）第二章（四）量地野帳の整理及計算に詳しく述べられている。

21* 保柳（1974d）345

22* 野上（2019a, b）は、「星測」と表現しているが、大谷（1917）では、「星測」、「天測」、「天体観測」などと表現している。

23* 従来の伊能忠敬の測量法についての解説では、星測により緯度測定が行われたことは述べられているが、いかに地図作製の重要な基準となっていたかという点は看過されていた。

24* 緯線間隔は、回転楕円体であれば緯度によりその長さは異なるが、伊能図では、求めた度法28'2里を適用して緯度によらず同じ長さとなっている。経線は、高緯度になるに従って経線間隔が狭くなっている。

25* 大谷（1917）第二篇第三章（三）小區域に對する下圖の製作

26* 大谷（1917）468、469には、「この用紙上に小區域図を集むるには紙上便宜の一点を始点Aと定めこの点より東西線及南北線に沿いて第一小區域図の改訂東西分 x' 及南北分 y' を測りてB点を定め次にB点より第二小區域図に於ける改訂東西分及南北分を測りてC点を定め順次に斯くの如くにしてこの寄図に集合すべき最後の小區域図の終点たるF点に及び、それより是等各小區域図の端点間を連続せる測線及其附近に存在せる測定地物の位置を改訂小區域図より夫々針尖を以て突き写したるものなり。」と記述されている。小區域図の端点間の距離は、下図展開時には、東西・南北成分距離が計算により求められていたが、寄図段階では、補正に

より図上で測った距離が展開されたことになる。小區域図とは、1枚の下図に相当すると見なされる。

27* 大谷（1917）は、遠距離の山岳は測量誤差の補正に用いられていないが、近距離の地物は測量誤差の補正、下図の位置関係の調整に用いられたとしている。横切測線については、測量誤差の補正は状況により恣意的に行われたと述べている。

28* 広瀬（1974）は図解的に図化したと言っているわけではない。

29* 保柳編著（1974）345、346

30* 保柳（1974d）346、351、352

31* そのほか、特別小図（縮尺864000分1）、江戸府内図（縮尺6000分1）がある。また、第一次測量による蝦夷地の大図、小図の縮尺は度法が異なるため小さい。

32* 大谷（1917）472、477

33* この一覧表については、例示などの言及がない。

34* 大谷（1917）474の割注には、天測による緯度値は、補正に基づき30秒以下の端数を適宜切り上げまたは切り下げた、と解説されている。

35* 大谷（1917）476割注。さらに、556において、寄図から作製した地方図（中図）から36000分1の縮尺に拡大し、適宜の大きさの切図として大図が作製されたと述べている。

36* 大谷（1917）478、484

37* 補正の終わった「地方図」は小図作製にも用い、小図は、中図を縮図尺で2分1に縮小して、地

名などを多少省略したものであると言っている。

38* （大谷（1917）476、477割注）

大谷（1917）による「寄図」から「地方図」への図化過程の説明は、伊能家に残る地図、記録から判断されと言うが、非常に分かりにくく、疑問が多い。

39* 大谷（1917）556

測量次別参加隊員

河崎 倫代

※隊員の動向は『測量日記』で判明したものを記載。

忠敬は自らを「我等」「東河」と記す。触れ等は隠居名の「勘解由」を使用。

●第1次測量（奥州街道・蝦夷地）6人

忠敬（満55歳）

内弟子 門倉隼太 平山宗平 伊能秀蔵
下僕 吉助 長助（函館から帰る）

●第2次測量（相模・伊豆・本州東海岸）6人

忠敬（満56歳）

内弟子 平山郡蔵 平山宗平 伊能秀蔵
尾形慶助
下僕 嘉助

●第3次測量（出羽・越後）7人

忠敬（満57歳）

内弟子 平山郡蔵 伊能秀蔵 尾形慶助
大平雄助
下僕 久兵衛 兵助

●第4次測量（東海・北陸）8人

忠敬（満58歳）

内弟子 平山郡蔵 伊能秀蔵 尾形慶助
村津大兄 小野良助
下僕 伊能吉兵衛 久兵衛

●第5次測量（畿内・中国）15人で出発

忠敬（満60歳） 従者 半六・丈助（大坂で雇う）

高橋善助 従者 惣兵衛

天文方下役 坂部貞兵衛 従者 角二

市野金助 従者 三治

交替（文化2年8月29日、大坂から帰る）

下河辺政五郎 従者 栄治

（文化2年9月21日、大津宿で合流）

内弟子 平山郡蔵 伊能秀蔵 小坂寛平

永沢藤次郎（文化3年7月5日、隠岐渡

島直後から瘧疾にかかり、9月9日、宮

津城下から国元へ帰る）

門谷清次郎（文化2年8月29日、大坂か

ら帰る）

門倉隼太・尾形慶助（文化3年3月12日

未明、合流）

供侍 佐藤伊兵衛（初め下僕、のち供侍。匱絵

図を描く）

棹取り 利助 吉平

※文化3年1月20日『伊能忠敬測量日記・千葉縣史料』

では19日、岡山城下から平松紹右衛門・窪田浅五郎・

弥右衛門の3人が随行。平松と窪田の2人は2月20

日まで参加したが、弥右衛門は一度も登場せず、不明。

平松は2月15日まで「丈右衛門」と誤記。

※文化3年8月28日に大坂で雇った下人丈助が病気の

ため解雇。文化3年9月8日、宮津城下から大坂へ帰

す。

●第6次測量（四国・大和路）16人

忠敬（満63歳） 従者 藤吉

天文方下役 坂部貞兵衛 従者 文吉

柴山伝左衛門 従者 兵助

下河辺政五郎 従者 惣助

青木勝次郎 従者 文蔵

内弟子 伊能秀蔵（文化5年11月26日、病気のた

め大坂から帰る）

植田文助 久保木佐右衛門

供侍 神保庄作（文化5年11月26日、伊能秀蔵

に同行して大坂から帰ったようだ）

棹取り 佐助 善八

●第7次測量（九州第1次）18人

忠敬（満64歳） 供侍 成田豊作（津久見市鳩浦で

長暇を遣わす）

黒田藤吉（熊本で病死）

従者 清七

天文方下役 坂部貞兵衛 供侍 松井沢次

下河辺政五郎 従者 助八

青木勝次郎 従者 兵助

永井甚左衛門 従者 又兵衛

内弟子 植田文助 梁田栄蔵 箱田良助

棹取り 平助 長蔵

●第8次測量（九州第2次）19人

忠敬（満66歳） 供侍 加藤嘉平次 宮野善蔵

天文方下役 坂部貞兵衛 供侍 笠原三之助

永井甚左衛門 従者 清助

今泉又兵衛 従者 友吉

門谷清次郎 従者 新八

尾形慶助 箱田良助 保木敬蔵

内弟子 尾形慶助 箱田良助 保木敬蔵

尾形慶助 箱田良助 保木敬蔵

尾形慶助 箱田良助 保木敬蔵

尾形慶助 箱田良助 保木敬蔵

尾形慶助 箱田良助 保木敬蔵

尾形慶助 箱田良助 保木敬蔵

尾形慶助 箱田良助 保木敬蔵

尾形慶助 箱田良助 保木敬蔵

長持宰領 久保木佐右衛門
棹取り 久保木佐助（左治右衛門） 大山甚七

●第9次測量（伊豆七島） 11人

忠敬（満70歳） 老齢のため不参加
天文方下役 永井甚左衛門 従者 新助
坂部八百次 従者 万吉
門谷清次郎 従者 源助

内弟子 箱田良助・保木敬藏 僕 幸助
長持宰領 田中吉兵衛
棹取り 多田要吉

●第10次測量（江戸府内1次） 11人

忠敬（満70歳） 供侍
天文方下役 永井甚左衛門 従者
下河辺政五郎 従者

内弟子 箱田良助 保木敬藏
棹取り 2名

●第10次測量（江戸府内2次） 正確な人数は不明
忠敬（満70歳） 時々、孫の忠誨を伴って参加
天文方下役 下河辺政五郎
今泉又兵衛
永井甚左衛門
坂部八百次
門谷清次郎
渡辺啓次郎（尾形慶助）
不明

◆参加者の経歴◆

高橋善助 第5次に副隊長格で参加。高橋至時の次男で、兄の景保とともに暦算、和・漢・蘭の諸学を学ぶ。文化5年（1808）に天文方渋川正陽の養子になる。「寛政暦書」などを著す。

内弟子

門倉隼太 高橋至時の従者。至時の命により第1次測量に従う。第5次測量に際し、手不足の増援要員として本隊に追いつき、文化3年（1806）2月まで測量に従事した。

平山宗平 第1・2次に参加。忠敬が伊能家に婿入りしたとき仮親となった多古の平山藤右衛門の孫。郡蔵の弟。平山家は忠敬の妻ミチの母親の実家。

伊能秀藏 第1〜6次に参加。忠敬の子。14歳から測量に参加。行いが悪いとの理由で、文化12年（1815）に父忠敬に勘当された。

平山郡蔵 第2〜5次に参加。平山宗平の兄。幼年から伊能家に寄宿し忠敬に算術を学ぶ。第5次で忠敬が病氣中に不当な行為があったとして帰府後に破門されたが、忠敬の死の直前に「平野」という仮名で地図作製に従事することが許された。

尾形慶助 第2・3・4・8・10次に参加（10次は天文方下役として参加）。香取の神官尾形平馬の次男というが、実は会田安明の実子。のちに御家人渡辺氏を継いで渡辺慎（啓次郎）となる。「伊能東河先生流量地伝習録」を著し、忠敬の測量術を世に伝える。

大平雄助 第3次に参加。履歴など不明。

村津大兄 第4次に参加。享和元年（1801）

8月16日、原釜村（相馬市）の宿所へ「相馬郡代村津貞兵衛親子来て測器を見る」とあり、大兄とその父貞兵衛のことと思われる。大兄は後に相馬藩の郡代となった。

※忠敬の「糸魚川一件巨細書」に、「相馬宿ノ村津大兄・板鼻宿ノ小野良助兩人ハ、実妹（真面目で正直）ニテ、威張ることもなく「身元相応ニ仕候間、各用意金銀モ持参仕候」とある。村津と小野は学問のために志願して自費で参加したらしい。

小野良助 第4次に参加。上野国板鼻宿の人。和算に関する著作がある。その序文に日官測量属士とあるので、暦局に勤務していたのではないかとされる。享和2年（1802）10月16日、高崎城下の宿所へ「板鼻捨五郎（幼名）来る」とある。第4次の帰路、本隊から離れて板鼻へ帰った。その後も度々、測量先や江戸の忠敬宅を訪ねている。

永沢藤次郎 第5次に参加。山武郡松尾町借毛の秋葉五郎太夫常房の次男。佐原の永沢治郎右衛門征俊の娘と結婚して永沢姓に。第5次に参加したが、隠岐渡島直後から瘧疾にかかり、宮津城下から帰る。

小坂寛平 第5次に参加。履歴など不明。

植田文助 第6・7次に参加。履歴など不明。

久保木佐右衛門 第6・8次に参加。下総国津宮（香取市）の人。第6次では荷物の宰領、測器の運搬などを担当。第8次には長持ち宰領として参加。測量業務は行っていない。

梁田栄藏 第7次に参加。履歴など不明。

箱田良助 第7〜10次に参加。備後国箱田村の庄屋細川園右衛門の次男。17歳の時江戸に出て忠

敬の弟子となった。第7次以降、測量及び地図作成に従事。文政5年（1822）ごろ榎本氏を継いだ。榎本武揚の実父。

保木敬蔵 第8・10次に参加。忠敬の弟子として、忠敬亡き後も地図作成に携わった。文政5年（1822）、足立信頭に入門。

天文方下役

坂部貞兵衛 第5・8次に参加。御先手能勢市十郎組同心。和算を学んで暦局に出仕。高橋至時の手附下役となる。忠敬の信頼が厚く副隊長格だったが、文化10年（1813）7月15日福江島で病死し同地に葬られた。

市野金助 第5次に参加。御先手三宅助之丞組同心。和算を会田安明に学び、暦局に出仕。第5次測量に参加したが、途中でトラブルがあつて大坂から帰府した。

下河辺政五郎 第5・7・10次に参加。西丸御書院番小笠原若狭守組同心。シーボルト事件に連座して中追放となる。

柴山伝左衛門 第6次に参加。御先手高林弥十郎組同心。第6次の四国測量にだけ参加し、隊員としてただ一人「旅中日記」を残した。

青木勝次郎 第6・7次に参加。御先手能勢市十郎組同心。絵画を能くし測線周辺の沿道地の地勢の描写を担当。伊能忠敬記念館所蔵の忠敬の肖像を描いたとされるが、久保木清淵の作との説もある。最終版製作の際には、沿線の光景等の描写を一手に担当したのではないか。忠敬は「江戸日記」に青木の出勤・欠勤などの動向を詳細に記している。

門谷清次郎 第5・8・9次に参加。幕府の御細

工所同心組頭門谷八郎右衛門の子。忠敬の内弟子となり、第5次に参加したが、市野金助とともに大坂から帰府。のちに天文方高橋景保の手附下役となり、第8・9次では天文方下役として参加。シーボルト事件に連座して江戸十里四方追放処分となる。

永井甚左衛門 第7・10次に参加。大御番小笠原備後守同心として暦局に出仕し、高橋景保の手附下役となる。文化10年（1813）に坂部貞兵衛が病死してからは、支隊の長として忠敬を補佐した。第9次の伊豆七島の測量では忠敬に代わって測量隊を指揮した。シーボルト事件に連座して天保元年（1830）江戸払いとなる。

今泉又兵衛 第8・10次に参加。幕府の同心で暦局に出仕し、高橋景保の手附下役となつて測量に参加。

坂部八百次 第9、10次に参加。坂部貞兵衛の子。父のあとを継いで暦局に出仕し測量に参加したが、文政3年（1820）に病死。

供侍

佐藤伊兵衛 第5次に参加。初めは下僕だったが、市野金助と門谷清次郎が江戸へ帰つてからは供侍となり、測量を手伝う。文化2年（1805）

閏8月18日の『測量日記』に「平山と伊兵衛は龜絵図を描く」とある。

神保庄作 第6次に参加。忠敬の兄である神保貞詮の子。四国からの帰途、大坂以降は名前が出なくなる。病気で大坂から帰府した伊能秀蔵と同行したのではないかと思われる。

加藤嘉平次 第8次に参加。履歴など不明。

宮野善蔵 第8次に参加。下総国伊能村に生まれ

る。江戸へ出て寺田氏の婿養子となる。第8次に参加して2年余りよく励んだが、文化11年（1814）3月5日に京都で下血、伏見より帰府。

田中吉兵衛 第9次に参加。長持宰領。

成田豊作 第7次に参加。不束な儀があり、文化7年（1810）3月2日、大分県津久見市鳩浦で長暇を遣わす。

内弟子

第1次測量から、忠敬に従つて測量や地図の作成を行った。身内の者も多い。第4次測量までは忠敬との個人契約、幕府が正式スポンサーとなつた第5次測量以降は、手当が支給された。

天文方下役

同心などから暦局に出向し、天文方高橋景保の手附下役を勤めた。幕臣として、第5次測量から参加している。

供侍

仕事の内容は記録に出てこないが、測量の補助もしたようだ。

従者・下僕

忠敬と、幕臣である天文方下役が自費で連れて行った個人的な世話人。各人の身のまわりを世話したほか、場合によっては測量の補助をした。

棹取り

間桿や間縄を使って、距離の測定を行った。

長持宰領

「長持」とは、衣類や日用品、書類などを入れて運搬・保存するための長方形の箱。それらと測量器具を含めた荷物全体の輸送管理を行う役目をしていた。

【参考文献】

『忠敬と伊能図』（1998）伊能忠敬研究会編集

江戸府内第一次測量の記録（九）

— 文化十二年二月十三日の『日記』 —

玉造 功

十三日の測量は図1に朱線で加筆したように、隅田川の東岸を北上し千住で奥州街道に繋ぐものである。前日の測量で豎川筋測量の起点となった本所の一之橋から測量を始め、隅田川東岸を北上し、綾瀬川を渡って西進して千住に向かった。図1を見ると、途中で両国橋と大川橋を渡り、十日の隅田川西側の奥州街道（日光街道）測量で残した印と印に測線を繋いでいることがわかる。この横切り測量によって隅田川東岸と西岸の測線の位置関係をより正確なものにした。

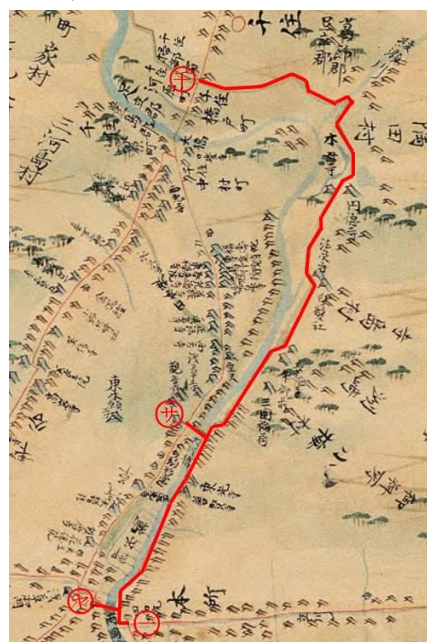


図1『大日本沿海輿地図』第90図に加筆

に建立された。その後も、鼠小僧次郎吉などの刑死者を含む無縁仏が葬られてきた。

その一方で両国橋東詰の広小路に隣接するという地の利もあって、図3のように回向院の境内を借りて各地の有名寺社が秘仏や秘宝の出開帳を行い参詣客で賑わった。『東都歳事記』にはその様子が次のように記されている。各地の寺院が仏像、神像、宝物等を東都に出し、寺院の境内で開帳する。日数は六十日までである。本所の回向院は都下に近く、諸方より参詣の便が良いので、こちらでの開帳はとりわけ繁昌し

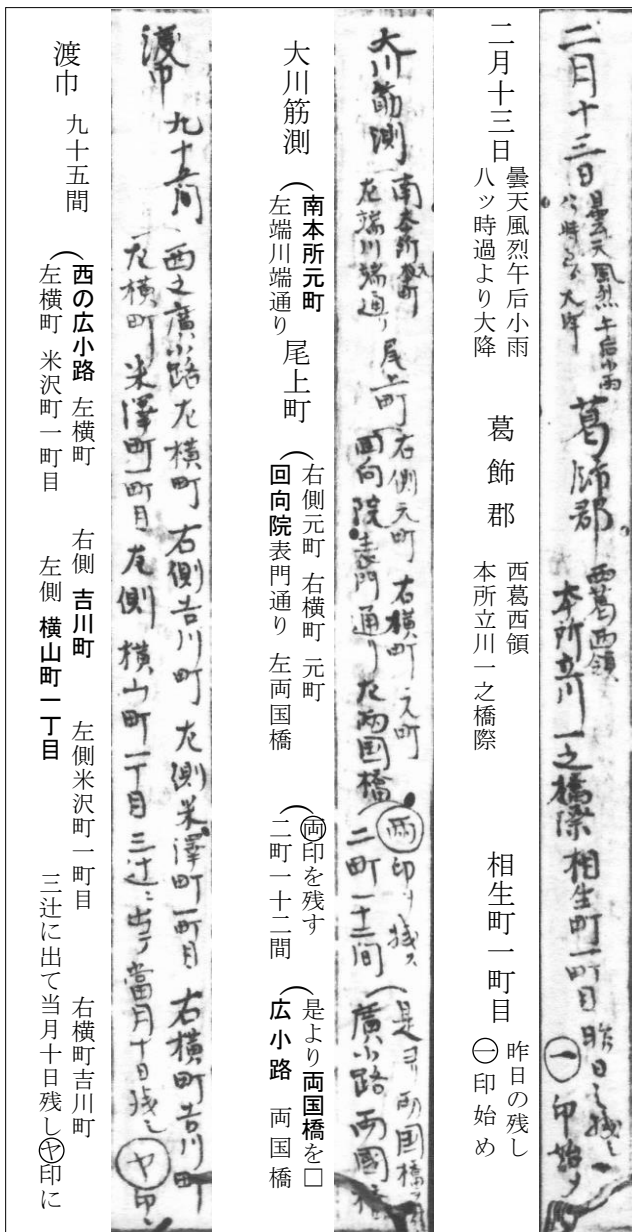


図2『江戸実測図(南)』に加筆



図3 回向院での出開帳 『江戸名所図会』

ている。出開帳の間、境内では奉納された金銀米穀が山をなし、種々の造り物やのぼり、提灯などの奉納もあり、遠近より参詣客が群集する山城の嵯峨清涼寺の釈迦如来、信州善光寺の弥陀如来、下総成田の不動尊が人気である。

十方庵敬順は『遊歴雜記』で、出開帳というのは見世物を見物するついでに参拝するのと同じで、出開帳の仏様が小言を言うであろうと歎きながらも、「見物ごとに浮かれ出て、開帳の本尊を拝し、一遍もその仏の御号を唱ふるこそ、順逆ふたつながら結縁」と納得させている。



図4 春朗（北斎）『江都两国橋夕涼花火之図』大英博物館

・両国橋：『御府内備考』は万治三（一六六〇）年に架けられたとする。武蔵国と下総国の本所地区を結ぶことから両国橋と呼ばれ、後に中川以西が武蔵国に組み入れられてからも両国橋と呼ばれ続けた。橋の両側の各町が連名で提出した『両国橋書上』によると、長さは田舎間で九十四間（約一七一M）、幅は同じく四間八寸、高欄は高さが三尺八寸、反りは橋の中央で一丈五寸であった。

・横山町一丁目：横山町三町目を誤記したもので、図2では三町目と訂正している。横山町には両国の花火で有名な鍵屋があり、鍵屋は両国橋の下流を、吉川町の玉屋は上流を受け持ったといわれる。図4にも花火が描かれ、隅田川には納涼船がひしめき、大型の屋形船の屋根の上では船頭が長い棹で船を操っている。



図5 いぐよ餅の商標 『江戸時代名物集』

・広小路：交通の要衝である両国橋にはその東詰と西詰に広小路が設けられた。広小路は火災の延焼防止の火除明地のため、恒久的な建物は禁じられていた。その一方で、多くの人が行き交う広小路は飲食店や芸能・見世物を営業する場所として絶好であった。両国橋は幕府が架橋、維持する御用橋であったが、防犯や防火を担う橋番所の維持や水防については近辺の町名主などが請け負っていた。請負業務を助成するため、幕府は広小路での露店営業を認め、請負人による地代徴集を許した。午前中は西広小路では青物市が東広小路では草花市がたち、午後は板張りの床店や大小様々のよしず張りの店が立ち並び、図4のように江戸屈指の盛り場であった。

・吉川町：両国橋の西広小路に面した繁華な地であった。吉川町では「餅を一やき、ざっと焼て餡を点す、風味美なり」（『続江戸砂子』）という幾世餅が名物で、落語の演目にもなっている。

繋ぐ 四町一十四間三尺

図6に拡大

又 本所元町 (両印始め 大川筋を行

駒留橋 渡巾三間



藤代町 右横町 右奈佐孫之助屋敷 右藤堂和泉守屋敷 右藤代町 右奈佐孫之助屋敷 右藤堂和泉守屋敷 右藤代町 右奈佐孫之助屋敷 右藤堂和泉守屋敷

横網町 右酒井信濃守 屋敷 右御米蔵

藤代町 右横町 右奈佐孫之助屋敷 右藤堂和泉守屋敷 左藤代町之限り 大川端 黒田豊前守下屋敷 右横町津輕越中守屋敷

横網町 右酒井信濃守 屋敷 右御米蔵

御舟入橋 中 右横町 七軒屋敷 (右松平伯耆守 屋敷)

御舟入橋 中 右横町 七軒屋敷 (右松平伯耆守 屋敷)

駒留石 右松浦織部屋敷 右椎木屋鋪 右松平右京亮中屋敷 右加納遠江守中

御舟入橋 中 右横町 七軒屋敷 (右松平伯耆守 屋敷)

駒留石 右松浦織部屋敷 右椎木屋鋪 右松平右京亮中屋敷 右加納遠江守中

屋鋪 右久須美六郎左衛門 御役 屋鋪 右黒田豊前守屋敷 右久須美六郎左衛門屋敷

石原町 右黒田金一郎屋鋪 右最上監物屋鋪 右黒田金一郎屋鋪 右最上監物屋鋪 右黒田金一郎屋鋪 右最上監物屋鋪

屋鋪 右久須美六郎左衛門 御役 屋鋪 右黒田豊前守屋敷 右久須美六郎左衛門屋敷

石原町 右黒田金一郎屋鋪 右最上監物屋鋪 右黒田金一郎屋鋪 右最上監物屋鋪 右黒田金一郎屋鋪 右最上監物屋鋪

御厩

河岸 渡場川向 御蔵土限 右中川飛彈守下屋敷 右松平大學頭下屋敷

外手町 北番場町 右横町 北番場町という 右普堅寺 右秋葉山

河岸 (渡場川向 御蔵之限り)

右中川飛彈守下屋敷 右松平大學頭下屋敷

外手町 北番場町

右横町 北番場町という 右普堅寺 右秋葉山

宿坊 右横町 右小谷忠之丞屋鋪 右東光寺 多田之薬師安置 善光寺之旅宿なり 右松平長門守屋敷 右横町表町という

中之郷竹町 右十間斗引込 会田算左衛門方 小休

(宿坊 右横町 右小谷忠之丞屋鋪 右東光寺 多田之薬師安置 善光寺之旅宿なり 右松平長門守屋敷 右横町表町という

中之郷竹町 右十間斗引込 会田算左衛門方 小休

測量隊は両国橋東詰に戻り、(両印)から測量を再スタートして隅田川東岸を北上した。図7を見ると大名や旗本の屋敷が続く前に藤代町、横網町、石原町、北番場町が点在している。

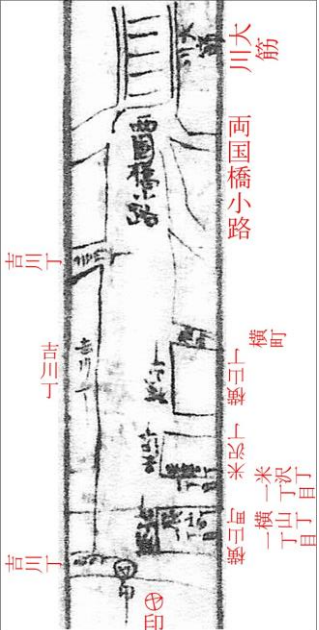


図6『日記』に加筆

・図6：日記本文と同様に横山町三丁を一丁目と誤記。米沢町一丁目目の位置もおかしい。

・御米蔵と御舟入橋：御舟入橋(御蔵橋)は隅田川から船で米を本所の御米蔵へ運ぶための入堀に架けられた橋。本所の御米蔵は対岸の浅草の御米蔵に附属し、十十八万石程度を収納。以前は材木や竹の蔵地であったことから、御米蔵となつてからも御竹蔵の俗称が使われた。

・駒留石：図7にも小さく「駒止石」とある。家光の頃に洪水の隅田川を馬で渡り、本所地区を視察した旗本が駒を留めたことと伝えられる。

・松浦織部屋敷と椎木屋鋪：肥前の平戸新田藩第七代松浦織部正良の上屋敷。図7で松浦半蔵としたのは文化十二(一八一五)年に代替わりしたため。『日記』では椎木屋鋪を別の屋敷のように記載しているが同じ屋敷の俗称である。

・この日の『日記』では武家屋敷や寺社の表記の誤記が多く、図7の記載が正しい。

・加納遠江守は伊勢八田藩第四代の加納大和守久慎を誤記。先代の遠江守久周と混同か。

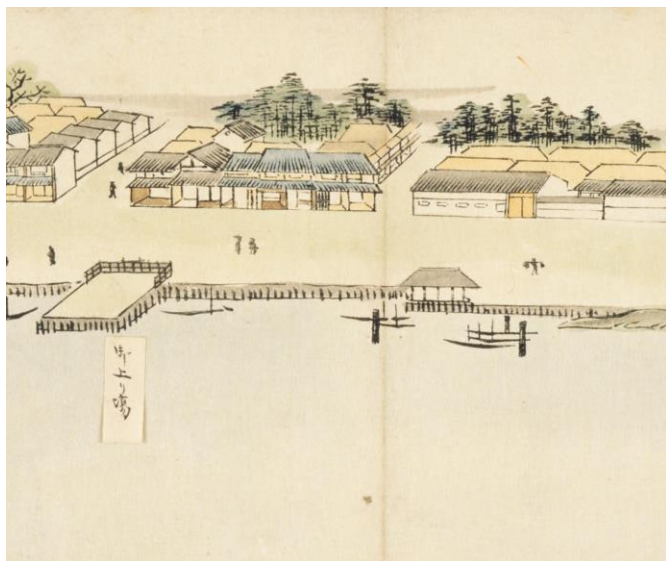


図8 鶴岡蘆水『東都隅田川兩岸一覽』

・御厩河岸…対岸の浅草側の河岸の名前であり本所側ではない。浅草御米蔵の北側に米輸送用の馬のための厩が置かれていたことに由来。浅草と本所を結ぶ御厩河岸の渡しがあった。
・会田算左衛門…会田算左衛門安明は和算家。忠敬の内弟子の尾形謙次郎（慶助）の実父であることから忠敬とも交流が深かった。会報68号の前田幸子会員の「伊能忠敬周辺の人① 会田算左衛門安明」が詳しい。その著書『天文簡要論』の寛政十一（一



黒田金一郎は三河挙母藩第四代の内藤金一郎政成を誤記。のちに山城守に叙任。
小谷忠之丞は旗本の男谷彦四郎思孝を誤記。男谷は勝海舟の伯父。
松平長門守は豊後府内藩第八代の松平左衛門尉近訓を誤記。



図7 『江戸実測図（南）』に加筆

ある町家が中之郷竹町で、右側の堀で囲まれた屋敷が豊後府内藩の中屋敷であろう。その間の道路に入って、すぐ左側あたりが会田算左衛門の居宅で、後ろの林が神明社か。

七九八）年十一月十七日に深川黒江町の忠敬宅で北極星の高度を測った記事に「予ガ住居北本所表町浜屋敷」と記載されている。北本所表町の『町方書上』にも里俗として「浜屋敷」と呼ぶ場所があったと記されている。『日記』によると隅田川沿いの道路から、図7の松平左衛門尉の中屋敷と青枠で示した北本所表町の間を十間入ったところと記している。石原橋の渡巾を十間と記しているので、中之郷竹町と北本所表町の境界あたりが小休した会田算左衛門の居宅ということであろう。『町方書上』によると中之郷竹町には將軍家専用船着き場である「御上り場」があった。図8の「御上り場」が

右横町一町余引込 是安寺 右横町左渡場 右横町云右細川采女守中屋敷左大川橋 大印(大) 是より大川橋を渡 大川橋の 渡巾八十五間 左側材木町	右横町一町余引込 靈光寺 右横町 左渡場 竹町渡という 右細川采女守中屋敷 左大川橋 (大)印を残す 是より大川橋を渡 大川橋の 渡巾八十五間 左側材木町	右側花川町 右細川端通横町 當月十日残し 又(大)印始め 大川筋を 右細川越中守屋 鋪 左川端人家三軒	右側花川戸町 左右川端通横町 當月十日残し 又(大)印始め 大川筋を 右細川越中守屋 鋪 左川端人家三軒	大川端除成地という 右生駒大内蔵屋鋪 源森橋 渡巾 小梅村 右横町 字 水戸殿橋	大川端除成地という 右生駒大内蔵屋鋪 源森橋 渡巾 小梅村 右横町 字 水戸殿橋	渡巾七間 右水戸殿屋鋪 右野道 洲崎村 (右堤下横町 牛之御前 弘福寺 是より堤と成 右一町ばかり引込三圍稻荷 葛西太郎茶屋 右土手下 長	命寺 寺嶋村 (右龜戸道 字 霍土手という 右野道 白髭大明神 本社迄十間ばかり 右清泉寺 左渡場道 橋場渡という 是より田地中二町行て 大川端舟渡	測量隊は大川橋を渡って奥州街道に測線を繋 ぎ、また隅田川東岸に戻り大川筋測量を再開した。 図10を見ると、水戸徳川家の下屋敷を過ぎると町 場も終わり、小梅村や寺島村などの田園地帯が広 がっている。この地域は、浅草から見て隅田川の 向こうという意味で「向島」と呼ばれ、近世後期 になると、在原業平の東下りや梅若伝説に由来す る芸能や文芸の舞台として、隅田堤(墨堤)の桜 や百花園などの四季折々の花の名所として、三圍 稻荷社の開帳や隅田川七福神めぐりの地として、
--	---	--	---	--	--	--	--	---

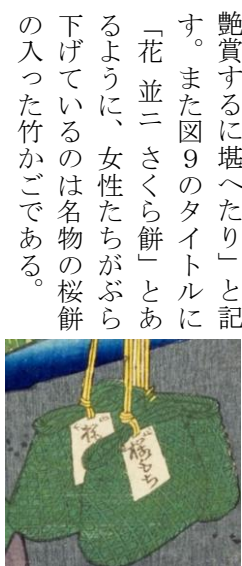


図9 広重/豊国 『江戸自慢三十六興 向嶋堤ノ花井二さくら餅』

江戸の近郊の代表的な行楽地として発展した。
 ・細川采女守：采女守は采女正を誤記。肥後新
 田藩第八代藩主の細川采女正利愛の中屋敷。
 ・大川橋：後の吾妻橋。安永三(一七七四)年
 町人が江戸幕府に依頼して架橋。大田南畝の『半
 日閑話』巻十三に、橋の名前は宮戸橋又は吾妻
 橋と聞いているのが、大川橋と高札が立った。
 橋を往来するには、武家方を除いて町人、出家
 町医に至るまで二文ずつ取ると記されている。
 ・細川越中守：肥後熊本藩九代藩主の細川越中
 守斎樹の屋敷ではなく、常陸谷田部藩七代藩主
 細川長門守興徳の屋敷の誤り。
 ・是より堤と成：『江戸名所図会』は、幕府の命
 によって墨堤の左右へ桃・桜・柳の三樹を植え
 させたので、二月の末より弥生の末まで、紅紫
 翠白、枝を交へ、さながら錦繡を晒すがごとく、
 艶賞するに堪へたり」と記
 す。また図9のタイトルに
 「花井二さくら餅」とあ
 るように、女性たちがぶら
 下げているのは名物の桜餅
 の入った竹かごである。

- ・三囲稲荷：元禄年間に俳諧師の宝井其角が雨乞いのため「夕立や田を見めぐりの神ならば」の句を詠んだところ雨が降ったという逸話や、三井越後屋の帰依を受けたことから有名になった。その鳥居は墨堤のすぐ下にあるため、船から見ると大半は堤に隠れて笠木だけが見えることが面白いと、浮世絵の格好の画題となった。
- ・牛之御前：『新編武蔵風土記稿』では牛御前社は本所と牛島の鎮守なりと記す。
- ・葛西太郎：牛御前社近くの高級料理茶屋平岩のこと。図11に見るように凝った造りの建物や風雅な庭と、端唄に「葛西太郎の洗い鯉」とうたわれた鯉などの川魚料理で知られていた。
- ・長命寺：寺男が隅田堤の桜の葉を塩漬けにし



図10『江戸実測図（北）』に加筆



図11 広重『江戸高名会亭尽 向嶋之図 平岩』

- て始めた桜餅が名物となり、曲亭馬琴の『兎園小説』第八集には、文政七（一八二四）年の一年間で三十八万七千五百個が売れたと記す。
- ・清泉寺：図10の法泉寺を誤記。

和歌山藩の下級武士である酒井伴四郎は江戸勤番中の日記に、向島のあたりの茶屋、料理屋、別荘などは「風雅成ること筆紙に尽くし難く、ただ羨ましきばかりなり」と感想を記し、自分は掛茶屋で茶を飲み桜餅を食べたと記している。その向島の名高い料亭に遊んだのが伊能忠誨（忠敬の嫡孫）や伯母の妙薫（忠敬の長女）である。

文政五（一八二二）年四月九日の『忠誨日記』に「船にて真先迄行き、御屋敷へ行き、伊髪（白鬚）大明神へ参り、加西（葛西）太郎アトニテ料理座敷有り。此ニテ入湯。飯等食べ、又船ニ乗り、深川八幡ウラニ付ク。八幡へ参り、六時過帰宅。」と隅田川遊覧の様子を記している。「真先」は隅田川西岸で真崎稲荷などからの眺望が名高い「御屋敷」は白鬚神社近くの高橋景保の別荘をさす。景保は忠誨に宛てた文政六（一八二三）年八月二五日の書状（国宝書状類二六一）で、寺島村の別荘が大風で倒壊した事を告げ、「妙薫尼御助力にて手に入れ候屋敷」をわずか一兩年で手放したくないので、再建費用のうち景保の負担分の十五両を借用したいと申し入れた。

場なり 隅田村

左道下木母寺にて昼休 右三十間引込 円徳寺 左堤下古川入江 右に蓮池一周四町ばかり 中に弁天嶋あり 左大川迄四町ばかり 此辺隅田川という

右市川道追分 綾瀬橋 渡市 千住三町目分 掃部宿分 右千住二丁目道追分 右千住中引込氷川

右市川道追分 綾瀬川 綾瀬橋 渡市 千住三町目分 掃部宿分 右千住二丁目道追分 右三十間ばかり引込氷川

大明神之社 奥州街道筋を引抜け 字掃部堤御用杭①印を残す

一里二十一町二十〇間三尺 大川筋惣ベ二里〇六町一十九間

外横物 六町

一十二間五尺

惣測ノ二里二十町三十一間五尺

七ツ時前帰宿 昨日洪川助左衛門殿焼失

一十二間五尺 惣測ベ二里一十二町三十一間五尺

七ツ時前帰宿 昨日洪川助左衛門殿焼失

二月十四日 終日大雨故不出

二月十四日 終日大雨故不出

測量隊の昼食は隅田村の木母寺であった。昼食後は綾瀬橋を渡り西に向かった。図12を見ると隅田川北側の人里離れた地域である。図13に「此辺を関屋の里といふ」とあるように、和歌の名所と結びつけて、江戸の風流人士が訪れる風雅の地とされた。ただし、『新編武蔵風土記稿』では、和歌

の名所の関屋の里の場所については諸説あるとしたりと云え、「土人はとかく此辺たりと云え」といえず「此所を関屋の古蹟とす」としている。氷川大明神之社を右手に見ながら掃部堤を西進して奥州街道に測線を繋ぎ、この日の測量は終わりとなり、午後三時半頃には帰宿した。

・木母寺：人買にさらわれこの地で亡くなった梅若丸とその母にまつわる梅若伝説の舞台として名所となった。能「隅田川」に始まり、近世に入ると梅若伝説をテーマとした作品は、歌舞伎などの芸能や文芸など多分野に及んだ。

・此辺隅田川という：『国史大辞典』によると「江戸時代に隅田川とよんだのは：少なくとも千住大橋下流からのようで、浅草観音の付近を宮戸川とか浅草川とよび、両国付近では大川とか両国川とよんだ」とする。この『日記』では「大川」筋測量と記している。

・掃部堤：『新編武蔵風土記稿』によると、石出掃部亮が鷹狩りに来た家康に願ひ出て水除堤を築いて新田開発を行ったことから、掃部堤と呼ばれ奥州街道の東西両側に続いていた。

・御用杭①印：『日記』の記述では「奥州街道筋を引抜け」とあるため、「字掃部堤御用杭①印」の位置が奥州街道上なのか、奥州街道を突き抜けて更に西側の掃部堤上なのか疑義が残る。幸いにも第九次測量の『測量日記』に「昨亥年二月九日江戸市中測の残①印に繋ぐ。：即千住宿家並奥州街道なり」とあるので、奥州街道と西側の掃部堤が接する地点を指す。第九次測量では伊豆七島測量の帰路の最後に隅田川上流の荒川筋を進み、文化十三（一八一六）年四月十二日に図12の西側から奥州街道に測線を繋いだ。

・昨日洪川助左衛門殿焼失：高橋景保の弟で第五回測量に高橋善助として参加した。天文方の洪川家の養子として洪川助左衛門となり、築地の西本願寺の北側に住んだ。文政元（一八一八）年の武鑑では小石川三百坂に転居しているの

で、焼失したのは築地の屋敷である。

千住宿は千住大橋をはさんで北側の千住宿一町目、五町目、掃部宿、河原町、橋戸町、南側の小塚原町、中村町の十ヶ町からなり、日光街道、奥州街道、水戸街道の出発地である。『新編武蔵風土記稿』はその繁昌ぶりを、千住宿は長さが千二

百五十六間、左右に旅亭や商家が軒をならべて、旅人は絶えることなく賑わっていると記す。

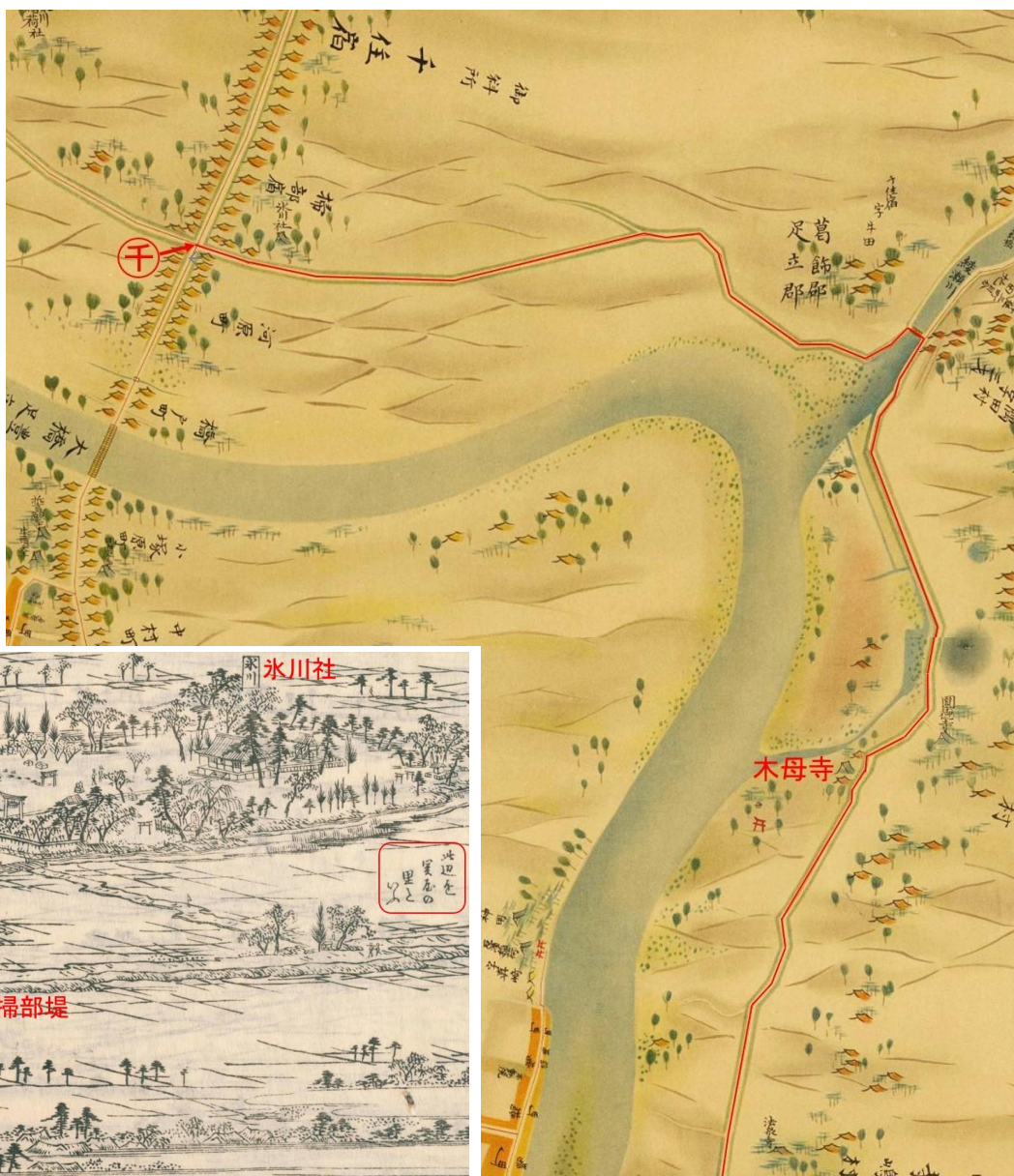


図12『江戸実測図(北)』に加筆

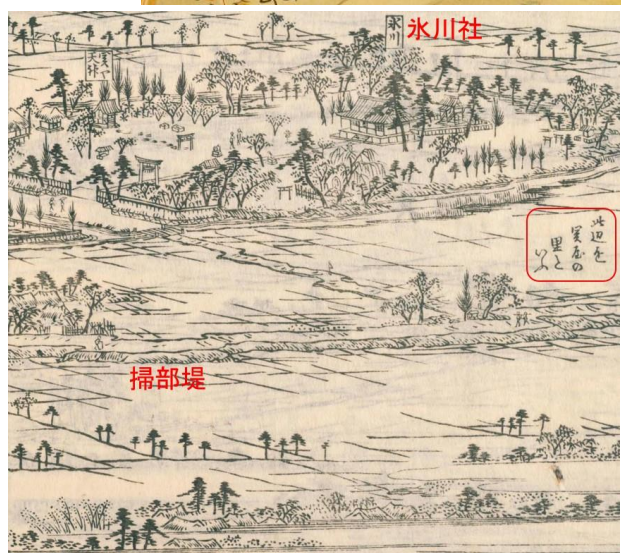


図13 掃部堤と関屋の里 『江戸名所図会』

【図版の出典】

・『日記』の図版は伊能忠敬記念館に架蔵されている写真帳による。無断流用禁止。

・『江戸実測図(南)』は国土地理院ウェブサイト「の古地図コレクション」による。

・『江戸実測図(北)』は『東京市史稿市街篇附図第三』による。

・図1、3、5、8、9、11、13は国会図書館デジタルコレクションによる。

【参考史料】

- ・『町方書上』 国会図書館
- ・『御府内備考』 国会図書館
- ・『新編武蔵風土記稿』 国立公文書館
- ・『江戸名所図会』 国会図書館
- ・『江戸歳事記(東都歳事記)』 国会図書館
- ・『文化武鑑』 国会図書館
- ・『遊歴雜記』 国立公文書館
- ・『続江戸砂子』 国立公文書館
- ・『天文簡要論』 山形大学学術機関リポジトリ
- ・佐久間文庫
- ・『平日閑話』 国立公文書館
- ・『酒井伴四郎日記』 『調査報告書 第二三集』 所収 江戸東京博物館

【参考文献】

- ・『東京市史稿 橋梁篇 第一、第二』
- ・『江戸の広小路―その利用と管理』小林信也 『都市紀要』四二 東京都公文書館
- ・『墨東の景勝地と観光の変容』小澤弘 『江戸東京博物館調査報告書』第二八集
- ・『江戸名所図会』にみる隅田川名所と流域の地域特性 鈴木章生 『国立歴史民俗博物館研究報告』第一三六集

補遺「高橋景保の別荘関係書状」

拙稿「江戸府内第一次測量の記録（九）」では、高橋景保が向島の別荘について記した書状（国宝書状類二六一）については、文政六（一八二三）年八月二十五日付けで伊能忠誨に宛てたものと推定した。しかし、上原久『高橋景保の研究』三八四～三八五頁では文化九（一八一二）年八月二十五日付けの景敬宛てとしているので補足したい。

国宝書状類二六一『高橋景保書状』から

… 測合記、暑中御尋書並びに中元御祝書三度の御手状相達し披見。

… 爰に己むを得ざる義出来候まゝ、御無心申し掛け候。先づ去る十八日暴風雨、御地如何。御破損の様承り度く候。当地大風一同の事にて候。右日、寺島村別荘、御聞き及びの通り、元来大破の家作の処、右大風にて崩れ候ひて、修覆も叶ひ難く候旨、職人申すまゝ、何も急に新築致し度き旨、立卿（杉田立卿。杉田玄白の子で別荘を共有）も申し候。… 固より手元僅かの分給故、如何とも致し方これ無く、さればとて今更人に譲り候も遺憾。元来妙薫尼御助力にて手に入れ候屋敷の事に候間、僅か一兩年にて他人へ渡し候も残念にて候。何の方金子恩借に願ひ度く候。尤も愈何程と申す事は、積出来致さず候へども、来月節前迄に先づ十五金御貸し下さるべく候。

… 右の段御勘考の上、加納治兵衛えも御語り、御酬早々待ち入り候。尤も返納方は月々少々にて進じ候様致し度く候。… 草々不乙

八月廿五日

景保

い能三郎右衛門様

この書状には「八月廿五日 い能三郎右衛門様」とあるだけで年号は記載されていない。上原氏は

伊能三郎右衛門を景敬と断定して日時の推定をする。書状に妙薫尼とあることから、忠敬の長女稲が薙髪して妙薫として佐原に戻った文化七（一八一〇）年以降、景敬が亡くなる文化十（一八一三）年六月までを該当期間とし、一兩年前に入手したということから文化九年八月の書状とする。

問題点は三郎右衛門が伊能家の当主の通称であり、妙薫尼と同時期の三郎右衛門は景敬だけではないということである。景敬の嫡男の忠誨は伯母の妙薫の庇護下で文政四（一八二一）年には元服し、同年九月には佐原村長百姓伊能三郎右衛門の名前で忠敬の死を公式に届けているので、この書状が忠誨宛である可能性を検討すべきである。

年次推定の決め手となるのが、別荘が倒壊する原因となった「十八日暴風雨」「右大風にて崩れ候」である。『東京市史稿』の『変災編第二』には江戸を襲った風水災に関する史料が網羅されているので文化・文政年間について確認すると、上原説の文化九年八月には風水災の記録がない。

一方、この時代の風水災、特に大風被害について特記されているのは、文政六年八月十七・十八日についてであり、多数の記事が掲載されている。『武江年表』では「八月十七日、夜八時より南大風雨。所々人家を損ず。怪我人・死亡の者多し」と記す。また『忠誨日記』の文政六年八月十七日には佐原でも「今夜烈風」、十八日に「今曉迄烈風」と記されている。

景保は別荘再建費用のうち十五兩の借用を頼むにあたって、忠誨の相談役である加納屋治兵衛にも話しをして欲しいと記している。同年八月二十

九日の『忠誨日記』には「高橋侯書状至来。右二付治兵衛ヲヨブ」とあり景保の書状と符合する。

また書状の冒頭に景保が「測合記」を受け取ったとあるが、これは測合つまり天体観測結果を照合するために送った佐原での観測記録のことであろう。文政六年六月朔日の『忠誨日記』には「今夕、測食」とあり、六月三日には「食測細測記相認、御用状相付、駿河屋江渡ス」と記されている。景保が受け取ったのはこの「食測細測記」のことであろう。この時の日食観測に関する記録が国宝文書・記録類

二三八「文政六年癸未六月朔食京師之数」、二二九「文政六年癸未六月朔食（日食測量）」、二四〇「文政六年癸未六月朔戊戌日食測量」の三点である。なお景敬が天体観測をしたという記録はない。このように景保の書状と『忠誨日記』の記載内容、『東京市史稿』所収の大風被害の記録から、この景保の書状は文政六年八月二十五日に伊能忠誨に宛てたものと推定できる。

以上の景保書状に対する推論は、故加藤一郎氏の「伊能忠敬記念館蔵 高橋景保自筆書簡について」（『香取民衆史』九、二〇〇三年）の翻刻と考察に依拠するものであり、筆者は『東京市史稿』の『変災編第二』の記事などで論拠を補ったに止まるものである。

なお、上原氏による『天文暦学諸家書簡集』（講談社一九八一年）一三八頁～一四〇頁にこの書状を含む高橋景保から伊能三郎右衛門に宛てた三通の書状が翻刻され、全て景敬宛ての書状としているが、この三通にはそれぞれ天体観測に関する文言があることから、佐原に帰村し天体観測を続ける忠誨に宛てたものとすべきである。

補遺「乾隆の十六省図」

会報99号の拙稿「国宝紹介『仏国曆象編』と『曆象編斥妄』」において、忠敬が自分の実測図の経緯度と合うと記した「乾隆の十六省図」について不詳であるとした。その後の調査結果について補足したい。

文化四年に幕府は高橋景保に西洋や中国の書物・地図を参考にして世界地図を作製するように命じた。そのためオランダ通詞の馬場佐十郎貞由が長崎から出府を命ぜられ、高橋景保のもとで翻訳業務に当たった。当時最新の西洋の資料においても、日本の北方一帯の地理は不明確であり、残された課題であった。その点で二人が注目したのが、暦局が模写した『清朝乾隆年間所刻十六省及九辺図』という地図であった。これが伊能忠敬の「乾隆の十六省図」であろう。馬場佐十郎は「其製極て精微を尽し、各地経緯の度数を画し、其地形の屈曲、地名の細密」と、高橋景保は「図中皆経緯天度を引線し、各州各部、北極高度を測量すること分明なり」と実測による経緯線が引かれていることを高く評価する。さらに「康熙帝の託に因て西洋の人の手に成るものか」と記し、『十六省及九辺図』が乾隆帝の時代ではなく、康熙帝の命を受けたイエズス会士による実測図『皇輿全覽図』によるものであることを考証している。

同じ頃、山田聯（通称は綱治郎。若年寄堀田正敦に儒学者、地理学者として仕えた。忠敬との窓口役として江戸日記や書状に登場する）は多くの北方図を集め考証した『彙輯北裔図説集覽備攷』を著した。その中に図1を載せている。その右下部分を図2に拡大すると、経緯線が引かれたこの

地図を「皇輿全覽図所収載満州東辺及阿當吉山（サハリンのこと）図」と記し、『皇輿全覽図』による部分図であるとした。更に地図の左上欄外には図3のように、按ずるに右の一図は兼葭堂所蔵『天下九辺輿地全図』収載するところ、黒龍江口図及烏蘇里江（ウスリー江）源図なるものなりと記している。つまり『皇輿全覽図』に基づき木村兼葭堂旧蔵の『天下九辺輿地全図』がつくられた。それを暦局で写したものが『十六省及九辺図』という関係が明らかになった。木村兼葭堂は大坂の富商で博学多才にして書籍や地図、書画などの一大コレクションであったが、死後にその膨大なコレクションは幕府に上納させられていた。

景保はアロースミスの地図をベースとして、『十六省九辺図』を参考にし、間宮林蔵のカラフト探検の成果を得て文化七年に『新訂万国全図』を上呈し、当時の世界最精最良の地図と評価されている。

なお、『十六省及九辺図』は国立公文書館が所蔵しているが、デジタルアーカイブでは公開されていない。

参考史料

・馬場貞由『東北韃靼諸国図誌野作雑記訳説』

・国立公文書館デジタルアーカイブ

・高橋景保『北夷考証』

・国会図書館デジタルコレクション

・山田聯『彙輯北裔図説集覽備攷』

・国会図書館デジタルコレクション

参考文献

- ・鮎沢信太郎『鎖国時代の世界地理学』一九四三年、日大堂書店
- ・上原久『高橋景保の研究』一九七七年、講談社
- ・船越昭生『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究』一九八六年、法政大学出版局
- ・中村真一郎『木村兼葭堂のサロン』二〇〇〇年新潮社
- ・高木崇世『近世日本の北方図研究』二〇一一年、北海道出版企画センター

※左図は国会図書館デジタルコレクションによる。



図1「皇輿全覽図所収載満州東辺及阿當吉山図」



図2

按右ノ一圖ハ兼葭堂所蔵天下九邊輿地全圖収載スルトコ黒龍江口圖及烏蘇里江源圖ナルモノナリ

図3

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第三十三回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎 編著 井上辰男

【第八次測量】（九州第二次） 京都く四日市く岐阜く高山 自 文化11年2月29日 至 文化11年4月16日

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
--------	------	-----	--------	-----	---------	------

【本隊】

文化11年2月	（1814）	昼休	平野村	京都府京都市北区	桔梗屋甚吉	一三三
29	（19）	京都神泉苑町	同	京都市中京区	若狭屋太郎兵衛	一三三
京師逗留測。一里余無測。葛野郡御室門前より千束道を測、総一手測、仁和寺宮御室御所、右に浄土宗双ヶ岡長泉寺、吉田兼好法師旧跡。妙心寺北門前、臨濟宗正法山妙心寺（寺中八十余院）、竜安寺門前、谷口村、左竜安寺道惣門迄二町半計、門を入と左に名所鏡容池一周八町計、臨濟宗妙心寺派大雲山竜安寺、方丈額、庭に虎の子渡石あり（相阿弥作）。本尊釈迦如来（迦葉尊者、阿難尊者）運慶作。等持院門前、左引込等持院門あり。禅臨濟宗万年山等持院、本堂左尊氏像（左側足利十五代の木像あり）。真如寺門前、曹洞宗真如寺、又等持院門前、松原村、北野村、平野村、平野社、式内平野祭神四社、小北山村、大北山村、左浄土宗法音寺、左引込曹洞宗北山鹿苑寺、金閣。下法水院という、本尊三尊阿弥陀運慶作。同二階潮音堂、本尊正観音恵心僧都作、四天王弘法大師作、天井画狩野正信。同三階究竟頂金閣、鹿苑院像画、究竟頂額後小松院勅筆。金閣の回鏡湖池一周七町計、その中小島数十一、境内名所多数。紙屋川、左葛野郡大北山村、右愛宕郡紫竹大門村、左に浄土宗吟松寺、枝千束御室道追分に繋終。それより無測にて神泉苑町へ帰宿。						

文化11年3月	（1814）	昼休	上加茂村 字河原町	京都府京都市北区	茶屋甚兵衛	一三三
11	（20）	京都神泉苑町	同	京都市中京区	若狭屋太郎兵衛	一三三
京都洛中測。三条通千本上る、四辻、愛宕道・伏見街道追分三条台より、丹波へ向、千本通測、三条台右、（三条台より左六七町田の中に改厩所の跡。宇天文台、その後人家）、右御池屋敷、右西町奉行所、左右御代官屋敷、聚楽廻、二軒屋敷（御普請役長屋、稲荷茶屋、右二条通、新屋敷、諸司代千本屋敷、小山町、右田中町、左因幡町、上十四軒町、左右出水通、左右下長者町通、左右上長者町通、左右仁和寺街道筋、左右中立売通、左右一条通、左右笹屋町通、右元誓願寺通、右横町中筋通、左右今出川通四辻を歴て北野天神へ打上。左右六軒町通、右横町突抜町、左右七本松通、北野天満宮裏門迄測。天満天神宮、別当松梅院。						

2 1	1 2	宿泊日・旧暦
昼休	(4. 20)	(西暦)
南孫橋町	京都神泉苑町	宿泊地
同 京都市左京区	同 京都市中京区	現・市町村名
浄土宗朝陽山法林寺	若狭屋太郎兵衛	宿泊宅
神泉苑町逗留測。無測、愛宕郡下鴨村より、ケ印を残迄測、此より鴨神社へ打上げ。一ノ華表、左式内鴨川合座小社宅神社、二ノ華表、右式内三井神社、名所蟬ノ小川、名所糺ノ森、左右桜並木茶屋あり。名所御祖原、下鴨神社楼門前に打止。楼門の左右廻廊立派なり。下鴨皇太神宮、式内加茂御祖神社、又ケ印より、加茂川、右京都入口升形という。又加茂川、(東へ渡)、田中村・砂川御霊廻村入会、左地藏堂四辻(八瀬大原通、若州道)、真直は白川越近江街道追分字柳町、(此所加茂川手野川落合)、左に浄土宗長徳寺、同常蓮寺、砂川石橋、左九条殿下屋敷、左吉田街道、聖護院村、三本木町入口(左側斗町続)、上堤町、中堤町、左熊野社あり、下堤町、新生洲町、北孫橋町、右二条橋樋ノ口という。洛中入口南孫橋町、左二王門通林寺門前町、三条大橋東詰に繋。		特記・天体観測 又今出川通り四辻より、左右五辻通、左横町釈迦堂前、左右上立売通、右横町寺町、右横町廬山寺通、左焰魔堂、洛中洛外界、御室御所隠室真言宗上品蓮台寺境内、同門前、右二条帝御陵、右御輿道、加茂道追分迄測。此より丹波口測。右側紫竹大門村、左側蓮台寺境内、右御薬園、藤林道寿丹波口の木戸、御土居口、洛中洛外界に繋終。又蓮台寺境内、加茂道追分より加茂道測、大徳寺堺内、右田中に御陵あり、船岡山、左畑中に御陵あり、大宮郷大徳寺境内、門前村、大宮郷雲林院村、左大徳寺表門、臨濟宗竜宝山大徳寺、塔頭二十四ヶ寺、仏殿、本尊釈迦如来。法堂、天井竜の画探幽斎守信。一休和尚(住居)真珠庵。左引込今宮社。 大宮郷新門前村、同紫竹街道、同大門街道、右に大宮森、大宮郷八ヶ村(雲林院村、門前村、新門前村、紫竹村、紫竹街道大門村、上野村大門街道)。西加茂郷田尻村、洛中洛外界、堀川筋、堀川を渡、加茂川仮橋、上加茂村、字河原町昼休、左引込加茂皇太神宮、式内加茂別雷神社、象内川石橋、左引込式内太田神社、枝深泥池村、左探泥池、下鴨村、本村芝本町、下鴨神社北門前に打止。神泉苑町へ帰宿。
一三三	一三三	大図番号

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
2 1 2	(2 1)	京都神泉苑町	同 京都市中京区	若狭屋太郎兵衛	比より東海道重測十二間、奈良街道測。大橋町、左大黒町、右五軒町、右新五軒町、左横町古門前、右弁天町、左新門前西町、左新門前通、左祇園新地元吉町、左元吉町本通、新橋通、白川、大和橋、紀伊郡右常盤町、左祇園新地末吉町、右横町常盤町本通、左横町末吉町本通、左富永町四条通、左祇園町行当祇園社表門、右四条中ノ町、左角太神宮小社あり、左右共建仁寺門前大和町、亀井町、右横町トンダリ辻、建仁寺中門前、臨濟宗五山東山建仁寺、左建仁寺境内、小松町、右恵美須社、建仁寺外門前坂弓屋町、左右横町松原通、左薬師町、右北御門町木戸、山崎町、五条通、東橋本上ノ町、西横町は東二町目東組、左東石垣町、右西石垣町、左五条通清水道東二町目東組、右横町大黒町、音羽町、左袋町東二町目、西組木戸橋詰町、右横町金屋町三辻(直)五条通橋詰町木戸、本町通二町目、左棟梁町本町三町目、音羽川橋、同四町目四辻、左大仏前、大仏表門迄二町斗、新正西町、右猿屋辻、本五町目、新六町目、本町七町目、同八町目、同九町目、同十町目、左泉湧寺道、東福寺村、東福寺門前、一ノ橋、同北門前、二ノ橋、中村町、深江町、三ノ橋、左東福寺中門、同東福寺南門前、即表門也。臨濟宗五山恵日山東福寺、田中町、阿保町、大下の町、稻荷村字黒門、黒門左柱に繫打止。それより無測、帰宿。	一三三
3	(2 2)	京都神泉苑町	同 京都市中京区	若狭屋太郎兵衛	京都逗留。午後東西御奉行所諸司代へ忠敬他三名、明四日当京師出立届に出る。	一三三
4	(2 3)	伏見京橋町	同 京都市伏見区	丹波屋仁兵衛	京都神泉苑町一同出立。無測にて伏見京橋町に着。	一三三

5-2	5-1	宿泊日・旧暦
(24)	本隊昼休 本隊小休	(西暦)
宇治郷橋本町	広芝村 六地藏村字六地藏町	宿泊地
同 宇治市	同 宇治市	現・市町村名
美野屋市郎兵衛	黄檗山万福寺寿光院 一向宗聖林寺	宿泊宅
伏見出立。手分。【忠敬他四名】大亀谷村字七十軒町、右奈良、左宇治街道追分より宇治道測、右横町千本町、字坂本町、左御香宮、右浄土宗等泉寺、字鶴ヶ町、左禪宗仏国寺、裏門、左禪宗天王山仏国寺表門前六地藏村、右浄土宗玉泉寺、右浄土宗法雲山大善寺、境内除地、勅額六角堂、本尊地藏尊、此を六地藏という。右伏見道追分、字六地藏町、右一向宗聖林寺小休、 山科川大橋、右浄土宗極楽寺、宇治郡木幡村(左制札問屋前、直は大津道)、左正一位柳大明神(鳥居前本社迄一町半)、右浄土宗願行寺、左曹洞宗能化院、五ヶ庄、広芝村、右浄土宗弥陀次郎西方寺、三辻にヒ印を残。此より黄檗寺へ打上げ。左寺中三十三ヶ寺、黄檗山万福寺、表門前に打止。楼門迄一町斗。天王殿額、本尊四天王、中は布袋也。その後には本堂、本尊釈迦仏額、万福寺、木庵書、諸堂多し略す。 又三辻ヒ印より、左引込柳大明神、大和田村、大鳳寺村迄測る。此より三室戸打上。三室村、右名所力ゲロウ、右名所手習森、右宇治・左黄檗道追分、惣門、此より内三室戸寺境内除地、右に別当天台宗金蔵寺前、宇治三室戸寺本堂焼跡に打止。又大鳳寺村より宇治郷三室村、右名所浮船森、字彼方、左諏訪大明神の社、即名所椎ヶ本。右名所アツマヤ、ヲ印を残し。此より離宮、並恵心院打上。真言宗雲室山放生院橋寺、本堂本尊地藏菩薩興正菩薩作、宝物金銅方篋銘。一、金銅方篋。一、沙波梨筒。字馬場町、正一位離宮大明神、華表前に打止大鳳寺村。式内宇治神社(二座)、大鳳寺村右へ無本寺真言宗、朝日山恵心院竜泉寺本堂、大日如来弘法大師作、右に恵心僧都の自作像、左脇に開山弘法大師、宝物、早来迎弥陀画、恵心僧都自画、朝日に生ずる靈芝あり。 又ヲ印より初、宇治川橋詰、左茶師通円、宇治橋。中央郡界、久世郡となる、橋を渡て右に橋姫の小社、去丑年繫場に打止終。右宇治川添伏見道、真直は奈良街道、左平等院四辻追分、宇治郷橋本町着、それより無測平等院一見。名所剣殿、名所扇ノ芝、鳳凰堂、本尊釈迦如来、開基永承七年平等院殿建立、本堂、本尊阿弥陀如来恵心僧都作、宝物(源空上人、弘法大師)六字名号、源頼政旗幟山学阿上人筆、同弓唐竹旗竿、頼政鎧兜。此朝侍宮野善藏病氣に付、伏見より添触にて江戸表へ差下す。		
一三三	一三三	大図番号

7		6		5 3		宿泊日・旧暦
(2 6)	後手昼休	(2 5)	本隊小休 支隊昼休	【支隊】 小倉村	支隊昼休 橋詰町	(西暦)
木津宿	水梨村枝玉水宿	富野村枝長池町	広野村字広野新田			宿泊地
同 木津川市	同 井手町	同 城陽市	同 宇治市	同 宇治市	同 宇治市	現・市町村名
本陣翁屋喜兵衛 布屋源四郎	山形屋権兵衛	本陣三右衛門 庄屋九右衛門	丸屋吉兵衛	庄屋久次郎	宇治屋庄兵衛	宿泊宅
【永井他三名】伏見出立。紀伊郡伏見街道、東福寺門前稻荷村界木戸、字黒門より伏見街道向小倉測、稻荷村、榎橋町、御前町、左稻荷山稻荷大明神、深草村、直達橋通、左引込五百羅漢石像あり、左引込日蓮宗深草山宝塔寺、石橋、直達橋、左藤ノ森社、大亀谷村、鳥居崎町、宇治街道追分、字七十軒町に繋。奈良街道筋、左大亀谷村、右深草村、左右大亀谷村、堀内村、左黄檗派福聚山海宝寺、右御香宮、清和天皇貞觀四年再興。それより御香宮大明神という。伏見鍋島町、常盤町、玄番町、豊後橋町百十三間、向島村、橋詰町、中ノ町、下ノ町、向島村内茅町、此辺より左右池にて中に一筋ある堤を行、即大池の端なり、久瀬郡牧島村字西目川、字三軒屋、小倉橋(旧宇治川跡荒地)、小倉村、本村人家中止宿前に打止終。						
【忠敬他四名】久世郡宇治郷橋本町出立。同所打止より奈良街道測、左右町並橋元町、右御茶師上林又兵衛、左上林春松新町、右御代官所、左右茶師、六番町、五番町、左平等院道、四番町、御林川、坂井戸町、東町・西町、神名町、左太神宮社、右禪宗正法寺、広野村字十軒屋、字広野新田(立場)三辻、左奈良道・右伏見道追分に繋。左太神宮社、右引込金毘羅社、平川村枝大亀茶屋、大亀川、久世村枝宮ノ前、左引込若子天神社、寺田村枝久世前、枝観音前、左引込水度天神社、右に観音堂、富野村枝長池町(駅場)止宿前打止。手分と合会。【永井他三名】久瀬郡小倉村出立。同所人家中止宿前より、宇治郷羽拍子町飛家、(此辺前後茶畑おとし。献進の茶、此地より出るという)、広野村、同新田、宇治街道追分にて打止。それより宇治へ一覽に行、立帰、長池町着。						
長池町出立。【後手】同所止宿前より奈良街道測、観音堂村、長谷川、中村枝百度、綴喜郡奈島村、市辺村、又奈島村枝十六、右に加茂社、栗谷川、多賀村枝、多賀茶屋、南谷川、井手郷水梨村枝玉水宿(駅場)、名所井手ノ玉川、川上に井手ノ山吹名所あり、左山根に名所玉の井、玉川中央郡界、相楽郡井手郷綺田村界に繋終。【先手】長池町出立。相楽郡井手郷石垣村・綺田村界より綺田村枝鳥居、不動川水無、宇綾形、平尾村枝榎戸、枝有地巻、北河原村字埋レ口、椿井村、上柏村、木津郷木津宿(駅場)、木津川舟渡、総名木津、入会(上津村、千童子村、北寺村、枝村、大治村)、木津宿の内、奈良道追分迄測。それより同所測所に打止。両手共木津宿着。午後辰奈良測量へ此度繫測致度、小堀中務御代官所差添手代林田万作を以奈良奉行へ内伺為致候所、不苦候旨申聞に付、猶又表向永井甚左衛門差遣奈良繫測掛合相濟。						
一三四	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	大図番号

宿泊日・旧暦	(西暦)		宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
8 1	(27)	本隊昼休 樽井町	木津宿	奈良県奈良市 京都府木津川市	池田屋庄右衛門 本陣翁屋喜兵衛 布屋源四郎	手分。【忠敬他四名】木津逗留測。木津郷内本郷字本町止宿入口より奈良街道測、井関川石橋、字出垣外町、中町、南町、枝市ノ坂村、右に法然上人念仏石、右に春日大明神社、左右御林山、高座峠国界を歴て、大和国添上郡奈良坂村字奈良坂、奈良坂町(市中)三辻、左は伊賀道、直は大仏道追分打止。それより奈良春日神社へ参詣。左真言宗般若寺、大仏殿、春日神社、猿沢ノ池、それより木津町へ帰宿。	一三四
8 2	【支隊】	支隊昼休 木津郷梅谷村	加茂郷北村	同 木津川市	百姓忠藏	【永井他三名】向加茂郷測。奈良橋本町三辻制札前より、(重測)、樽井町、辰年止宿池田屋庄右衛門前に繋、左興福寺境内、右猿沢池、興福寺東六門、右大御堂十三鐘、春日神社一ノ華表前重測限、左京都街道追分迄測る。此より京都街道を測。左興福寺東門、右緑ノ池、押上町、今小路町、右東大寺景清門、手貝町、今在家町、佐保川石橋、東坂町、川上出屋敷町、興善院町、北山十八軒長屋、般若寺町、右律宗西大寺末法性山般若寺、奈良坂村、右伊賀越追分制札前に繋。此より加茂通伊賀国へ測。奈良坂村、長坂国境を歴て、山城国相楽郡木津郷梅谷村、加茂郷高田村、猿渡川土橋、(同郷)里村字山崎、木津道追分に打止。それより無測加茂郷北村へ着。	一三四
9 1	本隊昼休 船屋町枝山上村	同 木津川市	大庄屋梶田順藏	同		【本手】木津本郷大路村止宿前より加茂町を測、左浄土宗正覚院、枝鹿背山村、加茂郷観音寺村、石部川土橋、赤田川、里村枝山崎、右奈良街道に繋。左山添に三ヶ原郷人家一群、名所泉川、北村、船屋町(駅場加茂駅)、枝山上村、字市ヶ辻、牛谷川土橋手前に繋終。それより無測北笠置村へ着。それより笠置寺へ行。【別手】加茂郷(北村、免並村、里村三ヶ村)入会、牛谷川土橋端より、字山田、南笠置村枝五軒屋、大川舟渡し即木津川、切山村枝草畑、北笠置村(駅場)、字獅子ヶ渡、笠置寺追分迄測、それより北笠置本村測所前打止。	一三四
9 2	(28)	支隊昼休共 北笠置村	同 笠置町	本陣森島七郎兵衛 伊勢屋平治郎	此より笠置寺へ打上げ。獅子ヶ渡より、大川渡、南笠置村笠置寺本堂前迄測。山上に大蔵三つ。弥勒岩(竪十一間横八間)文殊岩(竪六間横五間)、薬師岩(竪六間横五間)。(此大石に彫し仏体は人作にあらず。仏作なるべし)といふ。元弘元年九月二十八日兵火に堂塔悉く焼失す。右仏石も焼て今仏体も不詳。往古は此大石に大堂ありと。その形少し存す。此岩上は即後醍醐帝の皇居の旧跡なり。今猶平地一群の松樹あり。真言宗古義無本寺、鹿鷲山笠置寺、本堂、正月堂観世音(立像六尺)、十一面観世音(公慶上人作、立像四尺)、鐘あり。古書画あり。宝物、晃殿司画、その外縁記、画縁記あり。いずれも古物也。北笠置村着。両手出会。	一三四	

20 *		19 *		18 *	17 *		16 *		15 *	宿泊日・旧暦
(9)	昼休	(8)	昼休	(7)	(6)	昼休	(5)	昼休	(4)	(西暦)
四日市宿	大井手村	菰野村	水沢村枝青木川	同	伊船村	川崎村字南条組	亀山城下	関宿	加太宿字板屋	宿泊地
同 四日市市	同 四日市市	同 菰野町	同 四日市市	同	同 鈴鹿市	同 亀山市	同 亀山市	同 亀山市	同 亀山市	現・市町村名
本陣江戸屋彦兵衛	郷土須藤磯治	東派一向宗明福寺 亭主分伊藤左市	百姓治右衛門	同	曹洞宗養泉寺	曹洞宗一心院	本陣間屋兼樋口九郎三郎	本陣間屋兼帯 川北久左衛門	新本陣坂久内	宿泊宅
上柘植宿出立。同所測所前より枝小林小場、枝岡鼻小場国界を歴て、伊勢国鈴鹿郡加太宿字大杉、字中在家、字北在家、字板屋(駅場)測所前に打止。										
雨天逗留										
伊船村出立。同所人家中より長沢村、此村左引込式内長瀬神社、右引込原中に森二つあり。一は宝冠塚という。一は宝裳塚という。日本武尊の冠裳を所納という。塚上に碑あり。武備社前迄測る。武備社(能褒野陵)といふ。日本武尊の御陵也と、山王村、一ノ宮追分を歴て式内椿大神社(一宮といふ)前迄測、又一ノ宮追分より大久保村、三重川、郡界、三重郡堂ヶ山村、水沢村枝下河内、青木川小流、枝青木川、足見川小流、佐倉村・桜一色村・智積村三ヶ村入会、佐倉村・桜一色村入会枝平子、笹尾川小流、宿野村、金谷川小流、東海道四日市追分を歴て此より菰野へ測。東菰野村本町制札前に打止、外に測所打上。										
菰野村出立。三重郡宿野村四日市追分より、四日市宿へ測、森村、金谷川、桜一色村、佐倉村、智積村、式内椿岸神社前迄測り、笹尾川、高角村社印歴て式内神前神社へ打上。笹尾川、三瀬川、神社前迄測る。又社印より川崎村、小生村、尾平村、大井手村、又尾平村、生葉村、伊倉村、久保田村、浜田村、四日市宿入口に川印を残。此より三滝川筋土橋際に打出、中心に繋。又土橋上江戸の方へ向重測、引返川印より、四日市西町通を測、四辻制札前に出、それより上の方へ向止宿前に打止。										
一一九	一一九	一一九	一一九	一一九	一一九	一一九	一一九	一一九	一一九	大図番号

【支隊】	伊勢国津城下へ向て測。	宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
3月13日	(5. 2)	平田宿	三重県伊賀市	問屋本陣兼帯十五郎	上野城下出立。同所上印より津町街道を測、東大手門、右横町恵美須町、右制札問屋場、右真言宗上野山薬師寺、左引込天神社、片原町、木戸新町、左側寺町、右側侍屋敷、左横町侍屋敷通、右日蓮宗長栄山上行寺、農人町、右横町裏町、三辻左江戸道・右伊勢道追分に繋ぎ測る。此より伊勢道を測。左農人町横町、右横町一町計、又左農人町横町、左引込真言宗相染院(境内に芭蕉塚あり)、右横町田端町通、左真言宗安楽院、車坂町、右天神の旅所、右車坂町横町通、木戸市中限、字車坂、右伊勢道追分。 市中持地界、西明寺村字要、西明寺村、羽根村入会、左右西明寺村字中河原、高畑村、左地藏堂、荒木村字河原(服部川辺)、字大鎌(荒木又右衛門本苗を菊山といふ。此所の郷土也。)、右白髪大明神華表前、山の中腹にあり。式内須智荒木神社、別当真言宗宝性寺。左服部川々向に小地藏といふ岩あり。阿弥陀の像を彫付たり、左川中に陰基石という大岩あり、山田郡真泥村字河原、左山上に春日大明神の社(小社)、字河原、平田宿(駅場)、左八王子社、同村止宿前打止。	一三〇		
14	(3)	上阿波村平松宿	伊賀市	庄屋本陣兼茂右衛門	平田宿出立。同所止宿前より伊勢道測、左に植木大明神、右山上出後村内に式内鳥坂神社、中村字出茶屋、川北村、広瀬村字橋本、字三谷、下阿波村字岩伝、字椎木、字観音寺、下阿波村内右川向山根に式内阿波神社、左に観音堂、字埃ノ木、右川向不動滝、字牧ノ口、字大橋、脇部川板橋、富永村、高尾川土橋、猿野村、左川向に字大仏木場、嵯峨大覚寺末真言宗新大仏寺、本堂、大仏(奈良大仏十分の一に写)、字高尾、字奥、上阿波村平松宿(駅場)人家中に打止。	一三〇		
15	(4)	長野宿	同 津市	問屋岡喜右衛門	阿波村平松宿出立。同所打止より伊勢道測、当村内左山根に式内芦神社、字東手、服部川斜に渡土橋、字元町木場、字河原口、又服部川土橋、字汁付木場、左山鼻に弁天の小社、字弁天、横尾橋斜に渡土橋、字横尾小流土橋、字阿波峠、下り坂に至て字長野峠国界歴て、伊勢国安濃郡長野村、平木村入会、字埋り、谷川埋橋、平木村字犬塚、右に大地蔵、字滝谷、左に滝あり。高五丈計、山頂より落、その勢強し、右川向山奥に古城跡。字殿畑、谷川土橋、平木村、左山頂に三船大明神の社あり。当村の鎮守なり。測量者考、此社式内の小舟之神社ならんか、右岸下に舟岩という舟に似たる大岩あり、三舟橋、平木村、長野村入会、左右長野宿(駅場)、右山神の森あり、字長野山の山ノ神、字ドンド川、右制札問屋場、左岡山上屋敷跡あり。字御屋敷といふ、南長野村地内にて打止。それより立帰長野宿へ着。	一三〇		

20		19		18	17	16	宿泊日・旧暦
(9)	昼休	(8)	昼休	(7)	(6)	(5)	(西暦)
四日市宿	白子宿	津城下大門町	本村枝相川	同	久居本町一丁目	蠅田村字三軒茶屋	宿泊地
同	同	同	同	同	同	同	現・市町村名
本陣江戸屋彦兵衛	問屋嘉左衛門	本陣進伊左衛門	禅宗大元寺	同	町年寄客屋預 太田七兵衛	伊賀屋利右衛門	宿泊宅
無測。津城下大門町出立。上野宿・白子宿(昼休)、神戸宿(小休)、東海道・伊勢道追分、追分村にて小休、それより四日市宿へ着。両手出会。							
久居町本町一丁目出立。同所追分より津町へ測、二ノ町一丁目、左寺町通、同八幡宮、同富士権現社、市中限本村枝相川、相川石橋、此より垂水村、右焼尾池、安濃郡半田村字青谷、右青谷池、岩田村、左岡山上に薬庫あり、津町市中内岩田村字出口、右久居・左参宮道追分迄新測。此より重測。同村内立合町、岩田町四辻、左浄土宗来迎山阿弥陀寺、右浄土宗岩田山葉安寺、津町内伊予町、右に真言宗円明寺、左日蓮宗妙光山仏眼寺、四辻、岩田川岩田橋、岩田川中央界、分部町、左制札、同所城内へ行道あり、左元三大師堂別堂不動院、木戸、真直は山之瀬町、領主の菩提寺天台宗朝日山寒松院、木戸地頭領村、宿屋町、中ノ番町、大門町、止宿本陣前を歴て、右制札中柱迄に打止。真直は天台宗恵日山観音寺あり。							
雨天逗留。							
本町二丁目、右大手入口門迄測る。							
蠅田村建場、字三軒茶屋追分より津道測、枝北手、多野田村字北側森村、字篠ケ原(左山田池)、戸木村、右奈良道・左いせ道追分用意に繋置、久居道を測。枝羽野、悪水川石橋、戸木村、左津町・右参宮道追分、右久居陣屋西門、久居町、万町内新町、万町、右愛宕社、右陣屋入口万町門を歴て、万町、内東町、幸町、右陣屋入口幸町門、旅籠町、左制札本町一丁目、右参宮・左津道追分に打止。此より大手へ打上。本町二丁目、右大手入口門迄測る。							
特記・天体観測							
長野宿出立。南長野村打止より枝観音寺垣内、左山頂に立岩大明神社、枝豊後垣内、柳谷村、春日小社在、栗原村、石橋、足坂村、小休庄屋此家庭中の踏石は貝の化石なり。蛎の付たる跡あり。右貝化石柳原村山中より出といふ、五百野村枝上ノ郷、枝下ノ郷、枝中ノ郷、一志郡五百野村・蠅田村入会、蠅田村字三軒茶屋建場、追分(左なら大坂道、右さんぐう道)直津道石碑に繋打止。							
一一九	一二九	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	大図番号

宿泊日・旧暦		(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
【本隊】							
3月21日*	(10)	桑名城下川口町	同	桑名市	本陣丹羽善九右衛門	四日市宿立。手分、永井他三名菰野へ行て測。忠敬他四名無測にて桑名城下へ着。	一二九
22*	(11)	香取村	同	桑名市	大庄屋城野督之丞 年寄長吉 米屋弥六郎	行先肘江川に添、肘江川香取川二流並ぶ、右八幡宮・山ノ神二社小社、右に正ノ神小社、中津村、肘江川、香取村、戸津川、同本村(町並家百二十一軒)止宿前迄測る。仕越。左人家後に香取大明神小社、左に東派安田山法泉寺、高須道・多度道追分を歴て此より多度神社へ打上。戸津村、右に八幡宮の社、合殿に式内尾津神社、左桑名道追分、多度村、多度川、字宮川、左清水の名水あり。右森中に地藏堂、宮川同橋、華表、多度神社正面に至る。左側神主宅前。右神楽所、左神輿殿、拝殿、宮川神前橋、神前に打止。多度山、式内多度神社、神前後に御供石、箆石あり。それより無測香取村へ帰。	一一八
23*	(12)	高須町	岐阜県海津市	庄屋九郎兵衛	本陣荒物屋七郎右衛門 大坂屋清助 亀屋治右衛門	香取村立。同村追分より高須道測、多度川、柚井村字米野国界を歴て、美濃国石津郡下一色村字戸川通、枝下塚村、中島村外新田、大里村、安江村字下安江、山崎村、谷川、上野河戸村、左山添に高須主松平中務太輔菩提所浄土宗臥竜山行基寺、伊尾川船渡、中央界、百八輪中、福岡村枝日下丸村、右八幡小社、百八輪中(一周十三里程南北三里、東西一里余、此輪中は地卑にて沼田多し。洪水には軒下迄水着。家作も土蔵も石垣を高くし二階三階に作る)、左天満宮社前迄打上。高須(村町)両鎮守天満宮、別当真言宗金剛山日光寺。左大垣道追分を歴て、此より高須町、高須町下町、木戸、右浄土宗円心寺、上町測所を歴て、上印迄測る。此より大戸打上げ、木戸大手前迄測る。又上印より領主参勤道打出す。上町、横町、馬目町、石橋、左一向宗庵巻坊、大江落川土橋、市中限、馬目村制札前打捨終。高須町着。	一一八

27 *		26 *		25 *		24 *		宿泊日・旧暦
(16)	昼休	(15)		(14)	昼休	(13)	昼休	(西暦)
島村字白石	八幡村枝西江渡	赤坂宿		大垣本町	古宮村	福東村	海松村豊喰新田	宿泊地
同 揖斐川町	同 池田町	同 大垣市		同 大垣市	同 大垣市	同 輪之内町	同 輪之内町	現・市町村名
一向宗西溪流山受念寺	庄屋与惣治	本陣矢橋広助		本陣上田九右衛門	郷土河瀬百次郎	庄屋助右衛門	名主善左衛門	宿泊宅
赤坂宿・同所本陣前より重測、右制札四辻、左大垣道・右谷汲道・真直木曾街道追分碑に繋。此より谷汲道新測。赤坂宿人家続、左引込石引大明神の社、左金生山の八合目計に金生山宝光院明星輪寺あり市橋村・中村・南村・金地村・井之上村・田中村・江渡村、合六ヶ村を片山村と号す、別に村なし。八幡村、枝西江渡、株瀬川渡。此所にて粕川という、八印を残。此より八幡八幡宮へ打上げ。左一向宗宝光寺、左八幡小社あり。華表、八幡宮社前に打止。又八印より谷汲道を測、六之井村、池田新田、又六之井村、東野村、左側本郷村、左側萩原村、右側上田村、左右共上田村、加須河原新田、それより大野郡杉野村、島村、伊尾川船渡、島村字白石止宿入口打止。		大垣本町・藤江村・林本郷村入会より、左右林本郷村・枝出屋敷、林東村、楽田村、大島村、木曾街道堤上へ出て三印を残。此より木曾街道を江戸の方へ向て重測。柳瀬村界に打止。又三印より、京都の方へ向て重測。北側柳瀬村、南側大島村、南側計楽田村、堤を下て右側、柳瀬村・北方村界に打止。それより木曾街道を京都の方へ無測、赤坂宿へ着。		大垣本町・藤江村・林本郷村入会より、左右林本郷村・枝出屋敷、林東村、楽田村、大島村、木曾街道堤上へ出て三印を残。此より木曾街道を江戸の方へ向て重測。柳瀬村界に打止。又三印より、京都の方へ向て重測。北側柳瀬村、南側大島村、南側計楽田村、堤を下て右側、柳瀬村・北方村界に打止。それより木曾街道を京都の方へ無測、赤坂宿へ着。		大垣本町・藤江村・林本郷村入会より、左右林本郷村・枝出屋敷、林東村、楽田村、大島村、木曾街道堤上へ出て三印を残。此より木曾街道を江戸の方へ向て重測。柳瀬村界に打止。又三印より、京都の方へ向て重測。北側柳瀬村、南側大島村、南側計楽田村、堤を下て右側、柳瀬村・北方村界に打止。それより木曾街道を京都の方へ無測、赤坂宿へ着。		特記・天体観測
一一八	一一八	一一八		一一八	一一八	一一八	一一八	大図番号

宿泊日・旧暦		
29 *	28 *	
(西暦)		
昼休	(17)	(18)
宿泊地		
深坂村	上長瀬村	中西郷村
現・市町村名		
揖斐川町	揖斐川町	岐阜市
宿泊宅		
庄屋治兵衛	名主十兵衛 百姓谷右衛門 百姓利喜弥	庄屋三左衛門 百姓佐藤太 百姓豊三郎
特記・天体観測 島村出立。同所字白石止宿入口より長良村、用水川、字白石、右山の中腹に白石という岩石あり、石面八畳敷なりと、故に白石共八畳岩ともいうよし。イ印残、此より揖斐町へ打上げ。揖斐庄三輪村(通名揖斐といふ。町並人家四百三十軒、字下新町、左に伊勢両宮の遥拝所、石灯籠あり、右一向宗真教寺、同大乘寺、三辻、真直は上新町、右へ曲て測、横町又三辻、右を下町といふ。左へ曲て測、中町、右に天神社、上町、右引込陣屋、上町人家限、木戸左の柱に繫置。此木戸を出ると吹本川に板橋あり。行先近江又越前道大難所の由、此道筋伊尾川に横山の釣橋といふあり。長七十五間、巾四尺、伊尾川兩岸の大榎より葛を下て釣る。旅人大難所の所也。それより先に黒鉄峠といふあり。絶壁険阻にて年々十月より二月迄は大雪通路なしと。又長良村追分イ印より、志津山村字出屋敷、小野村、左側小谷村字坂ノ下、揖斐坂峠、左に地藏、左右共深坂村、左森中に船附大明神、山王大神権現社あり、枝肥田村、右道端に観音の仏足跡あり、左谷間に式内花長神社(名札村内にあり。当時上鼻長大明神といふ)、又式内花長下神社(当時下鼻長大明神といふ)。名札村、念仏橋、左念仏池あり(中に阿弥陀の銅仏あり)、字高橋、高橋川高橋、谷汲村、右江戸・左谷汲道追分を歴て、此より谷汲山へ打上、鹿除門、茶屋(即順礼宿屋)、二王門、右に放生池中ノ島に子安の地藏あり。坊中、普門院、一乗院、法輪院、地藏院、明王院、即坊頭也。右に勅宣の太夫藤といふあり。左十王堂、右羅漢堂、日光宮御支配天台宗谷汲山華嚴寺、本尊十一面観世音、右にも十一面観音あり。左毘沙門、右不動明王、大日如来地藏菩薩、又名札村追分より江戸道を測、結城村、下長瀬村字山田、字越釜、左六社大明神、上長瀬村止宿前打止。		
一一八	一一八	一一八

3月30日*		【本隊】	
(19)	昼休	東鏡島村	岐阜県岐阜市
加納城下	岐阜市	庄屋林蔵	本陣松波藤右衛門
中西郷村出立。大手分。永井他三名山県郡高富へ測。忠敬他四名、同所止宿入口より、枝阿弥陀寺、莚田郡北野村、字河原、方県郡小西郷村、西改田村字堀ノ内、領上尻毛村、川部村、下尻毛村、曾我村・下曾我村入会、上下曾我村に大印を残、此より方県津神社へ打上。上下曾我村入会式内方県津神社。又大印より、一日市場村、小島村字御紅、長良川舟渡、郡界厚見郡鏡島村、東鏡島村両村入会、左右東鏡島村、乙津寺道追分に十印を残。此より乙津寺道追分迄測。又鏡島村、木曾街道旧測の道に出迄測る。それより又木曾街道筋重測して右乙津寺道追分に打止。又十印初、木曾街道に出、加納領の碑に繫(即東鏡島・鏡島村界)。それより無測、加納城下着。此日当所より江戸行書状を出す。		一一八	一一八

29		28		27		26		宿泊日・旧暦	宿泊地・旧暦
(18)	昼休	(17)	昼休	(16)	昼休	(15)	昼休		(西暦)
中西郷村	谷汲村	赤坂宿	大垣城下本町	今尾村	駒野村下組	津屋村	石畑村		宿泊地
同 岐阜市	同 揖斐川町	同 大垣市	同 大垣市	同 海津市	同 海津市	同 海津市	同 養老町		現・市町村名
百姓佐藤太 百姓豊三郎	庄屋三左衛門 今村屋弥五兵衛	本陣矢橋広助	本陣植田九右衛門	材木屋藤七	惣太夫	名主藤十郎	庄屋五郎右衛門		宿泊宅
赤坂宿出立。無測、谷汲村昼休、それより方県郡中西郷村へ着、両手分出会。		今尾村出立。無測、大垣城下本町昼休、それより中山道赤坂宿着。		津屋村出立。同所人家中より、一向宗東派津谷山本慶寺、志津村、南谷川、徳田新田、徳田村・庭田村三ヶ村入会、徳田川河原、徳田新田、徳田村字口徳田、庭田村、駒野村字藤沢、字中組、字下組、追分(右桑名道、左関ヶ原道)、伊尾川舟渡、駒野渡という。福岡村、川端堤大垣街道追分に繋終。駒野村下組、それより無測、今尾村着。		沢田村出立。同所追分より伊勢道を測、字坂ノ谷、多芸郡桜井村、上方村、竜泉寺村、右側勢至村、左側石畑村、喜多村、右側柏尾村、左側石畑村内引込式内太神の神社、土人大桑大明神という。右側白石村、柏尾村白石村界に四辻あり。左側鷺巣村、養老川河原水なし、右白石村内御井神社、土人天神という。左右小倉谷村、右側津屋村、左側船見村、左右津屋村、福聚山慈眼寺、善光寺阿弥陀分身如来ありと。同村人家中に打止。		特記・天体観測	
一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八		大図番号

7 ＊	6 ＊	5 ＊	4 ＊	3 ＊	2	1 ＊	文化11年4月 宿泊日・旧暦 (1814) (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
(26)	(25)	(24)	昼休 (23)	(22)	昼休	(21)	昼休	田瀬村	同 中津川市	本陣庄屋丹羽安右衛門 百姓和藏	福岡村出立。同所止宿下より、字坂口、長根橋小流、右古城跡山あり、下野村、大沢谷小流、田瀬村字下田瀬、同村止宿前に打止。	一〇九
								福岡村	同 中津川市	本陣庄屋西屋源右衛門 医師安保順正	遠山城下苗木町出立。同所飛弾道追分、測量繫の大岩より飛弾街道測、字北谷、字荒屋、日比野村字大牧、福岡村、松島川小流、同本村止宿下に打止。	一〇九
								遠山城下苗木町	同 中津川市	本陣小栗作右衛門 井筒屋兼助	大秋宿(又大久手)出立。無測、大井宿、中津川宿、遠山城下苗木村に着。領主より氷餅一箱被贈。	一一〇
								中津川宿	同 中津川市	庄屋酒井猪左衛門	太田駅出立。無測、伏見宿、御嶽宿、謡坂村十本木にて昼休、細久手宿、大久手(秋)宿に着。	一一〇
								大久手宿(大秋)	同 瑞浪市	本陣問屋長左衛門 伊勢屋半七	太田駅出立。無測、伏見宿、御嶽宿、謡坂村十本木にて昼休、細久手宿、大久手(秋)宿に着。	一一四
								太田宿	同 美濃加茂市	本陣福田治郎右衛門	加茂野村、太田宿街道に出、下町の内、木曾街道測に繫、郡上道追分側の制札石柱に繫終。	一一四
								鷹巣村	同 美濃加茂市	百姓市右衛門	関辻町一同出立。手分。永井他三名郡上郡八幡へ向て測。忠敬他四名、同所止宿前より太田宿へ測、上九日町、吉田村枝大門町、左引込新義真言宗吉田山新長谷寺、加茂郡、右側鑄物師屋村、左側市平賀村、鑄物師屋村枝宮地、左引込関村古城山あり。左右鑄物師屋村、肥田瀬村字月森、津保川斜に渡、右東田原村、左高畑村、市橋村字柿ノ木場、鷹巣村、今泉村、加茂野村、太田宿街道に出、下町の内、木曾街道測に繫、郡上道追分側の制札石柱に繫終。	一一四
								関村辻町	同 関市	本陣庄屋彦十郎 孫左衛門	芥見村芥見町出立。同所止宿前より、字大野木、津保川飯橋、武儀郡下白金村、字鷺屋、上白金村字出見世、小屋名村、関村枝八バ、小瀬村字十三塚(此辺畑中に十三塚あり)、又関村西木戸町入口、左郡上郡道追分迄測る。兼景町本町通、五町目、四町目、三町目、二町目、辻町止宿前に打止。手分と出会。	一一四
								芥見町下町	同 岐阜市	本陣百姓孫助 村役人徳兵衛	芥見村字野村、江川小流土橋、芥見本村芥見町内下町止宿前に打止。	一一四
								左兵衛新田	岐阜県岐阜市	庄屋三四郎	加納町(又宿)出立。同所南広江町、木曾街道・岐阜道追分杭より岐阜道を測(重測)、中広江町、北広江町、上加納村字南上加納、字東上加納、右関街道追分、真直は岐阜道三岡町にて木戸左柱に繫(重測)。此より関道を測。字才勝、字二軒屋、小瀬村、岩戸村、左の方古城跡金華山繞、北一色村字北島、野一色村、佐兵衛新田、又野一色村、日野村、各務郡相野村、岩田村字小野(名所なり)。同所に开印を残、式社神前迄測る。岩田村北野郷内式内伊波乃西神社、社もなく一群の森の中に大岩あるのみ。又开印より、芥見村字野村、江川小流土橋、芥見本村芥見町内下町止宿前に打止。	一一四

2	4月1日	3月30日		【支隊】 山県郡高富および郡上郡八幡へ向て測。	12 ＊	11 ＊	10 ＊	9 ＊	8 ＊	宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
		(19)	昼休												
(21)	(5.20)	(19)	彦坂村字若宮八幡宮	岐阜県岐阜市	同	同	同	同	同	同	同	同	同	雨天逗留。	一〇九
関村辻町	長良中福光村下町	高富村枝天王町	岐阜県岐阜市	百姓栄蔵	同	御殿野村	加子母村	付知村	同	同	同	同	同	雨天逗留。	一一三
同 関市	同 岐阜市	同 山県市	丸屋喜代人 井筒屋丈助	百姓栄蔵	同	同 下呂市	同 中津川市	同 中津川市	同	同	同	同	同	雨天逗留。	一一三
本陣庄屋彦十郎 孫左衛門	大庄屋林和兵衛	丸屋喜代人 井筒屋丈助	百姓栄蔵	百姓栄蔵	同	庄屋平左衛門 百姓代六右衛門	庄屋伊藤正作	庄屋田口忠左衛門 百姓新右衛門	同	同	同	同	同	雨天逗留。	一一三
同。	長良中福光村字下町出立。無測、厚見郡芥見村(昼休)、それより関村字辻町に着。手分と合測。止宿一同。	高富村枝天王町出立。同所追分タ印より岐阜道測、方県郡東栗野村、左郡上道追分、三田洞村、末洞川、岩崎村、長良郷(上福光村、真福寺村、中福光村、三ヶ村総郷名)、右側中福光村、左側は真福寺村、字天神、左に長良総鎮守天満宮の社、字北町、左一向宗覚願寺、字南町、左関道追分、右引込臨濟宗崇福寺、左一向宗真生寺、長良川端に至る。左右真福寺村、上福光村(此所鵜飼の高名。此村にて紋縮緬を織る)、長良川平水渡、中河原、字上田人家入口迄測る。此より重測、字上町、字中町、字下町、岐阜、字材木町入口木戸に打止。長良中福光村字下町帰着。	中西郷村出立。手分永井他三名、同所西印より高富道測、用水川、上西郷村、御望村枝大塚、右引込陣屋あり、又上西郷村、則松村字宇田、宇田坂峠、村山村枝西山、芦敷村字白子、伊自良川、彦坂村、宇若宮八幡宮、字彦坂峠、椿洞村字原、西栗野村、宇岐阜道追分、八幡洞川、東栗野村、大桑川朝鮮橋、山県郡佐賀村、高富村枝天王町三方追分にタ印を残。此より陣屋打上げ。天王町(人家続)、左薬師堂、左一向宗円照寺、大桑道追分、(右森中に牛頭天王社あり。故に天王町という)、本庄式部少輔在所陣屋前に打止。	一一八	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三

7		6		5		4		3	宿泊日・旧暦
(26)	昼休	(25)	昼休	(24)	昼休	(23)	昼休	(22)	(西暦)
貢間村	中ノ保村字田ノ上	八幡城下本町	東乙原村乙原坂峠	下苅安村	下田村	洲原村	立花村	上有知村字二番町	宿泊地
同 郡上市	同 郡上市	同 郡上市	同 郡上市	同 郡上市	同 郡上市	同 美濃市	同 美濃市	同 美濃市	現・市町村名
頭百姓孫左衛門	百姓次兵衛	味噌屋長助	百姓吉兵衛	一向宗 戸谷山深心院乗性寺	庄屋作右衛門	頭百姓戸田兵左衛門	庄屋助太夫	本陣鈴木市郎右衛門	宿泊宅
再手分。永井他三名、郡上郡八幡へ向て測。関村辻町一同出立。同所字栗戸町、右郡上道、左岐阜道追分より郡上道測、右引込天台宗宗休寺、本堂大仏丈八尺。右古城跡、下有知村字辻、用水川、右森中白山権現社、字今宮、字新屋敷、小川、松森村、用水川、上有知村、雨池川板橋、字古市場、字二番町下、右一向宗教泉寺、左横町魚屋町、引込尾張殿陣屋、二番町中、二番町上、三辻、右飛弾、左郡上街道追分に打止終。上有地村字二番町中着。 上有知村出立。街道追分より、上横町、一番町上、左引込臨濟宗安住山清泰寺、曾代村字三ツ屋字出町、字九郷、左郡上川、牧川落合あり、左郡上川中に字岳ヶ岩(一周三十間計)、郡上川舟渡、又長良川共いう。立花村、左薬師堂、字薬師坂峠、枝海上、湯野川、枝左下坂、字地藏峠、左六角堂(本尊地藏菩薩)、洲原村白印迄測る。此より鎮守白山太神へ打上げ。楼門、拝殿、神前に打止。鎮座養老五年加賀の白山を移。又白印より、右白山の西門前止宿前打止終。 洲原村出立。同村止宿前より、郡上郡木尾村枝母野、字イヤ坂木戸、左に口留番所、枝野口、磐在村字恵美坂峠、根村、猪飼川、下田村、洞谷川、同村(駅場)、郡上川舟渡、福野村、下苅安村字苅安峠、砥石川板橋、止宿入口に打止。 下苅安村出立。同所止宿入口より、右引込曹洞宗林光院寄附寺、上苅安村、裸谷川土橋、三日市村(右鹿島社)、三日市坂峠、相戸村、深戸村、梅原村(上り馬駅)、左白山権現社、名津佐村、白谷川、東乙原村、乙原坂峠、千虎村(駅場)、右宝殿ヶ滝、一才洞川、穀見村、中野村、赤谷村(地先)、八幡町、木戸今町、左番所、新町、橋本町三辻、右金山街道、左高山街道追分に三印を残。八幡城下本町着。 城下八幡町出立。同所職人町、一向宗光曜山長敬寺門前より市中測、右引込小駄良川向に日蓮宗清水山大乗寺、鍛冶屋町、左大手入口、字大手横町、それより跡へ戻て、本町、左駅問屋場、右止宿前、右小駄良川端に名所白雲水あり。旧跡宗祇水。文亀年中に栗野侯宗祇に古今伝授の旧跡なりと。碑銘千載白雲水。左横町(魚町)、飛州高山街道也、左制札、左岸剣社、左番所、吉田川宮ヶ瀬橋、橋本町三ツ辻追分三印に繋。此より金山街道測。右一向宗願蓮寺、在分島方立町、右若宮山王社、右引込一向宗妙光山最勝寺、島方河原町、右引込臨濟宗鐘山慈恩寺、赤谷村、左吉田川向小野村内八幡城下に八幡宮あり。田尻村、右口留番所、堀越坂、安久田村、中ノ保村字口洞峠、字口洞、字田ノ上、字下屋、字杉ヶ峠、貢間村字上屋組、字中切組に打止終。									
一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一四	特記・天体観測
									大図番号

13		12	11		10	9		8		宿泊日・旧暦
(6.1)	昼休	(31)	(30)	昼休	(29)	(28)	昼休	(27)	昼休	(西暦)
下呂郷湯之島村	三原村字茂谷	同	保井戸村	三淵村	金山町	祖師野村字宮ノ下	方須村字古那田	下洞村	宮地村字染屋切	宿泊地
同 下呂市	同 下呂市	同	同 下呂市	同 下呂市	岐阜県下呂市	同 下呂市	同 郡上市	同 郡上市	同 郡上市	現・市町村名
本陣庄屋久兵衛 問屋徳兵衛	幸治郎	同	百姓長助 佐右衛門	平四郎	問屋早川市右衛門	百姓藤兵衛 清助	年寄紋兵衛	一向宗西南山覚証寺	百姓源右衛門	宿泊宅
特記・天体観測 昨夜より雨、此日益降、押て出立。真間村字中切組より、湯谷川土橋、字井川、湯谷川、入津村字兎山峠、野尻村字兎山島、鹿力倉川、宮地村字染屋切、左九頭大明神社、上沢村字宮脇、字下田、下沢村字上屋組、字岡屋垣内、字下屋組、下洞村止宿入口打止終。 下洞村出立。同所止宿前より、左役所、真那洞川、安郷野新田、鬼谷川、御普請所安郷野橋、方須村字上橋、字宮ノ越、字古那田、祖師野村字宮ノ上、右鎮守八幡宮、立派なる社なり、字宮ノ下止宿前打止。 祖師野村出立。同所止宿前より、谷川、戸川村、戸川の社、横谷川、枝奥金山、(金山本村を金山町という)、上有知道追分、郡上川舟渡、中央界、飛弾国益田郡下原町村川端に打止終。それより濃州金山町に着。 金山町出立。益田郡下原郷下原町村打止より、右飛弾川・郡上川落合、下原町村(駅場)、中切村字中綱場、(御用木飛弾川流の改所)、口留番所、麻生谷川板橋、御用木流し場、(此辺より材木を流、美濃国麻生村にて筏に組、それより尾州白鳥海辺より舟積、江戸或は大坂へ出す)、和佐組三淵村、飛弾谷川板橋、瀬戸村、左白山の社、保井戸村字新田、谷川板橋、下呂郷下呂組、門原村打止。 雨天逗留。 保井戸村出立。下呂郷門原村打止より、字坂ノ下、字門原峠、字荒田、保谷川板橋、三原村字釣鐘、字梅ヶ平、字茂谷、茂谷川板橋、字咲ヶ谷、少ヶ野村字大畑、左引込禪宗ランマガサノという庵あり、右の所に念仏岩という大岩あり。住吉川板橋、左の森の中に住吉ノ社、字船渡、飛弾川舟渡、森村字塚田、苗木道・金山道追分に打止。それより無測、下呂郷湯之島村着、両手出会。										
一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	大図番号

【本隊】		宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		特記・天体観測		大図番号					
4月13日*		(6.1)		昼休		乗政村		同 下呂市		百姓源右衛門		竹原郷御殿野・野尻村界より、野尻村、御殿野川田中橋、井詰橋、宮地村、乗政川仮橋、乗政村(下りの駅場)、坂本坂、初屋峠、下呂郷小川村、初屋谷小流、森村字砂場、字塚田、益田川端金山道追分に繋、阿多野谷水無河原、湯之島村(本村)駅場、外称下呂温泉あり)下印に打止。両手出会。此の温泉は益田川河原端に湧出、或は其所を替て湧出。故に蓋屋もなし、河原にて浴す。		湯之島村成立。【後手】益田郡下呂郷湯之島村下印より、萩原郷東上田村字茶屋谷、中呂村、花池村、上村字出見世、萩原町(村)駅場、桜谷川、桜洞村、上呂村郷上呂村地内八幡宮華表前に繋。小坂町着。【先手】上呂村八幡宮華表前より、右八幡宮社、字葛ヶ原、字長水、字筒井、右一向宗光雲寺、左飛彈川舟渡場、(高山)近道追分、尤山越大難所、右鹿供養塔、奥田洞村字今井、谷川二枚橋。大ケ洞村、宮田村、谷川板橋、小坂郷坂下村字石飛、字藪野、小坂町(村)字丸山、字矢ヶ野、濁川板橋、止宿前打止終。					
14		(2)		後手昼休 先手昼休		萩原町 大ケ洞村		同 下呂市 同 下呂市		名主熊崎彦右衛門 百姓佐右衛門						一一三			
15		(3)		後手昼休 先手昼休		渚村字三合蒔 木賊洞村字栢洞		岐阜県高山市 同 高山市		名主源藏 百姓吉右衛門						一一二			
16		(4)		()		高山三ノ町四丁目		同 高山市		本陣鍵屋与作 杉坂屋甚右衛門						久々野郷無數河村久々野宿成立。【後手】同所止宿前より、同郷久々野村、山梨村、宮村字出見世、宇鳥坂一ノ宮華表前を歴て。此より神社打上げ、社前迄測る、式内水無神社。又華表前より、字一ノ宮、宮川板橋(即神通川の上流なり)、久々野郷宮村・灘郷石浦村界に繋終。【先手】久々野郷宮村・灘郷石浦村界より、右引込一向宗速入寺、字杉本、字舌打、字常見寺、千島村字門脇、花里村、左引込古城跡、字松倉山、枝町方、高山町二ノ町通の内字河原町、宮川中橋に向、左欄干に繋。此より陣屋門前迄測る。又中橋欄干より、宮川中橋、三ノ町、右信州街道・左越中街道追分に打止。恒星測定		一一二	
						無數河村久々野宿		同 高山市		本陣間屋惣兵衛 百姓長作 百姓長吉						小坂郷小坂町(村)成立。【後手】同所止宿前より、門坂峠、同郷門坂村字栢原、松尾谷小流、阿多粕川、郡界、大野郡河内郷渚村字三合蒔、左筋違橋の跡(石垣)、阿多野川舟渡、渚の渡という。字小原、長淀村(一里塚の本)に繋。【先手】河内郷渚村、長淀村界一里塚より、左に薬師堂、木賊洞村字栢洞、引下村字船渡、久々野郷無數河村、無數河川橋、同村(駅場)止宿前打止終。		一一二	

山口でちよこつと伊能探訪

―戦国大名大内氏繁栄の痕跡を訪ねて―

室山 孝

二〇二三年三月のまだ桜開花前、吉野ヶ里遺跡・佐賀城（佐賀県）、九州国立博物館（太宰府市）、ゼンリン・ミュージアム（北九州市小倉区）、また山口県山口市を二泊三日の日程で訪ねた。金沢から北陸本線、新大阪で山陽新幹線、博多で長崎本線と乗り継ぎ、帰路もほぼ同じコースであった。ここでは二日目のゼンリン・ミュージアム、三日目の山口の旅を紹介したい。

二日目午後遅く、博多駅から新幹線で小倉へ。駅から徒歩二〇分足らずで紫川辺りにかかる木製の常盤橋（車通行止）付近に着いた。小倉は第七次測量の文化六年十二月二十七日（一八一〇年二月一日）、伊能忠敬測量隊が初めて九州に上陸した所である。常盤橋は九州測量の出発点となったため、平成十三年（二〇〇一）九月、ともに八角台形型の「伊能測量200年記念碑」（中心に一級



伊能忠敬測量200年記念碑と常盤橋

都市基準点第二〇〇一号を設置、伊能忠敬記念碑建設実行委員会寄贈）が造られた。

川の向側に見える高層ビル最上階にゼンリン・ミュージアムがあり、企画展「二世紀の日蘭交流―選ばれし国おらんだ―」が催されていた。常設展示室では伊能中図（東京国立博物館所蔵）の原寸大パネルがフロア展示され、各種の伊能図のほか忠敬の書状や測量日記、シーボルト事件の資料や赤水図を含む各種の日本図など、写真も多かったが展示は洗練し、キャプションも含め内容は充実していた。地図の博物館として本会会員には是非お勧めしたいと思った。見学後、受付横のカフェに入ると、大きな窓から眼下に小倉城や周辺の町並み、その向こうに瀬戸内海と対岸の眺望が広がっていた。



ゼンリンミュージアムの常設展示室

三日目朝、新山口駅（旧小郡駅）から山口線に乗る。この線は「SLやまぐち号」の運行で知られ、筆者も乗車経験がある。そのときは津和野が目的地であったため、見逃していた山口（かつて戦国大名大内氏の本拠地、現在県庁所在地）を今回訪

ねることにしたのである。

ここは画聖と称される水墨画の大家雪舟が四〇歳頃訪れて、後半生を過ごした所であり、代表作「山水長巻」（国宝、京都国立博物館所蔵）もここで描かれたことが知られる。

最初に訪ねたのは、築庭の才能もあったという雪舟の庭で知られる常栄寺で、市街地から北東にやや離れた山あいにあるため駅前からタクシーを利用した。門前に雪舟の銅像が建てられており、雪舟の画像（自筆画像を近世初頭に模写）も保管されているという。ここはもと大内政弘の母の別邸であったが、妙喜寺、妙寿寺と変わり、幕末期に常栄寺がここへ入った。「雪舟庭」（国史跡名勝）は山林を背景に中央に大きな池（無染池）、池の周囲に立石を配置、北に枯れ滝があり、簡素ながら豪放で「破墨山水画を立体化」したような風情を持つ。

次に雪舟がアトリエにしたという雲谷庵跡へ行った。永正三年（一五〇六）雪舟が没したのもこの地との説がある。雪舟没後、その画系は絶えたが、毛利輝元はこれを惜しんで肥前から画工を招き、雲谷庵跡を与えて雪舟の画風復興を目指した。この雲谷派は長州藩の絵師として栄えたが幕末には途絶え、明治十七年（一八八四）、郷土史家の発起によって庵が再建された。現在の建物は平成十二年に改修されたもので、入母屋風の茅葺き屋根に潇洒な佇まいを見せ、中には小さな囲炉裏が設けられ、床に雪舟画像（レプリカ）が掛かっていた。

ここからは徒歩で住宅街を抜け萩往還（後述）に出て、香山園付近にある瑠璃光寺五重塔（国宝）、移築された枕流亭、また洞春寺（山門と観音堂は

国重文」と見て歩いた。

瑠璃光寺の地にはかつて大内義弘の建立した香積寺があったが、応永六年（一三九九）義弘の戦死後、弟盛見が菩提を弔うため五重塔建立を發願し、竣工したのは嘉吉二年（一四四二）であった。塔の姿の美しさは全国有数のものとされ、大内文化の優雅を今に伝える山口のシンボルになっている。香積寺は毛利氏が萩に移るとき移転のため解体され、五重塔も解体の危機に陥ったが、山口町住民の嘆願によって残され、この地には瑠璃光寺が入って現在に至る。



瑠璃光寺五重塔

山口の町を見下ろすように高い台座に据えられた大内弘世騎馬像の横を通り、隣接する香山園に入ると、幕末期ゆかりの茶室露山堂と枕流亭（ちんりゅうてい）が並んでいた。枕流亭はもと萩往還筋の山口道場門前にあった本陣安部家の離れ（二階屋）であり、明治三十五年（一九〇二）にここへ移築された。幕末、薩長連合の密談に使われたといい、一階には木戸孝允・伊藤博文ら長州藩士と西郷隆盛・大久保利通ら薩摩藩士の写真が展示されている。本陣安部家は伊能測量隊の宿所

でもあった（後述）。

香山園に南接する洞春寺の地には、かつて大内盛見が創建した国清寺があったが、毛利氏はここに安芸国（広島県）から常栄寺（前述）を移し、幕末に常栄寺が現在地へ移ると、萩から毛利元就の菩提寺洞春寺がここに入る、という変遷があった。山門は国清寺時代のもの、境内左手の観音堂（本尊聖観音像）は、もと近辺にあった観音寺の仏殿で、永享二年（一四三〇）大内持盛の創建といい、近代に入り大正四年（一九一五）ここに移築された。いずれも室町時代の様式と雰囲気は今に伝える。寺には大内義弘・盛見・持盛の木像（いずれも法体、近世作）も安置されている。

洞春寺から坂道を下り国道9号線（旧山陰道）の交差点を越え、ゲンジボタルで知られる清流の一の坂川の橋を渡ると、再び萩往還に出た。萩往還は萩城下（萩市）と三田尻（防府市）を結ぶ街道で、江戸への参勤交代ルートとして整備され、伊能測量隊もこの街道を測量した。

萩往還沿い東側に築山館跡・八坂神社、龍福寺（大内氏館跡）と並んでいた。八坂神社（本殿は国重文）は大内弘世が京都から勧請した祇園社であり、七月の山口祇園祭では「鷺の舞」が奉納されるという。同神社境内地にある築山館跡（国史跡）は築山を含む広大な庭園がある迎賓館として十五世紀半ばに造られた。八坂神社は最初の勧請地から大内義興が永正十七年（一五二〇）滝町（山口大神宮の地）に移築し、明治維新のころ現在地に移され、祇園社から現在の名称になった。

龍福寺の地は大内弘世以来、代々政務を執った大内氏の館跡であり、大内氏が中国地域から九州北部に勢力を伸ばすに至り、山口は西日本の政治

の中心となり「西の京」と称された。天文二十年（一五五一）大内義隆は陶隆房らによって滅ぼされ大内館は焼失したが、義隆の七回忌にあたり、毛利隆元がこの地に義隆の菩提寺として龍福寺を建立したという。現在の本堂（国重文）は、明治十六年に大内氏の菩提寺であった興隆寺（山口市）の釈迦堂を移築したもので、境内の資料館には「大内義隆画像」等が保管されている。

山口の町は、大内義隆滅亡後に何度も戦火に襲われ、神社仏閣をはじめ大内氏の遺産の多くが灰燼に帰したが、毛利氏による復興により、かろうじて大内氏繁栄の痕跡を留めていると言えそう。さて、山口周辺での伊能測量隊の動きを『測量日記』で確認すると、第七次（九州第一次）測量の帰路、文化八年正月二十日（一八一一年二月十三日）、下関町で手分け。忠敬ら本隊（下河辺・永井・箱田・長蔵）は長府から山地ルートの吉田駅、秋吉村を経て萩城下へ向かい、途中大雪で通行難儀に遭遇した。一方、別手（坂部・青木・梁田・上田・平助）は無測量で赤間関、長府城下、厚狭市駅と進み、正月二十三日、小郡宿追分から測量を開始し北上。その日九ツ半頃山口道場門前に到着し、「阿部（安部）四郎右衛門」方に宿泊した。

翌二十四日別手は山口町内を測量。西門前小橋（現在の安部橋であろう）から東方へ、米屋町、中市町、大市町、堂ノ前、下立小路と来て、山陰道への分岐点となる女郎屋町に（女）印を残し、萩往還を北上して、飯田町、立小路、木町、宇野令境まで測量。そこから（女）印に戻り、山陰道を東方へ、龍福寺馬場、下小路、下金古曾町、上金古曾町、宮野村枝桜島、同中村、同七房村まで測量。下金古曾町に戻って茶人鍋屋又二宅で中食をとり宿所

へ戻った。

二十五日、別手は山口町を出立、宇野令境から萩往還を測量しつつ北上。一月二十九日、萩城下でいったん本隊と合流し、二月四日、再び手分けにより山間部ルート福井街道を測量し、二月八日、山陰道の徳佐市（とくさいち）で本隊と合流する。



毛利家大図「御両国測量絵図二番」（山口県文書館蔵）より部分転載。

一方忠敬の本隊は、萩城下から無測量で萩往還を南下し、二月五日、山口町に到着。西に隣接する湯田町で「温泉一覽」し山口町へ戻り、山口道場門前の本陣「安部四郎右衛門」方に宿泊した。忠敬は宿について「大家にて古松二樹有」と記し、夜は曇晴で天文測量を実施。翌六日、別手が印を残した宮野村枝七房村から山陰道を東北方へ測量を進め、篠目村、鷹巣村から、徳佐市で別手と合流。二月九日、国境野坂峠を越え、石見国（島根県）津和野城下に入った。



「道場門前橋ノ図」に描かれた本陣安部家（原図は山口市歴史民俗資料館蔵）

このように、山口町では別手が萩往還と山陰道の一部測量を行い、忠敬は宿所での天文測量と山陰道の測量であったことがわかる。湯田温泉では冷えた身体を温めたことであろう。

「毛利家大図」（毛利家に献上されたもの）には、宿駅や天文測量地★の記号がない。伊能中図（旧フランス中図）やアメリカ大図には山口町に★マークがある。

「本陣安部四郎右衛門」跡は、「道場門前商店街」の西端、一の坂川にかかる安部橋のたもと南側にあった。「道場門前」の地名は、中世創建の「山口道場」とよばれた時衆道場善福寺が所在し、萩往還筋に門前町が形成されていたためで、寺は明治期に廃寺となった。商店街の広場に「道場門前歴史絵図」という大きなパネル（山口道場門前商店街振興組合制作）が設置され、幕末〜明治初期の

「道場門前橋ノ図」（原図は山口市歴史民俗資料館所蔵）が掲載されていた。この絵は一の坂川西岸から萩往還にかかる橋（現在の安部橋）と川向いの本陣安部家を描いたもので、庭に大きな松が二本立つ。忠敬が目にした「古松二樹」はこれであろう。

安部家の跡地には現在、コープやまぐちどうもん衣料館が建っており、横手の川沿いに「史蹟安部本陣之跡」石碑（山口市教育委員会設置）がやや傾いて立っていた。安部橋を渡った向い側にも、枕流亭跡・安部家本陣跡を示す案内板（山口中心市街地まちづくり推進協議会制作）が建てられ、香山園に移築された枕流亭の写真と、「道場門前橋ノ図」が掲示されていた。



「史蹟安部本陣之跡」石碑

商店街で遅めの昼食をとり、最後に山口サビエル記念聖堂を訪ね、山口駅から帰途についた。

【参考文献】

- ・『山口県の地名』一九八〇年、平凡社
- ・『山口県の歴史散歩』一九九三年、山川出版社
- ・『西の京やまぐち』（山口市観光パンフレット）

松本清張「老十九年の推歩」を読む

柏木 隆雄

松本清張が亡くなられて三十年になる。

フィクション・ノンフィクション、推理小説などあらゆる分野に筆を走らせた作家である。

代表作は何か、と問われても、あれもこれもと十指に余る作品が想い浮かび決めかねない反面、埋れて光のあたらない作品もある。「老十九年の推歩」はその一つかも知れない。

推歩とは伊能忠敬の渾名である。

清張は記す。「忠敬が測量家になったのは佐原から江戸深川黒江町に居を移してからで忠敬は寛政七年（一七九五）五月から文化十一年（一八一四）六月、八丁堀亀島町に移転するまで、この深川黒江町には十九年間居住した。測量事業の大半は、深川黒江町の時代、測量家伊能忠敬は深川黒江町にしか存在しないのである。」

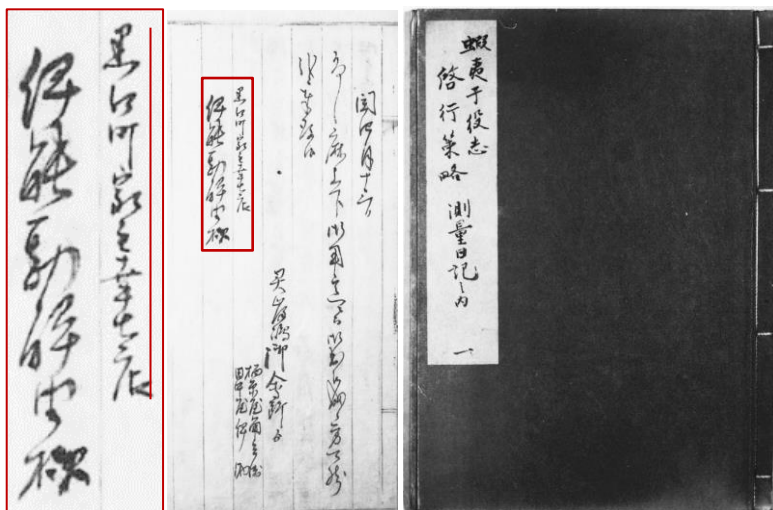
表題の「十九年」は、この黒江町の居住期間を意味している。続いて、大谷亮吉編著の「伊能忠敬」（以下大谷本という）に記述された「僑居」について言及している。私もこのことについては、当研究誌第八十二号で記述しているが「僑居」とは、広辞苑によると、寓居、仮住いのこと。清張は黒江町に十九年間も住んでなぜ「僑居」なのかと詰問しながらも、それなのに自分は深川黒江町のことは何も判っていない、手がかり一つないと記す。

井上ひさしは、「四千万歩の男」で、この黒江

町の住いを「幸七店」と記述し、文中にしばしば登場させている。この記述は正しい。忠敬が佐原から江戸への出府は、伊能家番頭の柏木幸七の深川黒江町店に住居を持ったからだ。忠敬は幕府からの測量許可の直前に、幕府へ請願、交渉を行っていた。そのやりとりを日記「蝦夷千役志」に書き残している。

寛政十二年閏四月十三日（松平信濃守屋敷への呼出し状）

測量許可証を手渡すから麻の上下を着用し御出被成候、の書状が靈巖島の蝦夷会所から届く。宛名は「黒江町家主幸七店、伊能勘解由様」



黒江町家主幸七店の記載

伊能忠敬測量日記第1巻

別の日の日記には、蝦夷への測量は船で行くか、の話もあり、幕府御用船、政徳丸の船頭、露木元右衛門が打合せに幸七店を訪ねている。清張はこの日記を見ていなかった。（大谷本にも四月十三日の日記の記載がない）

「老十九年の推歩」は、文芸春秋に一九八四年十月から三ヶ月に亘って連載された。

「四千万歩の男」の初版は、講談社から一九九〇年一月に刊行されている。井上ひさしは清張の忠敬評伝を読んでいたと推察される。また、「四千万歩の男」執筆の着想を得たとも思われる。

清張の現場主義は、黒江町探索にも発揮されている。佐原の旧宅を訪ね、記念館を見学するが、黒江町宅に関する情報が何も得られないと判ると、数日後には、江東区深川図書館や郷土資料館を訪問、また旧宅があったと思はれる門前仲町一丁目十八番地の現場に立つ。三十四度という炎天下の



佐原旧宅にて 松本清張氏と案内役香取禧良会員

日である。嘉永年間の江戸切絵図と昭和五年の東京市街図を持ち参考としながら往時の黒江町四十七番地周辺を縦横に歩いた。この辺りの描写は微に入り細に及んでいる。今でも建っている高さ一・五メートルほどの石柱「忠敬住居跡」の碑文に、清張は文学者らしい苦言を呈している。



黒江町（現門前仲町）住居跡の碑

「千葉県に生れ江戸に出て」という不均衡な書きぶり。高橋至時のことを一般には知られていない「東岡」の号を書くなど、この碑文の筆者は、現代向けのつもりで時代混乱に陥っている。困るのは、忠敬が八丁堀に移り住んでから「正確な日本地図を完成した」とある点で、これでは地元の黒江町の家に忠敬が十九年間に居住し、ここを根城に全国測量の旅をしたことには触れず、あたかも八丁堀で忠敬が正確な地図を完成したように書いている。と清張の言及は手きびしい。

この忠敬評伝の書き出しは佐原の古い町並みと環境・情景の描写である。そこを故郷とする私が恐れ入るほど、忠敬の江戸への出府前の背景が見事に記述されている。この評伝の第二項は忠敬の出自。九十九里の小関家に生を受け、その後、父方の神保家に移り、十七歳で佐原の伊能家に入夫

するまでの記述は類書と変わらず、入夫当時の伊能家の職域、経済状態等の説明も大谷本と差はない。但し、伊能家の実情を語るに、米穀商売、酒造商売等の営業内容、規模については、先代の長由の時代からの実態に迫り具体的な数字を挙げて執ようと思えるほどの字数を要して記述を行っている。次には米穀取引について、酒と共に江戸へ輸送する年貢米などの流通には利根川の水運を利用、天明の大飢饉には窮民を救済し、知行所の津田日向守の信頼を得、また地元の名主（後に村方後見）の地位を不動のものとした。名字帯刀を許されるまでの記述は類書とさほど変らない。

忠敬はなぜに江戸へ出たか、幼年時からの向学心と高名出世欲、家族関係等の記述は詳細に亘るがここでは割愛する。

清張の考察した忠敬の人物像に触れておこう。

「忠敬は五十歳まで働きに働いて放蕩一つしなかったのは、養子の身というのがその抑制の要素となつていふように思われる。もともと彼の性格は地味で遊びごとには不向きだったのだろう」

佐原時代の忠敬は、伊能家の事業を取り仕切り、朝夕に家運を盛り上げる努力をしていた商人であったが、あながち清張が述べているような「地味で遊びごとには不向き」な人間だったとは思えない。

いまも佐原の記念館に保存されている蔵書約五千冊の目録に眼を通すと、天文曆学、量地指南、算法指掌大成、算学啓蒙等の専門図書（約三百冊）のほかに、四書五経、本草綱目、孫子、老子、の国字解などの中国系図書（約七百冊）、加えて特記すべきは、忠敬の好みであったのか、歴史物、戦記物、英傑評伝、が多く残されており、大日本史、

武家盛衰記、甲陽軍鑑、太閤記、関ヶ原大全、源平盛衰記、三国史など数十冊単位の巻物が目録に記載されている。

文芸や紀行の書籍もある。特に唐詩に関するものが多く、唐詩選、詩書古伝、絶句解など（約三百冊）、紀行物では、寛永行幸記、東海道名所図絵、京名所図絵、東紀行、行脚文集等、忠敬の勉学一途から見れば異質の日本永代蔵やいまで言う喰べログの江戸筏、（忠敬は鰻好きであった）、それに趣味の一つだったのか、新選基経、御城碁、五十番などの囲碁の指導書もある。忠敬の江戸日記には、黒江町から八丁堀亀島町の桑原宅へ碁打ちに通っていたことが記されている。

このように蔵書目録から拾い出してみても忠敬にも読書三昧、遊興の「私」の時間も流れていたのである。

忠敬が入夫し、傾きかけた伊能家の家運を挽回したのか、の疑問は大谷本を引用している。「機敏なる商才を発揮し醸酒の傍ら米穀転貸の業を営み」の文言にも触れている。

「かくて忠敬は一方に於ては虚飾を去り、儉素を守り、無用の冗費を節すると共に、他方に在つては、着実にして且、機敏なる商才を発揮し、醸酒の傍ら米穀転貸の業を営み、或いは江戸に薪問屋を設けて大いに貨殖の業を講じた」と記す。前文の説明は伊能家の「家運挽回」が忠敬の偉業の一つになつていて、宣伝され過ぎた伝説である、と記す大谷本を肯定している。

この頃の説明に清張は、小島一仁の「伊能忠敬」の記述を紹介し、郷土史家の強みから大谷本にはない当時の伊能家の事情を判りやすく解説している。と付言している。

伊能忠敬は歴史上の測量家の名士をほしいままにして、文政元年（一八一八）四月十三日、八丁堀亀島町の家で没した。

「忠敬病い篤きに臨みて曰く、余の能く日本測量の大事業を成するを得たるは、先師高橋至時先生の賜物なれば宜しく先生の墓側に葬り以って謝恩の意を表すべし」松本清張は、この忠敬の遺言をもって本文を締めている。

大谷本の発刊から百年が過ぎ、この後も類書の多くが出版されたが、わが「伊能忠敬研究」も近く百号の刊行となる。

会員諸兄諸姉の熱心な探求心と英知により、多くの事実が浮びあがり、また多くの事例が紹介された。故人、先人への感謝の気持ちを大にして記念の百号を祝いたい。（了）

（柏木幸七子孫）

〈参考資料〉

- 松本清張全集文芸春秋社
- 文庫本「途上」細谷正允編双葉社
- 「伊能忠敬」大谷亮吉編著岩波書店
- 「四千万歩の男」井上ひさし講談社
- 「測量日記」佐久間達夫編著
- 記念館所蔵書籍目録佐久間達夫編
- 「伊能忠敬研究」第八十二号
- 〈写真提供〉
- 伊能忠敬記念館
- 前田幸子
- 香取禧良

「伊能忠敬笹山領探索の会」 丹波篠山市から感謝状授与

加賀尾 宏一

今年1月22日、丹波篠山市民センターで開催された歴史文化を活かしたまちづくりフォーラムにおいて、当日の事例発表①として、当会が平成23年3月にはじめた「伊能忠敬笹山領の探索の会」の活動が、今日まで12年間にわたった内容について報告する機会となりました。

そして、事例発表後において、丹波篠山市教育委員会教育長丹後政俊氏より、感謝状として「貴団体は伊能忠敬が行った笹山領の測量という史実の掘り起こしや市民への周知啓発活動などを通じて、地域の歴史文化振興に多大な貢献されました。ここに心から敬意と感謝の意を表します。」と記述され、同席のひなまつり実行委員会様とともに授与されました。

そして、この機会をとらえ、当日発表しました12年にわたる活動内容を、次ページのとおり「丹波篠山市歴史文化まちづくりフォーラムと活動報告」として取りまとめました。

探索の会活動を思い出す。はじめて伊能忠敬の偉業にふれたとき、地元に残されておらず、史料探しに戸惑う。その後、伊能忠敬研究の方々のご指導を受け、活動が進む。一方、伊能図が見つかり、地元研究者達の探索の意気込みが高まる。小学校にかけ伊能忠敬の篠山測量を伝える。また、次世代を託す中学1年生や小学6年生が夏休

みの自由研究に忠敬の標柱を撮影し発表する。お陰様で篠山の地域にとどまらず交流の場が広まる。ことに、香取市（千葉県）が発信された「北海道から九州まで忠敬ゆかりの地を訪ねます」のメッセージには、19カ所のゆかりの地が紹介されており、その中に、丹波篠山市の標柱「伊能忠敬笹山領測量の道」の12基が掲載されている。

令和5年3月



丹波篠山市 歴史文化まちづくりフォーラムと活動報告

主催 丹波篠山市、丹波篠山市教育委員会
とき 令和5年1月22日 ところ 丹波篠山市民センター
事例発表「歴史文化を活かしたい地域づくり」
伊能忠敬笹山領の足跡をたどる
～忠敬ゆかりの地として、語り継げるように～



フォーラムプログラム

13:00-13:10	開会
13:10-14:10	伊能忠敬と丹波篠山 「足跡をたどる」をめぐって 伊能忠敬 上級国神保 小園家
14:20-14:40	伊能忠敬と丹波篠山 「足跡をたどる」をめぐって 伊能忠敬 上級国神保 小園家
14:40-15:20	伊能忠敬と丹波篠山 「足跡をたどる」をめぐって 伊能忠敬 上級国神保 小園家
15:30	閉会

キーポイント 日本地図づくりに全国を測量する中、伊能忠敬は笹山領になぜ10日間も滞在して、緻密な測量をしたのか？

伊能忠敬の人物像・・・「人生二山」を実現
商才を活かし、地域に貢献する経営者から、学問の道へ。

1745年 上総国山辺郡小関村、小関(神保)貞恒の次男として誕生。
1755年 この年、父の実家小関村、神保家に引取られる。少年期は、僧侶や医者のもとで修業しながら、数学や医学の素養を身に付けていく。
1762年 下総国香取郡佐原村、伊能家の婿養子となる。
1769年 米の売買、酒造りなど伊能家の商売が盛んになる。
1781年 佐原村本宿組の家主として村役人になる。
1784年 佐原村をまとめる村方役見となる。
1786年 この年、大岡作で近在の人びとを飢饉から救う。
1794年 49才で隠居して家督を長男の景賢にゆずる。



地球の大きさ、形を知りたい、そして子午線(緯度)1度の長さの算定にはじまり、17年に及ぶ全国測量を成し遂げる。

1795年 50才で江戸に出て、天文学者高橋至時の弟子となる。
1800年～1803年 第1次・第2次・第3次・第4次測量
蝦夷地・本州東部・本州西部・東海・北陸を測量。
1804年 「日本東半分沿海地図」幕府に提出。この年幕臣となる。
以後西日本測量を命じられ、直轄事業となる。
1805年～1809年 第5次・第6次測量 畿内・中国・四国・大和を測量。
1809年～1814年 第7次・第8次測量 九州を測量。
1811年 3月8日 笹山領木津村から立杭村を測量、三田領へ向う。
1814年 2月3日～12日 笹山領全域測量。
1815年～1816年 第9次・第10次測量 伊豆七島・江戸を測量。
1818年 亀島町の自宅で死去。
1821年 「大日本沿海輿地全図」が完成し、幕府に提出。



-1-

第7次測量ルート図の篠山

1811年1月4日
大分県から中国地方に向け出発。
本州内陸部の主要街道を測量する途中、姫路から播磨街道を経て、3月8日、播磨清水寺境内を測量し、山崎領立町で昼食、その後三田峠を越え三田領へ向かう。

第8次測量ルート図の篠山

1813年11月4日
8日広島から松江、米子、岡山をまわり、姫路城下で越年し、翌正月から日本海に向け北上する。
西脇、生野、豊岡、福知山を経て、1814年2月3日早朝に、相原町から金ヶ坂を越え進入村に入る。
笹山領内を10日間密に測量した後、12日福住村を出発し、西野々村を経て、岩坂峠を越え天引村に向かう。

キーポイント 伊能忠敬と青山忠裕侯(笹山城第12代城主)の間柄に付度が...

忠敬 (1745～1818) 全国測量は1800年からはじまり、1811年と1814年に笹山領を測量。
忠裕 (1768～1836) 老中の要職を1804年から1835年まで務める。



活動の原点

1. 丹波篠山講座、郷土史家横川淳一郎氏による講演「伊能忠敬が測量した丹波の道」を受講。
2. 完全復元伊能図全国フロア展が大坂工業大学で開催され、来場されていた中央実業委員長星堂由尚氏(元国土地理院長)と面談。
3. 伊能忠敬測量日記「金ヶ坂峠、此峠の右方岩石陰隈の中・・・笹山領進入村」の記述をもとに、史実の探索をはじめ。



笹山領の測量にかかる史料

1. 伊能忠敬測量日記(国宝)全27巻中、第17巻(第7次)と第25巻(第8次)に記述。
2. 山島方位記(国宝)全67巻中、第62巻22～26ページに記述。
3. 大日本沿海輿地全図(国立国会図書館蔵)全14巻中、第4巻21、22、25、26ページに記述。
4. 伊能図下図(原稿図)(国宝)自撰津国馬郡広野村至丹波国水上郡遠坂村下図。
5. 大日本沿海輿地全図(伊能図)
 - ・伊能大図 第127号福知山、第136号山崎・三田(アメリカ議会図書館蔵)
 - ・伊能中図 第5回京都・大津、第6回京都(東京国立博物館蔵、NISHA蔵)
 - ・伊能小図 第3回西日本山崎、第4回(東京国立博物館蔵、セリニミュージアム蔵)
6. 木津村方丈書(木津自治会蔵)木津村庄屋三郎作成。
7. 園田家文書(関西大学博物館蔵)大山組大庄屋園田大助作成。



-2-

12年の活動内容

1. 笹山領を全域にわたって探索
 - 第1回(平成23年3月11日～24年4月2日)は、74,737m 158名参加。
 - 第2回(平成25年4月8日～27年10月24日)は、71,508m 141名参加。
 - 現在の地形図上に、伊能大図の測線を重ねると街道の形跡は、約3割が消えている。
2. 史実を伝え、広めるために出前授業を開催
 - 出前教室では、市内小学校9校で21回実施。
 - 地域・団体には、11グループで13回実施。
 - ぶらぶら歩こう会(ウォーキング、出前教室)では、6地区のまちづくり協議会で8回実施。
3. 200年記念ミニフロア展には800名が来場
 - 伊能大図214枚の内29枚と伊能測量機器(レプリカ)を展示。
 - 特別講演会「伊能忠敬の全国測量と笹山領の道」星堂由尚氏による講演。
4. ふるさと再発見、歴史街道をテーマにまちづくり
 - 標柱「伊能忠敬笹山領測量の道」12基の除幕式とイベントの開催。
 - 設置場所：追入、上板井、日置、草野、西谷、今田、北新町、大沢、宇土、福住、岡岡屋、糠ヶ坪
 - 標柱のGPS測量による緯度、経度成果表が提供される。
5. 五国の足跡フォーラムin笹山領を開催
 - 摂津、播磨、丹波、但馬、淡路の愛好家による活動報告、意見交換に160名参加。
 - 標柱12基をめぐるバスツアーを開催。参加者48名、ガイド役13名を含め27名が案内。
6. 「丹波篠山ふるさとガイドブック」(発行：丹波篠山市教育委員会)に掲載
 - 丹波篠山ふるさとガイドブック改訂にあたり、江戸時代欄に伊能忠敬の笹山領測量の様子を伝える内容を寄稿。
 - 「伊能忠敬が歩いてつくった笹山領の地図」の内容を3ページにわたり掲載。

-3-

主な写真



丹波篠山市が伊能忠敬ゆかりの地に選ばれる

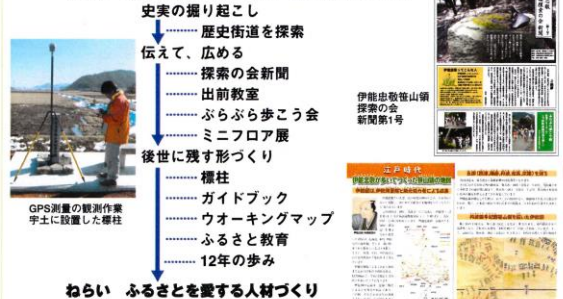
千葉県香取市から発信された「北海道から九州まで忠敬ゆかりの地を訪ねます」のメッセージには、丹波篠山市に設置した12基の標柱「伊能忠敬笹山領測量の道」が掲載されている。

全国には200か所をこえる記念碑があるとの情報。平成30年3月発行の香取市市勢要覧2018「没後200年記念特別企画伊能忠敬天を量り地を量る」に、忠敬ゆかりの地として19か所が紹介される中、伊能忠敬記念公園・銅像(千葉県九十九里町)、富岡八幡宮・銅像(東京都江東区)にならんで、伊能忠敬笹山領探索の会が設置した標柱が評価された。



伊能忠敬笹山領の測量、史実を後世に残すために

ねらい 郷土の歴史文化を育み、生きた教材づくり



交流促進により、歴史資産の活用を広める

伊能忠敬研究会
伊能忠敬記念館
香取市
五国(兵庫県)をつなぐ忠敬の足跡グループ
伊能忠敬ファン、歴史愛好家

丹波篠山ふるさとガイドブック



以上

令和5年2月 発表・作成者
伊能忠敬笹山領探索の会 加賀尾 宏一

-4-

伊能測量協力者

御子孫宅を訪ねて

佐賀県 馬場 良平

私たち歴史街道歩きのグループ「塚崎・唐津往還を歩く会」は、新型コロナウイルス感染症により、2年半ほど定例会を中止していましたが、昨年11月より再開しています。

まずは「伊能忠敬測量隊肥前国測量から210年！」と題して、佐賀県内3ヶ所で伊能測量隊の足跡をたどる「伊能忠敬測量隊の歩いた道」シリーズを開催しました。

11月は坂部隊が測量踏査した唐津・佐賀藩境の道を歩きました。

文化9年（1812年）9月10日の測量日記に「・・・佐嘉領桃川村方初、字宿山口留番所、長崎街道、伊万里道追分⑤印を残す・・・」とあり、宿山の口留番所跡には、肥前国測量から200年に当たる平成24年（2012年）に地元郷土史家・松永典彦氏のご尽力で「佐賀藩桃川御番所の冠木門」が建てられています。

ここでは平成25年4月、来佐中であった伊能忠敬研究会名誉代表渡辺一郎先生（故人）と松永氏による伊能談議が行われました。

（会報第88号で写真掲載）
12月は佐賀城下に入って来た伊能

測量隊が、淀姫神社や川上山実相院まで測量を進めた川上道を歩きました。

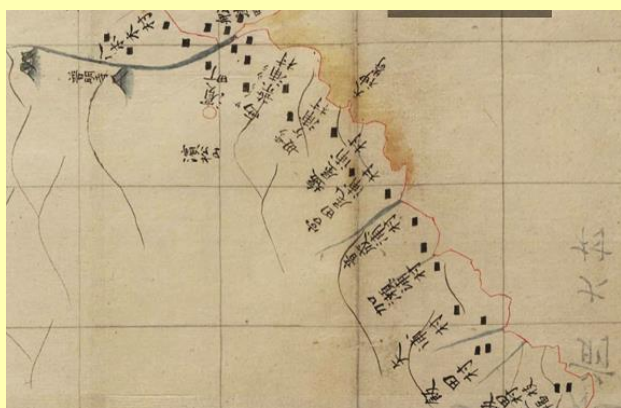


佐賀藩・桃川御番所冠木門

今年1月の例会は干満の差が大きい有明海沿岸の鹿島・七浦郷を歩き、複雑な海岸線を踏査した測量隊の足跡をたどりました。

文化9年（1812年）10月26日の測量日記に「・・・八本木村、浜町、村とも。浜川土橋巾十五間、浜川尻④印を残す。街道通斗一里四町、此方沿海、西葉浦村、母ヶ浦村、天神崎、塩屋浦村、宮田尾村字東分、音成浦村、海辺堤⑥印に打止・・・」とあり、「・・・昼休八本木船津町重治郎。後手は九ツ頃、先手は八ツ後に音成浦村へ着。止宿百姓太兵衛、別宿与右衛門、要八。此日御用状佐嘉と相届よし、江

頭伊兵衛持参なり。」と記し、27日の測量日記は「十月廿七日昨夜雨、終日降る。同所逗留」。28日の測量日記では「・・・肥前国藤津郡音成浦村土手⑥印方初、嘉瀬浦村、矢ノ浦村、西葉浦此矢ノ浦までを七浦と云・・・」と記してあり、西葉浦、母ヶ浦、塩屋浦、宮田尾浦、音成浦、嘉瀬浦、矢ノ浦を七浦と云っています。伊能図には七浦の地名が描かれています。音成浦には雨のため2泊しています。



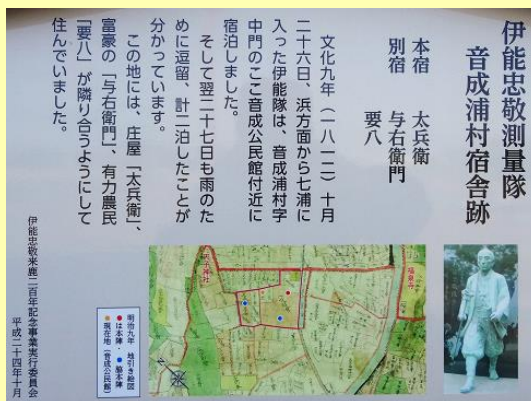
伊能大図第201号・大村 七浦の地名が描かれている

江戸時代佐賀本藩領であった七浦郷、多良山系と七浦海岸の扇状地に位置する音成浦には、測量日記に出てくる「別宿与右衛門」宅が残っています。中村與右衛門屋敷の住居群は

明治期の建物ですが、江戸時代からの庄屋屋敷の広大な敷地に堀と石橋が田園景観を醸し出しています。



中村與右衛門宅、堀と石橋



七浦郷・音成浦村測量隊宿舎跡案内板

中村與右衛門の御子孫中村良紀様は平成30年(2018年)4月に行われた「伊能測量協力者顕彰大会」にご参加していただいております。今回、お訪ねした時には、不在でお会いできませんでしたが、名門・中村與右衛門屋敷を守り、受け継がれており「中村與右衛門屋敷」は「22世紀に残す佐賀県遺産」に認定されています。



中村與右衛門屋敷前で記念写真

令和5年4月23日(日)「平戸街道ネットワークの会」の「平戸街道ウォーキング」が、3年振りに再開されました。私たち「塚崎・唐津往還を歩く会」と友好関係にある「平戸街道ネットワークの会」の再開であり参加して来ました。平戸街道は長崎街道との分岐点大村領彼杵宿から大村湾沿

いを北上して進み、平戸領内日ノ浦までの約62kmの街道です。今回の行程は大村領の彼杵宿から川棚宿までの約9kmの距離でした。ここでは緩やかな上り下りの道が続いています。大村湾の美しい景色を望みながらのウォーキングは心地よいものでした。

文化9年(1812年)12月朔日の測量日記には「...此方平戸街道、即海辺付両用、枝口木田郷、昼休郷土川口六右衛門、枝大音琴、街道海辺手分(印を残す...)と記してあります。この「郷土川口六右衛門」の御子孫宅は平戸街道沿い、大村湾を見渡す高台にあります。川口家は平家の土族の流れを汲み、代々庄屋を務めた、400年以上の歴史のある家柄だそうです。



伊能忠敬休憩之地顕彰碑の前で川口夫妻

川口家30代目御当主・川口正志様は平成30年(2018年)4月に行われた「伊能測量協力者顕彰大会」にご夫妻でご参加していただいております。自宅敷地内には「伊能忠敬休憩之地」の顕彰碑が建てられています。私は、今回の平戸街道ウォークに参加して、5年振りに川口夫妻とお会いすることが出来て感激いたしました。



伊能測量について説明する脳(みかづき)会長

ここでは「平戸街道ネットワークの会」の脳由典(みかづきゆうすけ)会長から伊能測量の説明があり、参加者は興味深く聞き入っておられました。脳会長は長崎県北部地域では、伊能忠敬研究会会員であられた平川定美様(故人)の後を継がれるような伊能忠敬研究者の一人です。

今回「伊能忠敬測量隊の歩いた道」歩く会開催や「平戸街道ウォーク」で伊能測量協力者御子孫宅2ヶ所を廻って見て、改めて「伊能忠敬」の全国測量の偉業が、地域の人々の協力で行われたこと、そして、その地域の人々が伊能図に描かれた地名を誇りに生きていらつしやることを実感しました。今後も「伊能ウォーク」の開催を通じて、伊能忠敬顕彰を行なっていくと思っております。

伊能測量協力者顕彰大会



左から川口正志・順子夫妻、故渡辺一郎様、中村良紀様

【ひとり言】

かつて長崎への旅は、有明海や大村湾の雄大な風景を眺めながら楽しんで来ていました。昨年開業の長崎新幹線の旅は、トンネルの旅であり、味気ないと感じるのは私ひとりでしょうか！

南日本放送テレビ番組に協力 ―門谷清次郎「薩隅見聞之覚書」 の活用―

室山 孝

二〇二三年三月八日、鹿児島県の民放MBCテレビで「どーんと鹿児島」謎の民謡まつばんだを追え！」が放送された。この番組は、一本のカセットテープに録音されていた屋久島の古い民謡「まつばんだ」が琉球音階で唄われていた謎を追い、屋久島では忘れられようとしていた「まつばんだ」の復興と普及に努力する地元の人々を紹介するものであった。

MBCテレビの七枝大典氏ら取材班が屋久島町立屋久島歴史民俗資料館へ赴いたところ、同館職員黒飛淳氏から、屋久島の古い民謡について伊能忠敬研究会の会誌に江戸時代の記録があるとの情報を得たことから、七枝氏はまずインターネットの伊能忠敬e史料館へ問合せ、同史料館の担当者から伊能忠敬研究会事務局に連絡があり、筆者が対応することになった。

「薩隅見聞之覚書」とは、第八次測量(九州第二次測量)に際し伊能測量隊に参加した忠敬の門人門谷清次郎の記録で、会誌九十六号に玉造功会員が初めてその所在を紹介し翻刻を

勧誘したところ、これに応えて平田稔会員(鹿児島県大隅地域の出身、熊本県在住)が九十七号に翻刻紹介されたものであり、筆者はその翻刻史料の校訂と口語訳等で平田会員に協力させていただいた。

この「覚書」には、伊能測量隊が屋久島滞在中に門谷清次郎が見聞した屋久島の民謡として「さんさ節」「山の供養」という二つの民謡が記録されていたので、筆者は念のために屋久島歴史民俗資料館に電話で問い合わせたところ、黒飛淳氏・竹之内隆氏より、これらの民謡がすでに失われていたことをうかがい、このことを史料紹介の最後に追記した。また、門谷清次郎の「覚書」が江戸時代の屋久島に関する貴重な証言を含むことから、伊能測量隊のことを知っていただきたいという思いもあって、同資料館に会誌九十七号を贈呈させていただいたのである。

なお、忠敬没後二〇〇年の記念誌『伊能忠敬日本列島を測る―忠敬没後二〇〇年―後編』第三章「全国記念碑・案内板めぐり」を見ると、二〇〇〇年六月、上屋久町で行われた伊能ウォークに合わせて伊能測量隊来島の記念碑「伊能の碑」が宮之浦に建てられており、測量隊の「御泊木札」が資料館に保存されているとの記載がある。

MBCテレビ取材班が門谷清次郎の「覚書」のことを知ったのは、屋久島歴史民俗資料館の職員黒飛淳氏からの情報であり、伊能忠敬研究会の活動が思わぬ形で社会的役割を果たしたことになる。忠敬自身の記録でなく、また測量に関する記録でもないが、測量隊員が残した記録がまた別の役割を果たす可能性を秘めていることをあらためて知ることが出来た貴重な体験であった。最後に、七枝大典氏から送られて来た放送のDVDに付

けられていた手紙を写真で紹介しておこう。

なお放送では、屋久島歴史民俗資料館に保管される伊能測量隊の宿札も紹介さ



MBCテレビ「謎の民謡まつばんだを追え！」より

伊能忠敬研究会
室山 孝様

お疲れ様です。
ご協力をいただきました「どーんと鹿児島～謎の民謡まつばんだを追え！～」の放送は3月8日、そして15日にはTVer配信も終わりました。

放送終了後に「興味深い内容であった」「子供の頃近くに住むおばあちゃんが歌っていた」などいろいろなところから反応があり、特に屋久島にお住まいの方からも多数、ご意見をいただきました。

また、今回は貴重なエピソードや、文書のご指導等ありがとうございました。
まさか、伊能忠敬の関係者の視点で「屋久島に残る琉球音階」にアプローチできるとは思ってもおりませんでした。

伊能忠敬一行が屋久島を訪れたことは県内でもそう知られている話ではないと思いますので、これをきっかけに隊の功績を知っていただく一助になればと思います。
本当にありがとうございました。

つきましては番組の同録(ノーカット版/CM含む)をお送りいたします。
お納めください。

暖かくなってきましたがお身体くれぐれもご自愛ください。

MBC 南日本放送映像メディア部
七枝大典

会員だより

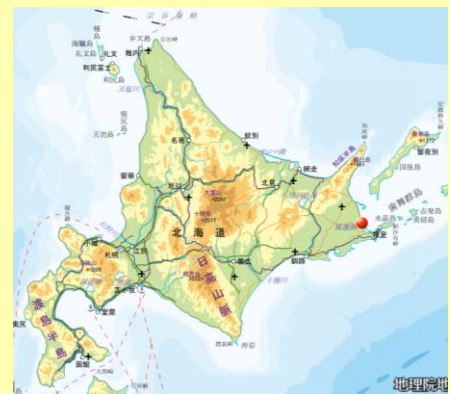
忠敬を詠ふ（四）

東京都 伊能 洋

北海道別海町にて
エゾキスゲ最東端の測量地



北海道別海町「第一次伊能忠敬測量隊最東端到達記念柱」



最東端到達記念柱の位置

呉市御手洗にて
島涼し忠敬泊てし家遺る

量程車にまたがって
国宝で遊びし日々や陽炎へる

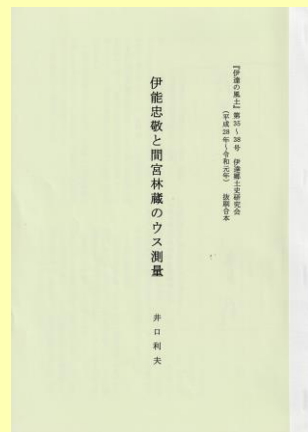


量程車（千葉県香取市伊能忠敬記念館蔵）

井口利夫著『伊能忠敬と 間宮林蔵のウス測量』

菱山 剛秀

北海道在住の井口利夫会員から『伊能忠敬と間宮林蔵のウス測量』という冊子を送っていただいた。



この冊子は、伊達郷土史研究会が発行している『伊達の風土』第35号から38号（平成28〜令和元年）に4回にわたって掲載された井口氏の原稿の抜き刷りを合本したものである。4回の構成は、1回目（上）で、伊能忠敬の寛政12年測量による測線と間宮林蔵の測量によるとされる幕府への上呈図の測線との違いを、2回目（中）と3回目（下）では、ウス（有珠）湾の北側の虻田から長流川付近の測線の違いを地形図上に示し、当時の地名や忠敬らが通った古道の位置を推定している。

4回目は補遺として、ウス湾の海図や江戸時代の伊能図以外の古地図を参照してウス湾付近の伊能図の測

線の詳細な位置や長流川流路の変遷とエントモ岬付近の海岸線の変化の関係を考察している。

報告【珠洲地震】

河崎 倫代

出身地の石川県珠洲市狼煙町に「能登さいては資料館」というミニ私設資料館を持っていて、伊能忠敬関係資料や緑剛埼灯台資料などを展示しています。5月5日の震度6強の地震では窓・壁が落ち、展示ケースも木っ端みじんになり、大量のガラスや壁土などを処分。閉館も視野に入っていた古くてガタのきいていた施設なので、休館にして金沢に帰ってきました。しかし珠洲市全域では、土砂災害、地盤の亀裂・陥没、家屋の倒壊・損壊など被害甚大です。群発地震は今後数年間は収束しないという専門家もいて、まだまだ不安な状況が続いています。少しでも珠洲市にお心を寄せていただければ有り難いです。



同夜の震度5強余震では、この「伊能忠敬像」も倒れてクシャクシャになった。

山武のスケッチ（二） 九十九里浜のイワシ漁

千葉県山武市 江口 俊子

ここ山武に東京から移住して二十一年になる。野菜、魚がおいしい。九十九里町片貝より週一回、わが家に来る天狗屋（鮮魚店）の魚は新鮮でとても美味。鰯、あじが中心である。一九〇〇年代は豊漁であつたが、近年は不漁と聞く。

その天狗屋の近く、作田川をはさんで、伊能忠敬さん誕生地、千葉県山武郡九十九里町小関がある。延享二年（一七四五）網元の小関五郎左衛門家の二男（幼名三治郎）として生まれる。六歳の時、母ミネが亡くなる。父貞恒は入婿であつたので、横芝光町小堤の実家神保家（本家）に、兄・姉を連れて帰った。

一人、小関家に残された三治郎だが、幼少の頃より父貞恒に読み書きを習い、小関家にあつた書籍を読み、習字の手本としていた。小関家は富裕であり、幼い時から高い素養を身につけることができたに違いない。

三治郎は、後の栗生（あお）の大網元、飯高惣兵衛（幼名清三郎）と出会って、生涯の友、理解者を得た。小関と栗生は三キロメートルの近くであり、父親同士が友であつた。惣兵衛は後に江戸北町奉行組与力給地の上総



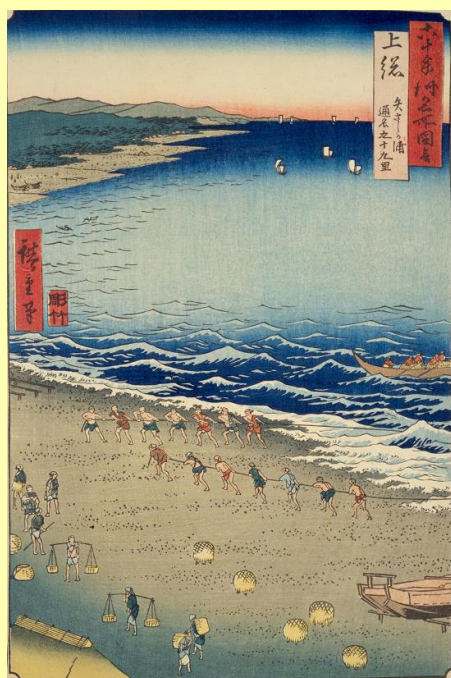
地方代官、近隣十八カ村の名主のまとめ役となる。又、学問好き、俳句を趣味とした文化人でもあつた。

当時、小関村の小関家は、小関納屋（現在、バス停に名が残る）と称された。『納屋』は漁業用の番屋、資材倉庫、干鰯・鰯粕の製品庫、加工場などの総称。それらのある地域を言う。『納屋』と呼ばれた所は、江戸に干鰯を送り、『浜』と名付けた所は上方に干鰯を送っていたと聞く。

三治郎は十歳まで小関家にいたが、その間、網元の生活を見聞したはずだ。網元は豪農であつたものが多い。区画では、浜・網屋・新田・畑の地主である。網元の使用人は、豊漁の時は水主に、不漁の時は農業の小作人として働いた。総がかりでする水揚げ、

日本各地への船出、浜の行事など、忠敬さんは未来に思いをはせていたのではないかと思う。

今回は、忠敬さんの生家小関家が網元をしていたイワシ漁にちなんで、天狗屋の庭先で作っていた目刺しを描いてみた。種類は背黒イワシ（片



「矢総上 名所図会 六十州名 重六」
（国立国会図書館デジタルコレクションより）
九十九里浜の地引き網漁は、船方として5、60名、岡者として約100名の労働者から構成され、主にイワシを捕獲した。

口イワシ）で、十二月から三月にかけて天日干しする貴重品である。

忠敬さんの頃は、大部分が鰯粕に加工されて全国に出荷され、農業の発展を支える肥料として珍重された。鰯粕の作り方については、『千葉県の歴史 通史編 近世2』に、「大きな釜で茹でたイワシを搾り器に入れて油を搾る。搾った後のイワシは野外の筵に運ばれ、砕いて天日に干した後、俵に詰めて出荷される。」とある。

【参考文献】

- ・『九十九里町誌』総説編
- ・『九十九里町誌』各論編上・下巻

※飯高惣兵衛と伊能忠敬については、木島利八「測量中の伊能忠敬に贈った飯高惣兵衛の漢詩について」『伊能忠敬研究』第二十号（一九九九）がある。

新入会員の自己紹介

北海道 齊藤 文大



今般、末席に加えていただくことになりました、函館市在住の齊藤です。どうぞ、宜しくお願い申し上げます。

自分が伊能忠敬という「名」を知るのは、中学校での歴史の授業でありましたが、正味のところ、その偉業を「理解する」のは測量士資格を取得するために通った、専門学校での授業を通してでありました。現代の測量機器や計算機、あるいは計算ソフトを使用するからこそ知ることができた偉業であります。

ここ十数年、中学生の「職場体験学習」に当たる、函館測量設計業協会の担当グループ（未来構想研グループ）幹事、あるいは代表として、次世代担手の発掘を究極の目標として活動

しております。測量の目的は、地図を作ることにありますが、その座学においては、地図の起源（メソポタミア文明）や、伊能図から始まった「大日本沿海輿地全図」に係る話をして、現代技術による地図と理論の上では変わらないことを伝えてきました。

1999年（平成11年）1月、伊能ウォーク第Ⅰステージがスタートし、北海道上陸にあたっては、亡き父がサポート部隊の先頭に立って、本業以上に熱心に活動していたことが思い出されます。その活動のお陰か、記念展示で使われた大日本沿海輿地全図の一部（北海道地区）を拝受することができ、現在でも弊社応接室に社会貢献活動のシンボルとして掲示させていただいております。

また、第Ⅱステージから2001年元日のゴールまで、折に触れて、母を連れ立って伊能ウォークに嬉々と参加させていただいておりましたことは、ひとえに故・渡辺一郎様をはじめとする、伊能研究会会員の皆様のご厚情によるところと感謝申し上げます。また、本年1月には母も亡くし、周辺の整理を進めているところですが、近くに住み、家業としての測量屋を引き継いでいる身の上として、両親が生前お世話になった皆様に、可能な限りではあります、協力させていただきたい、またそれが、親不孝者の亡き両親への罪滅ぼしになるの

ではないかと、「二世」会員として伊能研究会に入会させていただきました。

幼少の頃より、両親に義理と人情によつて「生かされている」ことを叩きこまれてきましたが、何分にも若輩、未熟者でございます。ご迷惑をおかけすることもあろうかと存じますが、皆様のご指導ご鞭撻を賜りながら精進して参る所存です。何卒、宜しくお願い申し上げます。

神奈川県 佐藤 悦子



初めまして。

今年度から入会します神奈川県川崎市在住の佐藤悦子と申します。私の趣味は旅行・茶道、数年前から始めたゴルフです。また、歴史と御朱印めぐりにも興味があります。

肝心の伊能図については、まだ一般的な知識しかありません。それなのに何故入会したかと申しますと――

昨年六月、測量の日のイベントで初めて「伊能忠敬研究会」の事を知りました。偶然は必然であり、必然は偶然であると言いますが、その日が測量の日とかイベントがあるとか全く知らず、仕事帰りにふと立ち寄りました。正直な感想は、「地図って面白い！」。地図と文明、地図と芸術との関連性を調べたら、もっと面白いだろうなと思いました。

その時また、以前読んだ井上ひさし氏の『四千万歩の男』、沖方丁氏の『天地明察』を思い出しました。その当時の方たちの使命感、熱意、チャレンジ精神に感銘を受けた事思い出しました。今思えば、何か小さな明かりが、私の心に灯ったような気がします。

イベント会場で印象に残ったのは伊能忠敬像です。「さあ、行こう」と誘ってくれるような感覚を覚えました。

そして今年、私も何か新しい事にチャレンジしてみたくなり、入会を決めました。私の最初の一步は、まず富岡八幡宮に行き、伊能忠敬像にご挨拶する事でしようか。

会員の皆さまには、これからご指導を頂きたく、宜しくお願い致します。

埼玉県 雉岡 恵一

はじめまして。雉岡恵一と申します。私は本庄市児玉町に在住しており、本庄市文化財保護審議会委員をしています。

現在の研究課題は、北武蔵（現埼玉県児玉郡及び本庄市）に出自を持つ、鎌倉時代から室町時代にかけての武蔵武士の事績についての追求です。具体的には、武蔵七党に属する児玉党・丹党（たんとう）・猪俣党（いのまたとう）の鎌倉幕府御家人の武士たちです。ただし、これらの武士の関東地方での史料は少なく、むしろ、当時の京都や西国（中国地方や九州地方）に移り住んで政治的・軍事的活動をしていた記録をしめた史料の方が現存しています。例えば、明治時代の陸軍軍人である児玉源太郎の祖先は、鎌倉時代のモンゴル襲来の時に防衛のために幕府の移住指令に従い、武蔵国から安芸国に西遷（せいせん・西国移住）しました。そして、室町時代には毛利元就などとともに安芸国の国人（こくじん）領主に成長し、その後、戦国大名毛利氏の家臣となった武士と思われる。

さて、江戸時代に話題を移します。本庄市出身の偉人は盲目の国学者「塙保己一（はなわほきいち・一七四六年～一八二二年）」です。彼は十五歳で江戸に出て、三十四歳から四十

一年間をかけて『群書類従』を完成させました。その時、保己一は七十四歳でした。

そして同じ時代に生きたもう一人の世界的な偉人が「伊能忠敬先生（一七四五年～一八一八年）」です。みなさんご承知のように、先生は五十歳で江戸に出て、五十六歳の時、正確な日本地図を作るために最初の測量旅行（東北地方から北海道の太平洋沿岸の測量）に出かけました。その後、十七年間をかけて通算で十回の全国測量を命がけで行います。忠敬先生は七十三歳で亡くなりますが、その三年後の一八二一年に弟子たちが『大日本沿海輿地全図』を完成させました。まさに、この年は塙保己一の没年です。私の一つのロマンは、この二人の偉人が、「江戸のどこかで出会っていた」という史料なり記録が発見されることです。

最後に伊能忠敬先生と私の出会いを述べます。小学四年生・五年生の時です。私は父の仕事の関係で千葉県



佐原市立佐原小学校に在学させていただきました。佐原小学校の校歌の一節「忠敬翁がしいた道」の文句は鮮明に記憶しています。今回送付させていただいた写真は、小学校五年生の三学期、おそらく昭和四十四（一九六九）年の二月頃に、佐原から東京への転校が決まった時、当時の担任の先生が記念になるからと言って、佐原小学校の校庭にあった伊能忠敬先生像の前で撮ってくださいった写真です。私の一生の宝物です。大変感謝しております。多弁を労して失礼いたしました。今後ともよろしく願っています。

滋賀県 寺澤 真樹



はじめまして。令和五年三月から入会させていただいた滋賀県在住の寺澤真樹と申します。

以前より地理や歴史には興味があったのですが、あるとき京都の書店で伊能大図の展示があり、自分の故郷の地にも伊能測量隊が訪れていた

ことを知り、その行程やその時の模様などを詳しく知りたいと思うようになりました。

その後、両親の介護に専念するため28年勤めた前職を退職したのを機に、合間時間に地元の地の利を生かして、近場の測量隊の足跡をいろいろ探究したいと考えております。因みに退職時の年齢は、奇しくも伊能忠敬さんが蝦夷地への測量に出発されたのと同じ55歳、何だか次のステージに踏み出す私の背中を押しているように、などと勝手に考えております。

それにしても今日、私たちが認識している日本列島の姿を初めて紙の上に形にして現した伊能図を拝見すると、その出来栄えの凄さと、飛行機も人工衛星もない時代に徒歩で距離を測られた苦労を想像すると言葉では言い表せないものがあります。

入会後の抱負としては、当初の目的どおり、まずは自分の住む琵琶湖の東岸地域における伊能測量隊の活動について、地元民の目線でアプローチできれば、そして可能ならば、都合琵琶湖を2周したことになる近江国全体の測量についても俯瞰的に見てみたいと思います。

図らずも節目の第一〇〇号で自己紹介させていただくことになってしまいました。今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

事務局からのお知らせ

二〇二三（令和五）年度

総会報告（富岡八幡宮）

令和5年度伊能忠敬研究会総会が5月27日、4年ぶりに開催されました。総会に先立ち当会が製作に協力した映画『大河への道』を上映。来賓の伊藤友則香取市長の挨拶、活発な意見交換、和気藹藹の懇親会と、大変充実した総会になりました。

総会議事の概要

出席者 28名／一般会員数 160名
委任状 94通

議決

第一号議案 令和4年度事業報告
第二号議案 令和4年度決算報告
第三号議案 令和4年度監査報告
第四号議案 令和5年度事業計画
第五号議案 令和5年度事業予算
第六号議案 令和5年度役員改選
いずれの議案も賛成多数で承認、可決されました。

議案の概要（事業関係等）

二〇二三（令和四）年度 事業報告
1. 会員動向（22年4月1日～23年3月31日） ※敬称略
・会員数 名誉会員1、一般会員15
7、購読会員3、特別会員1

・入会者（一般会員）8名 兒玉晴子、水田清志、土居正博、中島正太、丹羽俊二、宮田幸枝、雉岡恵一、寺澤真樹
・退会者（一般会員）7名 松尾紀成（逝去）齊藤サダ（逝去）他5名
・現在数（23・4・1）入会者3名
一般会員160・伊藤友則 齊藤文大 佐藤悦子

2. 事業等

総会 紙上総会
22年5月18日～5月31日（必着）
理事会（※全てメール会議）
第1回 22年5月15日～17日
第2回 22年6月10日～13日
第3回 22年9月18日～21日
第4回 23年2月28～3月5日

会報発行

第97号（76頁 6月20日発行）
第98号（60頁 10月30日発行）
第99号（68頁 2月28日発行）

主催事業

『地図最前線展』見学会
7月26日 神奈川県立歴史博物館
三康図書館「伊能忠敬実測原圖」調査
6月30日 星埜特別顧問他

協力事業

「くらしと測量・地図展」
6月1日～3日 新宿西口広場
主催「測量の日東京地区実行委員会」
映画『大河への道』5月20日公開
協力・伊能忠敬研究会

後援事業

「地図展2022地図と空中写真で見る日本海の雄都 新潟」
9月27日～10月5日 新潟県民会館
感謝状受贈「測量の日における功労者感謝状」国土地理院長より贈呈
6月3日「贈呈式」国土地理院
報道・番組への対応（主なもの）
22年5月20日『歴史道』大特集「伊能忠敬と江戸を往く」朝日新聞出版
22年9月18日『号外 スクープ砲』BS 東急松竹 出演…星埜特別顧問
23年1月25日『NHK歴史探偵』出演…星埜特別顧問、菱山代表



2023(令和5)年度 伊能忠敬研究会総会 於：富岡八幡宮

二〇二三（令和五）年度 事業計画案

1. 総会 23年5月27日 富岡八幡宮

2. 理事会

第1回 23年5月（総会準備）
第2回 23年6月（総会承認事項確認）
第3回 23年9月（事業実施状況検討）
第4回 24年2月（次年度準備）

3. 会報発行

100号（6月発行）
101号（10月発行） 102号（2月発行）

4. 主催事業

（1）『伊能忠敬研究』第100号記念事業の検討・準備
①会報第100号（記念号）の発行
②100号記念「会報索引」の作成

（2）各地域での事業への支援・相談
5. 後援・協賛事業等

（1）地図展協議会主催「2023 地図展」への協力等
（2）伊能忠敬銅像建立計画への協力
（3）その他、要請があった事業について検討のうえ対応する。

二〇二三（令和五）年度 役員改選

1. 理事

【新規】井上健（埼玉）
狼 芳明（神奈川） 奥永渚（福岡）
柏木隆雄（千葉） 中塚徹朗（北海道）
室山 孝（石川） 【再任】井上辰男（福岡） 玉造 功（千葉） 堀野正勝（茨城） 前田幸子（東京） 計10名

2. 監事

理事の互選による役員の選任

【役員】代表理事…堀野正勝、副代表…柏木隆雄、事務局長…狼 芳明

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（24字×3段または28字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち

本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

写真 一般的にJPG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350dpi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmと350dpiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラやスマートフォンによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありません。

デジタルカメラのデータ仕様がわからない場合は、L判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル（JPG形式またはTIFF形式）にしてください。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくはホームページ <http://www.inoh-ken.org/> を参照）

送り先

・電子メール添付の場合 kaiho@inoh-ken.org
・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

- ・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
- ・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って会誌及びホームページ掲載の許可を取っておいてください。
- ・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
- ・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
- ・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。本誌に掲載された記事の著作権は、伊能忠敬研究会に帰属することとします。他誌等へ転載する場合は、事務局に連絡して許可をとってください。

次号（第101号）は2023年10月発行、原稿締切は8月31日です。

皆様の投稿をお待ちしております。

伊能忠敬研究会入会の御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどこまでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

- ①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行
- ②例会・見学会の開催
- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）

事務局メール mail@inoh-ken.org

郵便振替口座 〇〇一五〇六〇七二八六一〇

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

編集後記 ◇本誌98号でお知らせした内容と若干異なるが、100号の発行に漕ぎつけたのは、会員諸氏のお陰と感謝申し上げます。100号までの道程には、大きな変換点があった。

◇一つは、7号で会誌の名称が「伊能図探究」から「伊能忠敬研究」に変わったこと。もう一つは、62号からフルカラー印刷になったことである。もう一つ付け加えるとすれば、第64号から会誌のサイズがB5判からA4判に変わったことが挙げられよう。◇この間に編集体制や編集担当も変わり、バトンを繋いで来た。◇62号から12年にわたり、ほぼ同じ体制で編集を続けて来たが、100号を機に編集体制も一新する。101号からどのような変化が起こるのかまだわからないが、新しい会誌の編集は次の体制に委ね、さらなる進化を期待したい。◇今後も『伊能忠敬研究』が末永く続くことを願って、次の担当に引き継ぐことにする。H